

顔面偏差値だけでランク付けされる世の中で反抗する三人の物語り……。

ピピッ。

あなたの顔面偏差値がんめんへんさちはBマイナスです。変動なし。おつかれさまでした。

いつもと変わらぬ機械音と、表示され続ける文字に嫌気がさす。

「Bマイナスね、変わんないかあ……」

世の中は顔面偏差値によって優越がつくことは、当たり前。

顔がよければ優遇され、顔が悪ければ不遇な扱いを受けるのは仕方のないこと。

同じ会社に、同期で入社しようとも。

顔が良いものは早く出世できるし、給料も高い。

顔が悪いものは中々出世できずに、給料も低い。

『そんなのおかしい』

そう言った人はいない。

それが当たり前のこの世界では、顔が良く生まれてきたことも、その人の生まれ持った『才能』なのだから。評価されて当たり前なんだ。

S プラスからC マイナス。

ランク付けはこの世を公平に保つために必要なのだ。

顔がいいものは、その顔で人々を幸福に導いている。顔がよく生まれてきたという素晴らしい実績を持っている。

顔の悪いものは、顔のいいものに感謝をしよう。

それが、普通。

それが、当たり前。

それが、世の中だ。

でも。

本当に、顔だけが全てなんだろうか……。



高くそびえるホテルの屋根から、厨房で撮った写真と食材の購入記録を下に溜まっていく人の波に向かって投げる。

下から照らされる光がまぶしい。だが、まだここを離れるわけにはいかない。

『トン、トン、トン』

耳につけたピアスから鳴った軽い三回のノック音に、小さく頷く。

両手を大きく広げて、自身の存在を下に見える人々にたらしめず。そして飽くまで自分は司会者であるように、余裕をもって細く息を吸う。

「さあ、真実を皆様にお届けしましょう！」

マイクに拾われた自分の声が、夜の街に響き渡る。

「ここにある資料に書かれているものが、このホテルのレストラン。『シュペルブ』の実態だ」

不恰好に上がる口角を何とか落ち着けて「なんてことだろう」と言葉を漏らし、残念そうに俯きながら額に片手を添えて、首をゆったりと振る。

ここは舞台。

ひどく滑稽で、どうしようもない世界を作り替えていく喜劇だ。

おめでとう、ここにいるすべての人よ。君たちは僕たちの一步の証人となったのだ。

さあ、この異常な世の中に反攻の時間だ。

ばらまいた写真は、すべて『シユペルプ』の罪の証拠。

三本の指に入るほどの旨さを誇るレストランとして有名なシユペルプは、実は食品偽装をしていた。

食品偽装をしながらレストランで三本の指に入ると評価されるわけがないと思うだろう。しかし、できるのだ。

なぜならシユペルプの料理長は顔面偏差値がSであり、さらにレストランのランクをつける調査員の買収をしていた。

調査員と幼いころ同郷だった彼は、その顔面偏差値によって評価が甘くなること、気づかれても大きな罪にはならないことを知っていた。

彼らは協力してレストランの評価と食品の偽装を行った。高級な食品を偽装することで浮いたお金は自身の懐に入れていたのだ。

資料を見て事実を聞いた人々の顔には『困惑』『怒り』『不信』『疑惑』代わるがわる色んな感情が浮かぶ。「あんなに顔のいいひとがっ」なんて言う者がほとんど。

静かだった民衆は「ありえない」と零し「嘘を言うな」と叫ぶ。そこにいる誰もが「こんなものは偽証だ」「証拠になんかならない」と料理長を庇った。

人々の言葉は一つ一つを判断できぬほど混ざっていく。抗議の声は大きくなり、やがて雑音としか捉えられなくなった。

では、そこにスパイスとしてちよつとした音声を通してやろう。

見せつけるように、たつぷりと時間をかけて天高く掲げた右手で指を鳴らせば、スピーカーから響くのは汚く濁った欲望。

『客も馬鹿舌ばかりだ、こんなのに気づかぬえのかよ！ あんな奴らに本物なんかもったいねえ！』

その声は料理長のもの。

不細工な高笑いが幾重にも交じり夜の街を駆けていく。

有名レストランの料理長として頻繁にテレビにも出ていた彼の声を覚えている人も多いのだろう。

表情に『怒り』が多くなってきた。

『トットトン』

ピラスからの軽快なノック音に反応してカウントする。九、八、七、六……。

「五、四、三、二、一い！」

カウンタと同時に勢いよく開いたのはホテルのエントランスのドア。

ライトアップされたそこに、床に手をつけて四足歩行の獣ようになって出てきたのは、騒動の中心人物。料理長と調査員の二人。

「さあ！ 主役達の登場だ！」

私に向かっていた雑音が怒号へと変わり、言葉の刃は鋭く研がれ二人に襲い掛かっていく。

料理長と調査員に多くの人々が詰め寄っていくのを見届けて、暗がりにもつれた。

「待てえええ！」

治安維持部隊ちあんいじぶたいの騒がしい叫びが聞こえてきたが、下でうまく足止めをしてきているの  
だろう。足音は一つも近づいてきていない。

屋根を飛び移りながら人のいない路地に降りる。

さて、この後はアジトで合流の予定だったかあ。

怠い体に鞭打って手早く服を変え、仮面を外して大通りを堂々と歩く。人々の視線は大  
混乱となった、ホテルの方に向いている。

幸薄そうに猫背でゆったりと歩きながら、タバコを啜えている自分をまさかあの騒動を  
起こした張本人『レヴォルト』の『シャル』だと思ふ人はいない。



タバコの煙が空に溶けていくのを見ながら、あの料理長はやはり馬鹿だと思ってしまう。

安い食材で食事の提供をしていたのに、今まで誰にも気づかれなかったのは、料理長の腕は確かなものがあつたからだ。

偽装ではなく、堂々と『安くてうまい』を売りにいけば、よかつたのに……。いや、顔面偏差値が高い彼にとって、それはプライドが許さなかつたのだろう。

「ほんつと、もつたいないねえ」

口に広がる苦みが感情に煽られて強くなつた気がした。

／＼／＼／＼／＼／

「ただいまあ」

木製の扉は開けようとドアノブを下げただけでギィと鈍い音を立て、押し込めば付けられた小さな鈴が軽く鳴つた。

中に入れば薄暗い家の中で唯一の光が階段の上から漏れている。階段を登れば、その光が一番近くの部屋からだと分かった。

トン、トントン。リズムを刻んでノックは三回。

「ただいまあ」

もう一度先ほどより大きな声を出しながらドアを開けた。急に飛び込んできた眩しさに目を細める。

瞬間、僕を包んだのは、紅茶の温かな香りと甘い焼き菓子の匂い。

「おかえり、シャルちゃん。よかったら食べてね」

部屋の中にいたのは、紅茶とスコーンを用意してくれていた、ゆきちゃん。

彼女はもう入浴も済ませたようで、一つにまとめられたその黒髪は少し湿っているのが分かった。

「ありがとう」

落ち着いた空気の中で、ゆきちゃんの鼻歌だけが反響する。清楚で男の僕より強くて、顔面偏差値もAマイナスと高い。

器量もよくて、性格も優しく温厚。まさに理想の女性といえる。

ゆきちゃんみたいな彼女が僕にもいたらなあ。

ふと、下心でもなくただの気持ちとして、そんな考えが浮かべば、首に細い何か絡みついていた。

「んふっ。シャルきゅんっ、人の婚約者をジッと見すぎじゃなあい？」

首に巻き付いたワイヤーが緩まったり縮まったりを繰り返す。頭が動かせないで、背後にいるワイヤーを掴む彼の手を叩く。

「マウちゃん、誤解だからっ」

「誤解かなあ」

ワイヤーが少しずつ縮まっていく、頬に流れる汗が首にめり込むそこに浸透する。

なにか弁明をつ、口を開いたところで『それでは次のニュースです』と急にキャスターの少し張り詰めた真つ直ぐな声がした。

今までついていることさえ気づかなかったテレビに目を向けると、そこには先ほどの自分の姿が映っていた。

『さあ、真実を皆様にお届けしましょう！』

芝居がかった声に、人目を惹く大きな動作。今回の舞台は歴代最高の出来と言えるだろう。

『レヴォルトのシャルと名乗る男は、某レストランの不正を訴え、現場を混乱させたまま姿を消したそうです。治安維持部隊が後を追ったようでしたが、現在も男は捕まっていません』

ワイヤーが緩まった隙に逃げ出し、紅茶を持って反対の椅子に逃げる。「にげたあ」なんて男のくせに可愛らしい顔をわざとらしく膨らませて怒るマウちゃんから距離をとって、視線をテレビに戻す。

『レヴォルトには他にもメンバーがいると言われていますが、正確な情報は掴めていないそうです』

ゆきちゃんがくれた美味しい紅茶を一口飲んでいる間に、ニュースは事件の内容からどんどん離れていく。

『レヴォルトに対抗して、治安維持部隊の中でもレヴォルトの対応を主にする組織を作ろうという動きがあるようです』

結局そのまま、治安維持部隊の最近の功績の話へとニュースは変わっていった。

治安維持部隊の高顔こうかん面偏差めんへんさち値の奴らが訓練している様子やインタビュに答えている映

像が流れだしたところでチャンネルを変える。

だが、他のチャンネルに変えても治安維持部隊の話や最近作られた塗料の話などの興味のない話題しかない、治安維持部隊を褒め始めた司会者を横目にテレビの電源を落とす。

「あれだけ大きく騒げばさすがに報道陣も見過ごせないみたいね」

「ホントに。まあシャルルのことしか言っただけだったのは不服だけどねえ」

ゆきちゃんとマウちゃんはニヤリとせつかくのAランク代の顔を歪めて、笑い合っている。

二人がこちらを向いてきたのに自分もニヤニヤと笑い返してビールの代わりにみなみ注がれた紅茶を掲げれば、二人も同じようにティーカップを掲げた。

「レヴォルトのこれからの活躍と顔面偏差値による偏見の打破を願って！ ばんかーい！」

「ばんかーいー」

三つのティーカップのぶつかる音が、気持ちよく部屋中に響いた。



レイ・S・リシャル。

ごくごく普通の一般家庭に生まれた一人っ子。たった一人の可愛い息子ということもあり、両親や親しい間柄の人からは猫かわいがりされていた。

『可愛い、可愛いねえ。世界で一番かっこいいよ』

そんな言葉を常にかけられ続け、自分の容姿が周囲よりも良いという自信があった。

十歳の時に初めて行われる顔面偏差値調査。

顔面偏差値は上からS、A、B、Cの四ランク代あり、さらにそこからSプラス、S、Sマイナスというようにプラス、中間、マイナスで細かく評価される。

Sプラスはこの国の中に十人しかいないほど、珍しく貴重な高い顔面偏差値だ。そもそもSランク自体が街に一人いるかいないかくらいの確率だと言われるほど少ない。

Cマイナスも同様に国で二十人ほどと言われるくらい少なく、一番多いランクはB。

顔面偏差値はSプラスを上にしてCマイナスを下に凶に起こすと、その人数差はひし形になっている。

人は大人になるにつれて、顔立ちが整って完成されていく。だから、十歳の時の顔面偏差値から大人になっていくうちに一つ二つプラスになる人が多いのが普通だ。

ただし、それはBランク以上での普通。Cランクの者は努力しようと成長しようと上手くいかないことが多いというのも、この世界では常識である。

自分は、なんの根拠もなかったが、俺は恐らく低くともBプラスだろうと思っていた。

子供でありながらA以上をとれる子など、本当に極わずかだ。それこそ数年に一度いるかないかレベルである。

周囲から『可愛い』『かっこいい』と、もてはやされているが、そこまで特別だと感じていない。だから、中の上が妥当。

そう思っていた。

だが、現実には厳しい。

顔面偏差値検査終了後。

湧き上がる高揚感に笑みを浮かべる俺に言い渡された結果は『C』。

下から二番目、プラス判定すら付かない。

その時、親からの言葉は所詮<sup>しよせん</sup>、親バカの眼鏡がつけられたもので世間一般の解釈とは違うのだと、十歳という年齢で思い知らされた。

自分は特別な存在でもなく、特別な存在にはなりえないのだと。この世の中に絶望すら覚えた。

仲の良い幼馴染で親友の彼は、十歳でありながらSマイナスになったらしい。

翌日、学校に行けば話はそればかりで、親友の周りにはBランクの評価が出た子達が群がっていた。

俺は親友に近づけなかった。

今まで隣に居た彼とは、それから自然と話さなくなつた。

顔面偏差値が違いすぎる彼と俺が一緒にいることは違和感しかないことなのだったから。

それが、普通だった。

それから八年。



諦めきれず、ずっと努力をし続けた。美しく見られるために、髪や肌はもちろん、体型にも気を付けて顔面偏差値の向上を目指した。

Cだった顔面偏差値は、努力の甲斐あってか『Bマイナス』に。何とかBランクに入れた。

しかし、それから顔面偏差値の評価は上がることなく『Bマイナス』でぴたりと止まった。それでも『もう少し』『せめてBになりたい』と頑張っていたが、評価は全く変わらなかった。

悩み、ふさぎ込んでいた日々の中。

十九歳を目の前に、俺はあることに気づいた。

自身の顔面偏差値は高くみられやすいということに。

どうやら、俺の雰囲気や所作からのものらしい。

友人の中には『俺』の顔面偏差値を『Aマイナス』と勘違いしている人すらいた。

それから『僕』は努力の方向性を変えた。

顔面偏差値自体ではなく、僕の雰囲気をかっこよくしていくことにしたんだ。それは、思っていたよりも僕に似合っていた。

しなやかで美しく。

言動の一つ一つに品を感じてもらえるように。自身は何をして何を言うのが似合っているのか、好ましく感じさせやすいのか。

客観的にとらえて雰囲気だけで高顔面偏差値と錯覚させる。

多分、両親や身近な人が幼い頃、過剰に僕を褒めていたのは無意識にコレを幼い僕がしていたんだろう。

顔面偏差値の提示が必須でない場所では、僕はAランク代として過ごせた。

機械が決めた顔面偏差値より高く見られることで、本当なら会話してもらえないであろうSランクの女性とお付き合いまで出来た。

騙されている周囲が馬鹿らしく面白く感じていたが、同時に罪悪感もあった。

「だから顔面偏差値の提示をしなければならぬ場面が来た時、周囲から「騙したの?!」なんて怒られてしまえば何も言えなくて。

彼女からは振られ、友人は去っていった。

どうしようもない現実、腹が立って、夕暮れ時の公園でぼうつとしていた時。ふと、ベンチに座っているカップルの男が叫んだ。

「こんなの世界が間違ってる！ 冬稀ふゆきの顔面偏差値だけで君の価値なんて決まらないよ！」

それを聞いて、自分のうちに感じてた疑問や憤怒の答えが分かった。

そうだ。顔面偏差値だけで価値が決まるなんて、どれだけ愚かなことなんだろうか。

「その通りだよ！」

今思うと自分はおかしくなっていたのだろう。そのときの高ぶった気持ちで感情に押し負けて、カップルの目の前に行き、彼らの手を取った。

整った顔の男は目を見開きかなり驚いた顔をしていて、女性は驚きながらも悲しそうな表情をしていた。

今まで見えていなかったが正面から目を合わせると、彼女の口元近くの左頬には痛々しい血の滲むガーゼが見える。

「顔面偏差値だけで決まるなんて可笑しいよね！」  
変な奴に絡まれたと顔を歪める二人に満面の笑みの僕。

これが僕、レイ・S・リシャールとマウラ・A・メトカーフと近衛冬<sub>このえふゆき</sub>稀。  
後の『レヴォルト』三人の最悪な出会いだ。

／＼／＼／＼／＼／

興奮状態から意識を取り戻した僕が必死に謝ると、二人は笑って許してくれた。

マウラさんの方は「俺のゆきちゃんに勝手に触らないでね」と怖い笑みで伝えてきたが、  
訴えたりはしないと笑う。

それから三人で少し話していく中、彼女、冬稀ちゃんの頬の傷の話になった。  
彼女の傷は二週間前、人によって作られたそうだ。

マウラさんの顔面偏差値はSもあり、Aプラスの父にSマイナスの母。彼の両親も高顔

面偏差値であった。

家柄もよく、周囲にも有名な高顔面偏差値の家系。彼の家、メトカーフ家に嫁ぐには顔面偏差値がA以上なければならないというのが決まっているらしい。

「ゆきの顔面偏差値はAプラスあったから、その家のルールにも当てはまってた。あつ、勿論俺は冬稀の顔面偏差値がA以下でルールより低かろうと関係なく愛したけどね」

困ったように笑う冬稀ちゃんの手を両手で包むように握りこみ、マウラさんは表情を硬くした。

「両親にも紹介してて、結婚を視野に入れて付き合うことも許可してもらってた」

苦々しく眉間に皺を寄せ、美しい顔を酷く濁らせた。震える唇から紡がれた声は、怒りをこらえるようにゆっくりと重く発せられる。

「なのにつ、冬稀が顔に傷を負ってAマイナスに顔面偏差値が下がったことを知ったら別れろって言い出したんだよ！」

「マウちゃん……傷ついちゃうから、噛んじゃダメだつて」

冬稀ちゃんは唇を噛んで下を向くマウラさんに困ったように笑いかけているが、その表情はどうみても暗い。

「冬稀の怪我は俺のせいなのにつ」

「マウちゃんのせいじゃないでしょ、あれはあの子が一番悪くて私が怪我をしたのは私の自己満が原因だから」

何を言っているのか見えてこない話に、二人の顔色を窺っていたら、僕の方に目を向けた冬稀ちゃんが「面白い話じゃないですけど」と話し出した。

~~~~~

彼女の話聞いて、募る怒りは彼らに比べれば小さなものなんだろうけど。

でも、それでも、ムカついたし、イライラした。

彼女の行ったことは何より称えられるべきことなのは明白で。愛する人のために美しい顔に傷を負いながらも、戦い抜くことを一体どれだけの人類ができるだろうか。

はつきり言って自分には無理だし、できないと思う。

刃物を持った人間に対して向かっていこうなんて、誰の命がかかかっていてもできない。それを彼女はした。いとも簡単に、それが当たり前であるように。

彼女の顔にできた傷は寧ろ彼女自身の美しい心を表すものであり、彼女の恋人に対する

愛の証である。

それなら、彼女にとってその傷は忌むべきものでも、彼女の価値を落とすものではなく、彼女の価値を上げるべきものだ。

僕が首を突つ込むべきじゃないのは分かっている。でも、納得できないこの世の中を少しでもいいから変えたかった。

「説得しよう！」

僕の言葉に二人はすぐ驚いた顔をした。

当たり前だ。

今出会ったばかりの僕にそんなことを言われるなんて、思ってもみなかったはず。

でも、放っておきたくなかった。彼女の話を聞いて、二人の想いを見て、このまま頑張つてねと知らぬふりをするのはしたくない。

「ふざけていつてる感じはしないから聞きたいんだけど、なんで今初めて会った君がそこまでしてくれようとするの？」

真剣な顔の彼は疑い半分、好奇心半分といった表情で僕をジッと見てくる。

自分と違って整った顔。

顔がいいものは皆自分の敵、そんなわけないのにどこかそんな考えになっていた自分が恥ずかしい。

「僕は、ずっと努力してきた。顔面偏差値をあげようと七年間、ずっと」

財布の奥にしまっていたカードを手に取る。

三年に一度ではなく年に一度は検査を行っているから、新品に近く綺麗なカード。

「お二人は、僕の顔面偏差値がいくつに見えますか？」

「え」

顔面偏差値を訪ねることは、その人の年収を聞くことに同義だ。

それに見れば分かるものをいちいち尋ねる人は少ない。顔面偏差値は顔を見ればある程度判断ができるのだから、見てある程度相手のランクを予想するのが当たり前。

相手の顔面偏差値を予想して、それを口に出すことを失礼だと教育されてきた人では、その行為自体に嫌悪感を抱く人も多い。

まあ、普通に「何歳に見える？」と聞くとときと同じように「何ランクに見える？」と聞



く人が増えてきているのは、そういう時代になってきたからとしか言えないが。

しかし、高貴な家の人や、しっかりとした教育を受けてきた人は聞かれたとしても相手のランクを口に出すことを躊躇する。

実際僕から当ててみてと提案しているのに、二人は本当にいいのかと問うように眉を下げている。

「大丈夫ですよ」

「……分かった。多分、Aマイナスかな」

「え、私はAプラスかなって」

予想に大きな差ができたことに顔を見合わせた二人に、苦笑いを零す。

二人の予想が自分の想い通りで、今までの自分が騙してしまった人たちも、本当に僕のことをAランク代だと思っていたんだと確信した。

「じゃあ、答え合わせをしようか」

「えっ」

「うそ」

顔面偏差値証明カードを手渡す。そこには僕の顔写真と名前、そして大きく書かれた『Bマイナス』の文字。

目を見開き、動きを止めた二人からカードを受け取って、それを自分の顔の横に持っていく。

「僕の顔面偏差値はBマイナスだよ」

そう言って微笑めば、驚いた表情だった彼が真剣な目をして僕の肩に手を置いた。

「しっかりと話したいな、場所を変えない？」

／＼／＼／＼／＼／

それから僕たちはマウちゃんのお母さんを何とか説得して、そのまま三人で『レヴォルト』として動き出すことを決めた。

レヴォルトという名前はマウちゃんが『反抗』するならそういう名前にしなきゃね。と言って決めてくれて、その時にマウちゃんがゆきちゃんと僕のコードネームの考えてくれた。

どんどん仲良くなつていくにつれて、大人っぽくてかっこいいと思つていたマウちゃん  
が、思つていたよりも子供っぽさとふわふわとした女の子みtainな面があるのだというこ  
とを知つた。

マウちゃんのコードネームはゆきちゃんに僕で決めて、僕たちはレヴォオルトの『シャ  
ー  
ル』『リリット』『ユウ』と名乗ることに決めた。

一年かけて基盤を作り上げた。情報屋を見つけ、狙うべき相手を探した。  
そして、正式に動き出したのは僕が二十一歳のとき。

レヴォオルトと名乗つて動き出したが最初は全く見向きもされなかった。

政府も治安維持部隊も僕たちのことをただの迷惑なやつらという目で見ていたが、段々  
とやるのが大きくなればその目も変わってきた。

政府によって僕たちの行動はニュースにも記事にもならず、なかなか人々に知られるこ  
とがなかった。だが、僕たちもそのまま黙つてはいられない。

レヴォオルトとして名乗り、活動してから二年の月日が経つた。

顔だけで過剰評価されていた者の財産を、顔だけで過小評価されていた者に分け与えた  
りしていた。だが、それだけのことで、新聞の一面を飾ることはなく、載つても小さな

読むか分からない程度の記事だけ。

しかし、それでももみ消される細かな活動を続けた。

二年もかけ、基盤を整え少しずつ名を広めていたのは、僕たちの存在をしつかりと認知してもらったためだ。

ついに、僕たちは大きな行動を起こした。

メディア露出が多く、顔面偏差値によつて知名度も高かった『シュペルブ』の料理長と審査員の偽装を大勢の前で暴いたのだ。

結果思っていた通り、レヴォルトのことはメディアに大きく取り上げられその存在は周知された。

思つてもなかったのは、治安維持部隊が早くからレヴォルト専用の対処部隊を作つてきたことだ。

しかし治安維持部隊は顔面偏差値重視で選ばれる。

部隊に優秀な人材を選ぶのなら、顔だけでなく知識や技量でも評価するべきだが。政府が顔以上のことを重視するとは思えない。

つまり現時点の判断では、治安維持部隊の特殊班もそこまでの脅威にはならないはずだ。



路地を何度も曲がって着いたのは古びたビル。

昔のことを思い出しながら歩いてたので、どうやってここまで来たか覚えていないが、何度も訪れたここには無意識でも辿り着けた。

廃墟にしか見えないそこに入って、崩れそうなひび割れた壁に手を突っ込む。

指先が固い物に触れた。それを掴んで引けば、ギギギイと鈍い音とともに床が凹んでいき階段ができる。

階段を下りていけば、そこはさっきの寂れたビルの外見とは全く違う。

長い階段を降りきったところに出てきた鳥居。見た感じでは分からないが、付けられているであろうカメラに向かつて手を振る。

暗かった廊下の提灯の形をした足元灯がついた。

コンクリートに囲まれているのに、和の雰囲気醸し出す廊下を進んでいく。

提灯の光を追って行けば一番奥の部屋に着いた。

和風の廊下に似合わぬ、重厚感溢れる鉄扉。

上から垂れている紐を三度引けば、カラカランと鈴の音がうつすらと扉の奥から聞こえて、すぐに扉の鍵が二つ開く音がした。

「いらつしやい、シャールさん」

扉の隙間から顔を出したのは、さわやかな笑顔の青年。

「やっほ、レトくん。ラウトは？」

「奥にいる、入っていいよって言ってたよ」

招き入れられて入った部屋は、四方を本棚に囲まれていて床や机にもあらゆる紙が散乱している。

前に来た時よりもひどいな。

苦笑いを零して周囲を見渡すが、アラウドの姿は見えない。他の部屋にいるのか？ と思ったが、レトくんがこの部屋の中から出ていく様子がないということはここにいるはずだ。

「ラウトー？」

「ちよつ、ちよつと待って！」

声を掛ければ、一番奥の紙の山から小さな呻き声の後に、手がチロチロと見え隠れする。

「アラウド何やってんだよ、もう」

呆れたように肩を下げ、レトくんが紙の山に駆け寄った。山の中から指先ほどしか見えてない手を掴むと、それを思いっきり引っ張り上げた。

「よいせつと」

セグレトにぶら下がるように紙の山から出てきたのは和装に短パンという一風変わった服装の子供。少年のようにも少女のようにも感じる中性的な雰囲気だが、その顔は雑面によって口元しか見えない。

「ありがとう、セグ」

しっかりと足をつけて立ったその子は、パタパタと袖を揺らしながら、服についた埃をはらってニツと口角を上げた。

「お待ちせしました。レヴォルトのシャルルさん、今日はどんなご用件ですか？」

小さな体で背筋を伸ばして胸元に左手を置きながら落ち着いた声で話す姿は、先程まで抱いていた子供という印象を打ち砕く。

その芝居がかった動きすら、様になって見える。

「超優秀な情報屋、アラウド&セグレトのお二人に前頼んでた情報を買いに来たのと、追加でほしい情報を伝えるに参りました」

芝居には同じ芝居で返そう。

にこりと人好きそうな笑顔で腰を折れば、いかにもレヴォルトのシャルルらしい言動にラウトが楽しそうに笑った。

アラウド&セグレット。二人組の情報屋であり、情報の正確性から調査の速さまで全てが完璧。

背が低く、顔を隠していることで性別も年齢も分かり辛いのがアラウドで。

隠されていない顔に、すぐに分かる好青年らしい雰囲気をしているのがセグレットだ。

「くふふつ、シャルさんノリがいいな。情報でしょ？ 持つてくるから待つてて」

「ありがと、リリットおすすめのお酒とケーキどこ置けばいい？」

高過ぎず耳に馴染む声も中性的でラウトの性別を判断させない。お酒に対して嬉しそうに「セグレットに渡しといて」と返す声でラウトがお酒の飲める年齢であり、子供ではないことが分かる。

初めて会ったときはあの情報屋アラウドがこんな子供なのかと驚いたが、長い付き合いの中でアラウドが成人していることを知った。

逆にお酒が飲めないからと、ケーキに喜ぶセグレットの方が成人していないと分かったときは本当に驚いた。



最初はビジネスでしかなかった関わりも少しずつ仲良くなっていき、今では二人をラウトとレトくんと愛称で呼ばせてもらっている。

「ラウトはホントにお酒好きだね」

「アラウドは水みたいに酒飲むんですよ？」

呆れたように言いながらレトくんはもうケーキの箱を開けて、中身を確認している。ケーキを見て顔を綻ばせると隣の部屋に消えていった。

入れ違いで部屋に戻ってきたラウトの手にはファイルが一つ。

「調べたけど、ちゃんと黒だったよ」

渡されたファイルを開けば、ドンと大きく出てくる男の顔。

かなり整っているその顔は、今をトキメク超有名Sランクの高顔面偏差値である画家のもの。

「顔が良いからってなんでも許されるわけじゃないのにな」

吐き捨てるように漏れた言葉は、この男への嫌悪感を酷く滲ませていた。

今回のターゲットは画家『オリビア』という男。

ランクSの顔面偏差値に、まだ二十代後半という若さで、数々の絵画の賞を総なめにし

ている今一番有名な画家だ。

ファイルのページを捲れば『本名、オリビエ・アリアン』から始まり、画家オリビアの詳しい説明が書かれていた。

身長に体重から好きな言葉に苦手な食べ物まで、事細かに書かれた男の特徴から経歴はどうやって調べたのか分からない内容まであった。

その中の一つ気になる内容を見つけ、眉を顰める。

「ごめん、そこはもつと詳しく調べるからもうちよつと時間頂戴」

「いやいや一週間でここまで調べて貰ってるだけでありがたいよ。あと追加でお願いしたいんだけど、この間取り図って手に入る？」

「んー？　こつて、吉兆きちちようの美術館じゃん。簡単な間取り図ならあるけど、詳しいのがほしいんでしょ？」

写真を見せればラウトはすぐにパタパタと駆けていき、紙の山の中に上半身を埋めてガサゴソと一枚の紙を持ってきた。

簡単にまとめられた吉兆の美術館の間取りが描かれているが、ほしいのはもつと詳しく細部まで描かれたものだ。

「うん、できたらダクトから出入り口の構造まで詳しく知りたい」

「それって、来月の展覧パーティーに乗り込む気？」

ラウトがいう来月の展覧。パーティーとは、オリーブの個展とパーティーを同時に行う大きなイベントのこと。

それだけのイベントとなれば多くの人が集まるのは分かり切っている。

「まあ、そんな感じかな。まだ乗り込むとは決めたわけじゃないから分からないけど」

「ふうーん。じゃあ、警備員の配置とかの情報もあるんじゃないの？」

ニヤニヤと愉悦を含んだ声が後ろから聞こえた。振り返れば、トレーに紅茶を乗せたレトくんが楽しそうにしていた。

「それも、期限は同じで取ってこれる？」

期待半分、疑心半分で彼の目を覗けば、ニイっと口角を上げてレトくんは紅茶を僕に手渡した。

「お金次第ですよ」

にまにまと上がりっぱなしの口角に自信満々の様子からして、お願いすれば本当に持ってきてくれるのだろう。

「じゃあ、お願いします」

「あれ、今回は即決なんだ。依頼者がいるの？」

意外そうに紅茶に口を付けながら聞いてきたラウトに頷く。

「どうせすぐ調べられるんだらうから言っちゃうけどさ」  
そう、今回は依頼があつてターゲットを『オリビア』に決めたのだ。

静かな朝、鈴の音が響く。

毛布に丸まっていたが飛び起きて、衣服を整えていれば廊下から足音が聞こえてきた。  
足音からしてマウちゃんだ。

髪を撫でつけ簡単にセットしてから仮面を付ける。

真つ白なシャツに真つ黒のジャケットを羽織つて急いで廊下に出れば、同じような恰好をしたゆきちゃんがいた。

目が合つた彼女が小さく頷いたのを見て、お客さんが来たことを確信する。

マウちゃんが先に行っているはずだから、客室に通されているだろう。

客室の真上に位置する部屋に入って覗き穴を見れば、フードに仮面というなんとも不審者らしい恰好のマウちゃんがいた。

マウちゃんの前には、お客さんらしき人の姿。

ここを訪ねてきたということは、依頼があつてのことなんだろう。

咳払いを二度して、床の一部を開ける。下にいる二人からすれば急に天井の一部が取れたのだが、どうやら客人は気づいていないみたいだ。

開いた穴に飛び込んで、下の部屋に飛び降りる。

「うあっ！」

客人の前に着地して見せれば、その顔は目が大きく見開かれ驚きに染まった。

「どうやらお待たせしてしまつたようですね。申し訳ありません」

胸元に軽く手を置いて、腰を折る。

肩をすくめながら相手の顔を伺えば、首が取れるのではないかという程の速度で首を横に振られた。

「だっさいじょうぶつです」

「シャル様、上から降りてくるのはやめてください。お客様が驚いてらっしゃいます」

深く被ったフードに顔を覆い隠す仮面、いつもよりもかなり低い声に普段とは違う呼び方。今回の使用人役はマウちゃんがやってくれるのか。

「申し訳ない、早くと気が急いてしまつたんだよ」

苦笑して見せるが、今自分は仮面を付けている。顔全てを覆うそれでは表情に出しても

相手には捉えてもらえない。

頬をかいて、申し訳なさそうに小首を傾げる。何も言わず首を再度振った客人にこちらの意図が伝わったのだと分かった。

「さて、お話を聞きましょうか」

ふかふかの椅子に深く腰掛けて足を組む。柔らかで演技がかった声で促せば、お客様は写真を一枚机に置いた。

「この人をご存知ですか？」

そこに移っていたのはメディアでもよく取り上げられる若い画家の男。

「ええ、有名な画家の先生ですね」

「違うんです！」

穏やかだった客人が荒々しく声を上げた。机に勢いよくついた手が大きな音を立てる。唇を噛み締めたお客さんは、肩を震わせて涙を流しているかのように揺れた声色でゆっくりと話し出した。

オリビアさんと自分が出会ったのはもう十年も前のことです。

彼は初めて路上で絵を描いていた僕の才能を認めてくれた方でした。

顔面偏差値が低い僕にも、優しく声をかけてくれたんです。すぐに僕はオリビアさんと仲良くなりました。

交流を深めていくうちにオリビアさんから『ノア』という画家として名乗る名前までいただきました。

本当に嬉しかった。

ある日、オリビアさんが教えてくれたんです。オリビアさんも絵を描くつてことを。

初めて見せてもらったその絵は芸術ともいえないものでした。ハッキリ言つて値が付くようなものではなくて。でも、それは本人も分かつてたんです。

オリビアさんは描く才能はなかったですが、目は肥えていたので自身の実力も正しく評価されていました。

僕に描き方を教えてほしいと仰つたので、僕は頑張つて教えました。

独学なので正しいか分からないと言つても、オリビアさんは僕はその独特なタッチに惚れたのだとまで言つてくれました。

だから、本当ならやらせてはいけな模写まで許してしまつたんです。

オリビアさんは僕の作品を模写して、それを自身の作品として世に発表しました。

彼の代表作『路地の軌跡』は僕の作品を完全に写したものでした。

路地の軌跡は発表とともに大きな反響を得て、名もなき新人に贈られる『新芽の賞』を受け取ったオリビアさんは、その容姿も相まって一躍有名な画家になりました。

もちろん、初めは抗議しましたよ。

あれは僕の作品だって。

オリビアさんに詰め寄ったこともありましたが、けれど、オリビアさんに言われてしまっただけです。

『お前じゃ、あの作品を発表しても有名になんてなれなかった』

それ聞いて、その通りだなんてなにも言えなかつたんです。だってオリビアさんは『S』で僕は『Bマイナス』だ。

この世界で僕が陽の目を浴びることなんてありえない。

だったら、影からでもいい。僕の作品だけでも評価されるならそれは嬉しいことなんじゃないかって思っただけです。

それから、オリビアさんは僕から絵を買っては、それを模写して自分の作品だと発表するようになったんです。

模写しては発表していましたが、ある日一人の評論家に絵は素晴らしいが描き方が何だ



か雑だ、と評価されました。

当然です。彼は僕の作品を写すだけですから、筆がどんどん雑になっていくことも頷けます。

その言葉に彼の中にあつた最後のプライドが崩れてしまったんだと思います。ついに、オリビアさんは僕の作品を横写ではなく、そのまま発表し始めたんです。

彼はもつと人気が出ました。評論家と呼ばれる人たちは次々にオリビアさんのことを褒めちぎりました。

描き方が丁寧になった。

美しい筆の使い方だ。

細かな場所にも独自の美しさが出ている。

まず絵のテーマやコンセプトから他よりも頭一つ抜けている。

色使いも最高だ。

今までにない、画家が現れた。

称賛の雨は喜びとともに虚しさを僕に植え付けました。

あの称賛は僕のものであるはずなのに、なぜ笑顔でその言葉を受け取っているのが描い

た僕じゃなくて、彼なんだろう。

スポーツライトを向けられるべきなのは、今の世の中の話題の中心となるはずだったのは、オリビアさんじゃなくて僕じゃないか。

一度深くそう思ってしまったら無理でした。

僕はオリビアさんにも描かない、そう伝えたいんです。

その時のオリビアさんは今思い出しても、体が震えるほど怖くて、あんな冷めた目を向けられるのは初めてでした。

『お前じゃ、あの作品を発表しても有名になんてなれなかった』

あのひどく無慈悲でつらい現実を押し付けてきたときさえ、オリビアさんは優しかったのに。

暖かく僕を包み込みながら、冷たい事実だけを語ってくるから嫌いになるにもなれなかった。オリビアさんも僕の作品をこのままゴミにするのが嫌だって思ってくれたんだ、そう思っていたから、彼の暴挙にもなんとか耐えることができました。

でも、描かない、自分の作品として出したいと言ったときに彼は初めて僕に手を出しました。

殴られるたびに自分が悪いんだと言われました。『共犯』だって。

どこかで僕が本当のことを言っても誰も信じてくれない。顔面偏差値が低いのだからせめて俺の役に立てと何度も叱られました。

オリビアさんを責めるには、僕は彼の行為を許しすぎた後なんだって気付きました。

彼がああ絵で有名になってしまった。今から僕が声をあげても、むしろ『嘘つき』だと僕が責められる未来しかない。

この顔面偏差値では声を上げるには遅すぎたんです。もう民衆は彼の味方ですもん。

それにこの状況を招いたのが『自分の絵だって言う自信が結局自分になかったせい』だということも理解していました。

けれどっ、自分の絵が正当な評価を得たらどうなるか見てみたい。オリビアさん越してあろうと、もつと褒めてもらいたいと思うのはそんなに悪いことですか？

僕がしたことは確かに愚かだ。

彼が僕の絵の模写すらやめてしまったときに、いや本当は彼が『路地の軌跡』を丸パクリしたときにはもう声を上げるべきだった。

そんなの分かっている。

でも、だって、僕の顔面偏差値では、僕が描いた絵に目が向けられることはないじゃないか。

世界がそんなだから僕が間違ったことをしてしまったのもあるんだ。僕だけのせいじゃない、この世界の理自体もこの事件を生み出したんだ。

僕の中に一度生まれたそんな言い訳じみた思いは、日に日に大きくなっていきました。

爆発しそうになる心を持って余していた時に貴方達を知ったんです。

顔面偏差値だけで生まれるこの世界の理不尽に立ち向かっていく集団『レヴォルト』。

貴方達レヴォルトについて調べていく中で、ある噂を聞いたんです。

レヴォルトはターゲットを決めるのに、依頼も受けているって。

顔面偏差値だけで権力を振りかざし、暴挙に出ている者に苦しめられている人に『レヴォルト』は絶対に力になってくれるって。

そこから僕は貴方達を探しました。

そして、この存在を知ったんです。

見た目は古くて使用者もいないように見える建物。そこで、レヴォルトに依頼ができる。僕はレヴォルトが依頼を受け付けている家を見つけたんです。

「僕はここに依頼をしに来たんです」

話の途中からずつと流れていた涙のせいで真つ赤に染まった目に、震えてうまくできていない呼吸の音。

彼が、ノアさんが追い込まれているのはすぐに分かった。

だがノアさんの言葉だけで動くことは出来ない。

これが演技で今までの話が本当ではなかった場合、レヴォルトが動いてオリビアの悪事を暴いたと言つて、逆に無実の人間に罪を着せてしまうこともある。

実際に昔あつたのだ。

高顔面偏差値というだけで相手を恨み、ありもしないことをでつち上げ、高顔面偏差値の人を陥れようと考えた人がレヴォルトに協力を求めに来たことが。

あの時のことを思い出せ。慎重になるべきだ。

ノアさんの話が本当なら、この依頼は受けよう。でも、本当なら、だ。

「貴方の話は分かりました」

「は、はい」

肩を痙攣させるように上下させて「うつく」と嗚咽を零して泣く彼に、マウちゃんが温かい紅茶を渡した。

座って、ゆっくりと紅茶に口を付けるノアさんと目を合わせる。

「貴方の話が事実であるなら、私達もご協力いたしましょう」

「事実ならって、ほっほんとうです！ 僕、嘘なんか！」

「落ち着いてください。こちらとしても裏取りもせずに、貴方の言葉だけで動くことができないんです。それは分かかって頂けますよね？」

申し訳なさそうに声を下げて、斜め下に顔を動かす。俯いていることでこちらの感情を伝えれば、必死に声を上げたノアさんが小さく何度も頷いた。

「一週間ほど時間をください」

「一週間ですか？」

「はい、それで貴方の話が事実だと確認できれば、私達の方から貴方に協力することを伝えましょう」

やっと乾いてきていた目に再び涙を滲ませて、僕の両手を掴んだノアさんは「はい」と囁み締めるように答えた。

「なるほどね」

「なるほど」

へえーと聞こえてきそうな顔のラウトとレトくんは苦笑する。調査をしていた二人は結果を知っている、この話を聞いて納得したところがあったのだろう大きく頷いている。

調査ファイルに目を落とせば『オリビアの発表してきた絵は他人の物である』と書かれていた。

この情報をどうやって取ってきたのかは分からないが流石最高峰の情報屋だ。

並べられた文字と写真に目を移せば、これだけで言い逃れできないほどの証拠が揃っている。

オリビアとノアさんが親しげに映る写真。

ノアさんが『路地の軌跡』を書いている姿が映っているもの。

オリビアの昔の作品や彼自身の絵が新人賞ではどんな評価だったのかまで。

事細かに書かれている全ての情報、それらがノアさんの話が本当であったことを伝える。

「ノアって人の言うことの裏取りだったわけね」

「急に一週間で調べてほしいって言われたときは吃驚したけど納得したわあ」  
並んでココクク頷いた二人に「まあね」と返して調査書に目を通す。

知りたいと頼んだ情報がすべて載っている。

一応全てのページをその場で確認してから、抜けていることや他に気になることがないか探していく。

「あ、もしかしたらレトくんに頼むかもしれないんだけど」

「ん？ なに？」

「僕らで出来そうならやるけど、ここに潜入してほしい」

「あ、そこ？ めっちゃ簡単じゃん、いいよ。頼まれたらやるわ」

ファイルの中にある『地下、アトリエ』という文字を指せば、きよとんとした後、爽やかに笑ったレトくんが「おっけおっけー」とノリノリで答えてくれる。

「他に追加するものは？」

「無いかな、さっき言った吉兆の美術館の間取り図と展覧パーティー当日の警備の配置とかは教えてほしいけど。レトくんのはリリットと相談して決めるからまだ不確定って感じ」

小首を傾げたラウトが尋ねてきたことに返せば、ラウトはそろばんを持ってカチカチはじき出した。

「了解、じゃあそっちはまた情報を渡すときに、でいいや。金額出すね」

「お手柔らかにお願いします」

この二人に頼んだ仕事は完璧で失敗は無いが、その分高くつく。



カチカチとなる音に少し緊張して、結果を待つ。

「ん、二万テリアでいいよ」

「えっ、それだけでいいの？」

「リピーター割引とケーキとお酒もくれたしね。お安くしときました」

歯を見せて笑うラウトにびっくりする。前の情報もリピーター割りで結構安くしてもらったし、これ以上甘えるのは申し訳ない。

「いや、でも」

「まあまあ、気にしないでよ。このくらいの一般人と変わらない人間の情報なんて簡単に集まるからさ」

後ろからレトくんに肩を掴まれる。ポンポンと叩く姿は迷惑とか思っているようには見えなくて、ここでこの好意を拒否する方が彼らに悪い。

「じゃあ、これでお願います」

二万テリア渡せば、紙幣を判別機はんべつきに入れて本物が確認したラウトはランプが青く光ったのを確認する。

「はい、本物確認しました！ 大丈夫だよ」

「うん、ありがと。じゃあ、またくるね」

「はいよ。あ、向こうから帰ってもらって」

手を振ったアラウドに背を向け「こっちですよ」というレトくんに着いて行く。入ってきた時とは違う別のドアを開けて、廊下に出るとそこは青い鳥居が並んでいた。

鳥居から垂れるランプがオレンジ色の光を放っていて、おどろおどろしさを感じさせる。

「じゃあ、またね」

「はい！ またね！」

レトくんと手を振って別れる。マウちゃんたちに連絡して、このままノアさんの所にも向かおう。

不気味な廊下を真っ直ぐ突き進めば、エレベーターが目の前に現れた。

流石は情報屋の根城。客同士が顔を合わせることはないように、出入り口が無数にある。何度かここには来ているが、この道は初めて通る。

エレベーターが開くと、入った廃墟とは別の廃墟に出た。

木造建築で埃っぽいそこから外に出て、マウちゃんに連絡する。

「マウちゃん？ 裏とれたよ。レヴォルトとして動こう」

外に出れば、路地の中だが日の光が眩しい。チカチカする視界を細めて、大通りへと足を進めた。

調査書によればこの時間、ノアさんはここの茶屋にいるはず。

椅子と机が並ぶ外のスペースをキョロキョロしながら歩いていると、座ってお茶を飲んでいるノアさんを見つけた。

団子を五本買って、そのうちの一本だけ手に持ちノアさんの後ろに座る。

帽子を深く被り直して、シャールらしく話しかけた。

「ノアさん、振り向かず聞いてください」

「えっ！」

「しい……大きな声はダメですよ」

「あ、すつすみません」

身体と声を小さくして話し始めたノアさんに「ありがとうございます」と返し、団子を食べながらゆったりと威圧感を与えない声色を心がける。

「ノアさんの言っていたことが事実だったと分かりました」

「ほっ、本当ですか！　じゃあっ」

「はい。ご依頼をお受けします」

「よ、よかった」

嬉しそうに息を零すようにそう言った、ノアさんに一番重要なことを問いかけた。

「それにあたって、最後に確認させてください。貴方の依頼内容を」

そう言えば一つ大きな深呼吸が聞こえ、ノアさんがハキハキとした声で答えた。

「『路地の軌跡』からオリビア作として発表された全ての絵画が『ノア』の作品であること、オリビアさんが今まで吐いてきた嘘を全て世間に暴くことを依頼したいです」

「畏まりました。そのご依頼、お受けいたします」

依頼内容を確認できたので、最後の一つの団子にかぶりつく。仮面がないので顔が見られないように気を付けて、帽子のつばを下に引っ張りながら立ち上がる。

「なにかありましたら、こちらから連絡致します」

「あっ」

それだけ伝えて足早にその場から離れる。周囲には誰もいなかったから話を聞かれていゝるなんてことはあり得ないが、顔を見られるリスクはなるべく減らしたかった。

袋に入った四本の団子がガサガサと袋の中で音を経ている。早くお土産を二人にも渡

したいな、と歩く速度を上げた。

〜〜〜〜

シャルルが情報屋の部屋から出て数分後。

「それで、今回はどうされたんですか？」

アラウドは冷めた声で一人の男をジッと見ている。

「そんな警戒すんなよ」

ケタケタと笑う男にアラウドは大きくため息を吐いた。

「事前報告もなく来ないでって言ったよね？ ローレン・D・ハイネルさん」

ローレン・D・ハイネル。

治安維持部隊で隊長を務めている男であり、その顔面偏差値は最高峰のSプラス。

世界にいるSプラスはたった十二人。その中でも三本の指に入ると言われているその顔はジャージなんて格好でも関係なく輝いて見える。

「そんな他人行儀はやめろよ、もう長い付き合いだろ？」

「アンタとは長くないし、ルールを守ってくれない人はお客様でもないからね」

勝手に椅子に陣取って居座る気満々のハイネルを見て、アラウドの眉間にシワが寄る。背もたれを抱きかかえて座ったハイネルにセグレトがコーヒーを渡す。

渡されたコーヒーにハイネルが口を付けるのを横目に、アラウドは椅子の上の紙を床に落としてそこに腰かけた。

「ハイネさん目立つんだから、ちゃんと変装してって言ったよね？」

セグレトから受け取ったコーヒーを飲みながらアラウドは呆れたように言葉を続ける。

怒っているふうなアラウドに対してヘラリとした態度を変えず、ハイネルは一枚の記事を投げつけた。

そこに描かれていたのは『レヴォルト参上!? 彼らの目的とは?』『ただの反社会派なのか? それとも革命家か?』大きな文字は記事を拾わなくても内容の予想ができた。

「こいつらの正体を知りたい」

薄っすらと開かれた眼からは、空を思わせる明るい青が覗く。月のような濃い金髪の間から見えた目はどこまでも真つすぐでアラウドを射貫く。

「無理だね」

しかし、そんなハイネルに対して明瞭な言葉でアラウドは返した。

「できないわけないだろ、アラウドが。俺はお前以上の情報屋なんて見たこともないし、いるわけないと分かってる」

「それはそれは、信用してもらって嬉しいけど。出来ないんじゃない、やりたくないんだよ」  
雑面から唯一見えるアラウドの口は三日月を模り、心底かたど楽しそうに弧を描く。

「ここで情報を渡すことなんて容易いよ？　けど、治安維持部隊とレヴォルトが対峙してやりあってるのが見たいんだよね」

「報酬はお前の言ったものをなんでも用意すると国家が保障してもか？」

鋭い眼光は変わらずアラウドを射貫く。アラウドの隣に立っているセグレトは腰に忍ばせてある銃のグリップに指先で触れた。

セグレトの役目は情報捜査での侵入だけではない。アラウドの護衛が一番の任務だ。

「あいにく国家とやらは信用してないからね。どんな報酬よりも見たいものが人にはあるんだよ」

ふらふらと椅子に座って浮いた足を組むアラウドは、わざとハイネルを煽る言葉を選んでいるとしか思えない。

このままハイネルが怒りに任せて行動するようなことがあれば、アラウドを護るために銃を向けることになる。セグレトは頬に伝う嫌な汗に唾を飲んだ。

「くひゃっ」

重々しい沈黙を破ったのはハイネルだった。

「くひひひ、うつくく、アーツハハハハ！」

キョトンとしたのはセグレットだけで、ハイネルは大声で笑うとアラウドも変わらずニヤリと口角は上げたままだ。

「いやあ、やっぱお前おもしろいな！ 国家の犬に国家を信じてへんとかつ、俺以外に言うたら殺されとるで！」

「ハイネ、口調荒れてるよ」

「ええやん、別に！ ここにはうるさい上司も高顔面偏差値ハイネルを盲信しとる民もおらん。俺とお前とソイツだけや」

先程までの冷たい目はどこにやってしまったのか。

柔らかくなった空気と緩く温かくなった眼光にセグレットは、ほつとグリップから手を離れた。

「悪かったな、緊張させてもうたやろ？」

あまり聞かない話し方に彼がこの辺の出身者じゃないと分かって驚く。勝手に首都ランレル出身だと思っていた。



男らしさと治安維持部隊の隊長としての威厳を感じさせる、あの話し方はキャラを作っていたということだろうか。

セグレットの方に目を向けると無邪気に笑ったハイネルは、両手を顔の前で合わせて頭を下げた。

「申し訳なかったわ！ ちよつとしたじゃれやつたつもりなんやけど、怖がらせてもうたな」

「危うく撃つとこだった。二人ってそんな仲良かったの？」

ちよつと頬を膨らませたセグレットの言葉を「おう！」「ううん」肯定したハイネルと否定するアラウド。寧ろ息の合つているとも言える返答に、セグレットは噴き出して笑う。

緊張して力の入っていた身体を弛緩させて椅子に深く座り込んだ。

「ハイネルさんってランネル出身じゃないんだね」

「ん？ せやな。でもこっちに越してきてからのほうが長いで」

「へえ、喋り方わざわざ直したの？」

「Sになったときに国のお偉いさんから言われたんよ『人前に立つのだから、その顔に見合った話し方をしろ』って、そう言われてからは標準語に直して口調も変えたな！」

ニシシつと歯を見せて笑う姿は、テレビ越しに見ていた姿よりも幼く見える。

「ハイネ帰らないの？」

「なんや邪魔か？」

「うん」

嫌そうにアラウドが手で払うが、そんなアラウドすら楽しそうに見て、ニヤニヤと意地悪い顔をしたハイネルは帰らないという意思表示か、椅子の背もたれを抱え直した。

「ええやんけ！ 次くるときはギフトと来てやるで」

「はあ!? 別にそーいうことじゃないから！」

ハイネルの言葉に声を荒げたアラウドが奥の部屋に向かって行ってしまう。

セグレトが「どうしたの？」と言えば「コップ洗ってくる！」と荒々しく答えて、アラウドは奥の部屋に消えてしまった。

「キヒヒッ、アイツもいじりがあるわあ」

「あまりいじめないでよ。アラウドの機嫌とるのも大変なんですから」

セグレトの言葉に「すまんすまん」と謝る気のない謝罪をして、ハイネルは椅子を回転させるとようやく普通に座り直した。

セグレトはそんなハイネルを何か言いたげにジッと見ている。

その視線に目を移して、ハイネルは組んだ足に肘をつくと顎を手の甲に乗せて、余裕を

持った笑みを浮かべる。

「なんや？」

「俺さ今まで何回かアラウドとハイネルさんが話してるとこ見てるじゃん」

「せやな」

その質問にわざとらしく大きく頷くハイネルに対して、セグレットは自身のこめかみを二、三回とんとんといいて思い出すふうに話を続けた。

「でもこんな仲いい感じじゃなかったじゃん。ビジネスですうって感じで話してるところ以外見たことなかったから、今日はなんでこんな感じなのかなって」

「そんな難しいことやないで。手紙のやり取りが主やったし、治安維持部隊の隊長として来てたことが多かったで、ビジネスとしての会話が多かったってだけや」

「なるほど？ あれ？ 今日は治安維持部隊として来たわけじゃないの？」

「おん、ちゃうで？ 今日は完全非番やから」

ジャージの裾をビツと引つ張ってハイネルはなぜか自慢げに見せてくる。

「私服？」

「動きやすくてええで！」

ビツと引つ張ってはコクコク頷く。

ジャージなんかじゃなくてもっとまともな恰好をすればいいのに。折角の顔面偏差値が勿体ない。

セグレットはそう思ったが、全体を見てジャージだろうがこの人の顔面が良いことは分かるな、と考えを改めた。そして、高顔面偏差値がジャージで出歩くという逆に目立つ格好で来たが故に、アラウドがあんなに怒っていたのかと納得した。

「アラウドとは長い付き合いつて言つてたけど本当なんですか？」

「そこそこ長いな！ アイツが情報屋を始める前から共通の知り合いがおつたから」

「なるほど、じゃあアラウドの本名とかも？」

「知ってるで、呼んだことはほぼないけどな！ アイツ俺につあぶえっ」

ハインルが何か話そうとしたところで、すごい勢いで飛んできた袋が彼の顔にぶつかった。袋が飛んできた方を見ると、スイングの後であろう姿勢のアラウドがいる。

「セグレットに変な事吹き込むのやめて」

奥の部屋、キッチンから投げつけられたものが包丁ではなかったことに安堵の表情を零して、セグレットは袋に目を向ける。

「あれ、なに？」

「クッキー。いっぱいあるから部隊の皆で食べれば？」

手土産もやるのだからさっさと帰れ、と言いたそうに顎で出口の方をしゃくつたアラウドに対して、一瞬動きを止めたハイネルは肩を大きく揺らして噴き出した。

「グアツハハハツ、ワアハハハハーつぶふうっ」

笑ってはそれを止めようとして噴き出すのを繰り返したハイネルはなんとか呼吸を落ち着かせるとやっと椅子から立ち上がった。

「やつはお前おもしろすぎるな！ 今日ほめっちゃ笑わせてもらったで、そろそろ帰るわ」  
「はいはい、早く帰ってどーぞ」

不機嫌です、と声色で表現するアラウドに手を振って、セグレットに誘導されながら出口のドアノブに手をかけたハイネルは「あ」と零し振り返った。

「せや、言うてなかったことあったわ」

「なに？」

「お前が見たい言うとつた『治安維持部隊とレヴォルトの戦い』ってやつ俺も参戦するで」  
「は？」

「治安維持部隊でレヴォルト専門の特殊部隊作るって話あったやろ？ あれがホントにできたんよ。んで、俺その隊長やから」

ゴソゴソとポケットを漁って、尻ポケットから皺のついた名刺をアラウドに向かって投げた。

「治安維持部隊隊長兼、レヴォルト専門特殊部隊『月華』の隊長『ローネル』やから。これからは仕事ん時はそっちの名前で呼んでな」

「月華？ また随分と洒落た名前にしたね」

「まあ、お偉いさんがつけたからしゃーないわな。じゃ、それだけやから」

名刺を拾ったアラウドに再度手を振って、ハイネルはセグレットと部屋から出ていった。

「月華、名前負けしてると言えないのが、流石は治安維持部隊さんってとこかな」

ゆつくりと歩いて名刺をまじまじと見たアラウドはそれをコルクボードにつけた。

コルクボードには治安維持部隊の記事がまとめて張られており、名刺がつけられた隣にはハイネルの写真がでかでかと載っている。

『月光を纏ったような金髪が多くの女性の目を奪う！ Sプラスの高顔面偏差値、治安維持部隊隊長にインタビュー！』

月華、月。

ハイネルが、メディアに取り上げられる時によく使われる例えから取ったのであろう特殊部隊の名前。そこから、特殊部隊がハイネルのために作られたものと察しが付く。

「ついに上層部もハイネの御守りに音を上げたってこと？」

勝手気ままに動き、上層部からの命令は無視が当たりまえ。

自分がその時正しいと思つたらそれを通して行動し、部下にも指示を出してしまう。一部の部下は上層部よりもハイネルの指示を優先する。

部下がついてくるのは無茶苦茶やる癖に、結果成功しているからだろう。

上層部の想定よりも良い結果を残してしまうのだから怒るに怒れないし、顔面偏差値の高さから解雇にもできない。

治安維持部隊のハイネルとその直属部隊『フォルテ』に、上層部が嘆いていることはアラウドにとって当たり前すぎる情報だ。

そこから考えて上層部がハイネルを放牧した、そう思つたアラウドは小さく肩を震わせて笑つた。

「まあ、レヴォルトに目が行き辛くするのも目的なんだろうーね」

顔面偏差値のランクによって上下関係を構築させた世界では、レヴォルトの存在は邪魔でしかない。

レヴォルトのファンを増やさないために、元々知名度があり人気もある顔が良い集団で部隊を作らせレヴォルトを討ちに出る。

単純な戦術ではあるけど、確かに最も効果的だ。

さて、これからどうなっていくのか。

「楽しみが増えたなあ」

鼻歌を歌いながらハイネルに渡したクッキーの余りを手に取って、アラウドはサクッとそれを一口齧<sup>かじ</sup>った。

~~~~~

もくもくと団子を食べながら、調査ファイルに目を通すマウちゃんとゆきちゃん。

「どうしょつか」

「とりあえず、絵つていうのだと『路地の軌跡』とかの模写作品はいつ描いたかかんないと発表もできないよねえ」

パラパラと資料に目を通して思考を巡らすマウちゃんは「おいし」と団子の感想を混ぜながらやるべきことをあげていく。

「まずは、本当にノアさんが描いてるってわかるように写真、いや、動画だな。発表された作品をノアさんが描いてる動画があるね」

「動画か、難しいね。発表された作品となると動画を撮って描くなんて弱みにしかならないこと許してないだろうし」



「確かに、今までの既存作品じゃあ無理だね」

団子の消えた棒でマウちゃんが指したのは、来月行われる展覧パーティーのチラシ。

「でも、今から描くんなら話は変わらない？」

にやりと歯を見せて笑ったマウちゃんの言いたいことが分かって、頭の中で残り時間とノアさんにどう伝えるかを考える。

「なるほど、一月後か、いけるかな？」

「いけないとは言わせないよ。依頼をしてくるくらいなんだから、それくらいの根性はあ  
るでしょ」

新しい団子を取り出してそう言ったマウちゃんに「そっか」と答える。ノアさんにも頑  
張ってもらわなきゃな、と思っているとゆきちゃんが便箋を渡してくれた。

「ありがとう」

「ううん。それより、そーなるなら私とマウちゃんのどっちが行く？」

手渡された便箋に青いペンで『ノアさんへ』と書き出す。

僕が便箋にノアさん宛ての指示書を書き出したのを見て、ゆきちゃんは地下アトリエの  
文字を指さした。

「どうしようか、秘密裏に行くか大胆に行くかの二択だね」

「うーん。大胆に行くには身バレが怖くない？」

「そうだね、まだレヴォルトは軌道に乗って間もないし、ここは安パイといこうか」

「あ、それ一応レトくんにも頼める感じだけどうする？」

思い出して声を掛ければ、マウちゃんは少し悩んでから首を振る。

「いいや、余分にお金かかるだけになるし。ここまで手を回す余裕はあるからね」

「じゃあ私がサクッと乗り込んでカメラでも仕掛けてくればいいね」

大胆に行くなら、マウちゃんの家柄を使って『メトカーフ家の跡継ぎ』としてオリビアにアトリエを見せてほしいと堂々とお願する作戦。

秘密裏になら、ゆきちゃんが『レヴォルトのユウ』としてアトリエに潜入する作戦になる。

ゆきちゃんが行くと決まったなら、オリビアの留守を狙って潜入し、アトリエ内にカメラを設置、証拠となる動画を手に入れるということ。

「留守っていつだ？」

「確か、ファイルのこのページにスケジュールが書いてあったはず……あった！ 一番近いのは来週の始めね。テレビ出演で朝早くに出て帰るのが夜になってる」

「じゃあ、その日にしようか。えっと、オリビアの家は防犯設備もあるっぽいね。サポーターは俺がやるよ」

オリビアの家には嚴重とは言えないものの、いくつものセンサーやカメラがある。

特に面倒なのは、玄関の鍵が開けられていないのに他の箇所の鍵が開いたらアラームが鳴って警備会社に連絡が行くものだろう。

でも、それさえクリアしてしまえば他のよくある防犯なんてマウちゃんの前には意味をなさない。

「うん、よろしくねマウちゃん」

ゆきちゃんが何の心配さも滲ませずに笑顔でマウちゃんにサポートを頼むのもそれを分かっているからだし。僕が二人の会話に口を挟まないのも二人なら簡単な仕事だと確信しているから。

「アトリエの潜入はこれで決まりだね。証拠集めはもうちょっとやりたいかな」

「動画だけだと薄いよね」

「うん、だからこんなのはどー？」

ニヤニヤと悪い顔をして手招きしたマウちゃんに、クエスチョンマークを頭に浮かべながらゆきちゃんと耳を寄せる。

マウちゃんの作戦内容はどこまでも面白そうで、聞いていた僕とゆきちゃんの顔も思わず頬が緩んだ。

「どう？」

「最高」

グッと親指を立てた僕たちに「やった」と弾むように返してマウちゃんは作戦ノートに今言った内容を書き加えた。

「じゃあ決まりだね！」

「ふう、あとはもつと展覧パーティーのある『吉兆の美術館』の詳しい間取り図と警備の配置の情報が来てからだね」

「そうだね、ゆきちゃんマウちゃんお疲れ」

「おつかれえー」

「お疲れさま、レイちゃんも手紙書き終わった？」

「まっつて最後に」

机の上に散らばった資料をマウちゃんが片付け始める。その邪魔にならないように、急いで最後に『読んだら燃やしてください』とだけ書き足して手紙をゆきちゃんに渡す。

「終わったよ」

「じゃあ私が出してくるね」

「うん。ごめんねありがとう」

「いいのいいの、他の手紙と混ぜてポストに入れてきちゃうね」

便箋を封筒に入れると、ゆきちゃんは髪をまとめて帽子に仕舞いこんで上着を羽織る。それだけでいつもと違う空気感になるのだから不思議だ。

行ってきます、そう出ていったゆきちゃんに手を振って、マウちゃんを手伝って一緒に資料を片付けた。

「いくつか用意しなきゃいけないね」

「ふふん！ その辺は大丈夫。メトカーフの人間ですから！」

大げさに腰に手を当てて、エッヘンと胸を張るマウちゃんに茶化すように声を掛ける。

「頼りになるなあ！」

「まあ皆のマウちゃんなんで！ レイは治安維持部隊が動きそうだから警戒よろしくね」  
にいつと笑っていたマウちゃんの目が、急に真面目になって僕の目を真っ直ぐ見つめる。

治安維持部隊。

ニュースによれば『レヴォルト』専門の部隊を作ろうとしているらしい。つまり、それはちゃんとした敵ができて、今までよりも動きにくくなるということだ。

「分かってる、調べておくよ」

マウちゃんに頷いて返す。

僕もそこは懸念<sup>けんねん</sup>していた。治安維持部隊が展覧パーティーまでに特殊部隊を作った場合どうなるのか、その不確定要素が僕たちの作戦にどう影響するかが分からない。

治安維持部隊の特殊部隊。予想通りならあの厄介者たちを充ててきそうだけど。

国家の犬である彼らは国家の上層部からの指示で動いているが、それを無視して好き勝手している奴らがいる。

治安維持部隊の中でも優秀なものしかない『フォルテ』は扱いこそ難しいが顔だけでは入れない。治安維持部隊の中でも実力を求められる本当の優秀者しかない隊だ。

それがレヴォルトの対応に充てられる可能性が高い。

そうなれば面倒だ。

今までは、ただ顔が良いだけの無能ともいえる奴らを相手にしていた。だから簡単に済んでいたところもある。

特にフォルテには注意しておくべき三人がいる。

副隊長でフォルテの頭脳と言われる男に、最強と謳われる戦闘力を持つ男。

そして一番の問題児、治安維持部隊隊長でフォルテの隊長『ローレン・D・ハイネル』だ。

「顔面偏差値Sプラスのハイネル……」

この三人が特殊部隊に入るとなれば、一筋縄ではいかなくなるだろう。

イレギュラーにも対応できるようにしとかなきゃいけないな。あと、特殊部隊のことも調べておこう。

やるべきことを思い浮かべて指を折る。

思ったよりも多いから頑張んなきゃ。そう意気込んで一つ、大きく伸びをした。

一度目の作戦会議から一週間後。

「じゃあ、今日は別行動だけど、二人とも頑張つてね」

「大丈夫だよ。レイも気を付けて」

「レイちゃん夜に集合だからね」

よく見るタイプのスーツに袖を通す、片方だけ上げた髪形のせいでいつもより前が開けて見えてそわそわするが、すぐに慣れるだろう。

一度スーツの襟を直して外に出る。

太陽の光が目を焼いていると感じてしまうほどには眩しいが、嫌と言う程に晴れた天気の方が、人が多くて情報集めにはうってつけだ。

平日のこの時間、一番多いのはスーツを着た人間。

動きにくいし熱いしで不満はあるが、木を隠すなら森の中ということでの恰好が最適であるんだとマウちゃんにも釘を刺された。

さっさと情報集めて、スーツ脱ご。治安維持部隊の関係者が良くいるカフエは、えつとお。脳内の地図にルートを描きながら速足で人混みの中を進んでいく。

~~~~~

レイちゃんを見送って準備を済ませたマウちゃんと私はオリビアの家の前にいる。

道を挟んで斜め前にある家を横目で見ていれば、オリビアと思われる人が出ていったのが見えた。

「ユウ、出てったよ」

「分かってる、リリィ頼んだよ」

マウちゃんからユウと呼ばれたのをスイッチに『レヴォルト』として気持ちを切り替える。

「行ってくる」

目の前の道を二人で横断して、途中で別れる。



オリビアの家の横道に入って周囲を確認するがカメラも人も道には見当たらない。

少し助走をつけて塀を乗り越えて敷地内に入る。

情報通り、庭には防犯設備はない。ピラスからノイズがして『あーあー、聞こえる？』

リリーの声がした。

「聞こえてるよ。庭に入った、玄関に向かう」

『了解』

早速最難関がきた。鍵が違った場合、爆音のアラームとともに警備員が集まってくるとかいう玄関。

リリットが作ってくれていた鍵を出す。

彼が準備してくれたものだから大丈夫だとは思うが、冷や汗が頬を伝う。鍵穴に鍵を差し込む。異常はない。

「ふう、回すね」

鍵穴に差し込んだ鍵を躊躇なく、回す。

ガチャ、と音を立てて鍵が開いたのが分かった。汗を肩で拭い『成功』と声を掛ければ『了解』と当たり前だと言いたげに笑みを含んだ返答が返ってきた。

『開けていいよ』

「おっけ」

許可が出たのを確認してドアノブを回して中に入る。

豪邸ではないが綺麗にされていることが玄関から分かる。所々に見える高級品が、彼が最近儲かってきているのだとありありと伝えてきた。

「ナビよろしく」

後ろ手に玄関の鍵を閉めて、靴を脱いで中に入る。

『奥から二番目の部屋に入って』

廊下を進んでいけば目的の部屋に着いた、監視カメラはいくつかあったが、全部リリットがループ映像を流してくれているため通ったところで私の姿は残らない。

部屋に入れば、一目で倉庫のような扱いである部屋だと分かる。

新品の絵具や大小様々な筆に大量のキャンバス。綺麗に棚に積み重ねられているそれを通り過ぎていけば、床に明らかに取っ手のついた蓋を見つける。

「地下への入り口見つけたよ」

『じゃあそこはピッキングしちゃって』

「了解」

内ポケットから細いピックを取り出す。備え付けの鍵から変えていないので、カチカチと何度か探ってみればすぐに回せた。

防犯ができていのかできていないのか本当によくわからない。

玄関のカギを簡単に作れたのだから、テレビで導入した鍵を説明していたからだ。そこから調べていけば簡単に使われている鍵がどこの会社のなんなのか分かってしまった。

最先端とか言って簡単話しちゃダメだよねっと。

少し重たい床扉を開ければ下に繋がる梯子があつて、二メートル下に床も目視できた。

「降りるよ」

『気を付けて』

梯子は無視して飛び降りれば、地下なのに明るいそこに少し驚く。

ずっと付けっぱなしにされているのか眩しい電気に照らされて、中が良く見えた。

侵入した地下アトリエは、予想よりも物で溢れかえっているのでカメラの設置は簡単そうではっとする。

親指と人差し指で丸を作ったとき位の大きさのカメラを、四つ仕込んでいく。椅子と大きな真っ白なキャンバスが向かい合っている場所に向かってカメラを設置しながら『もうちょっと右』ピラスから飛んでくるリリットの指示に合わせて調節する。

四つ全ての調整を終えて、盗聴器をキャンバスの近くに設置すれば、そこそこの時間が経っている。

まだまだオリビアが帰ってくる時間ではないが、早く撤収するに越したことはない。

「撤収しまーす」

『うん、お疲れさま』

最後に一応、全部の動作確認をしてから梯子を登っていく。

床扉を閉じて、鍵も閉める。自分がいた痕跡を残すわけにはいかない。

なにも変わったところがないことを確認しながら、玄関に戻っていくとピアスから切羽詰まったような声がした。

『オリビアが帰ってきた！』

「くっ」

その声に急いで玄関に置いたままだったユウの靴を取る。ふと前を見れば、玄関の窓に影が差した。

「どこに置いたっけな」

呑気な声にして鍵が回った。スライディングするように玄関から一番近い部屋に入りこむ、それと同時に玄関の扉が開いた。

「えっと……」

真下をオリビアが通っていく。ユウは柱と柱の間に腕を突っ張らせて、天井に上半身を

つけながらなんとか姿が見えないようにしている。

聞こえないようバシないよう、口に咥えた靴の紐を強く噛み締めて、床に降りる。

着地した音はしなかったはずだが、気配に気づいたのか急にオリビアが振り返る。しかしオリビアの視線が届く前にユウは転がって廊下に出ることに成功した。

玄関からは出られない、音がすることを考えたら一階からの逃走は不可能ね。

『ユウ、二階のベランダから隣の家の屋根に移れる』

ピアスを二度とんとんノックして、オリビアの気配が部屋から出てこないか警戒しながら階段を足早に登る。

ベランダのある寝室に入る。そこでベランダの鍵を見てユウの動きが止まった。

このタイプの鍵では、外から閉められない開けっ放しになってしまう。

グルグルと無駄に回る思考に焦りが出てきたとき、ピアスからリリットの落ち着いた声がユウの止まった脳に染み込むように指示を出す。

『ベランダは簡単な鍵だからユウ落ち着いて行動して。細い糸あるでしょ？ 鍵の持つところに括弧で外に出て上から通した紐を引けば大丈夫』

リリットに言われた通り、持つてきていたタコ糸を使って細工をすれば、ベランダの外から鍵を掛けられた。

紐を少し強く引つ張ればドアの上の隙間から糸も回収できた。

リリットのおかげで形跡も残さず外に出ることに成功する。

ほっと一つ息を吐いて、誰かに見られる前にとベランダから隣の家の屋根に飛び移る。

身体を動かすことになれば簡単だ。ひよいひよい屋根の上を飛び越えて、一目のつかない

中道でやっと地面に降りたユウは靴を履いてピースに触れた。

「作戦終了。リリイ、カバーありがとう」

『いいよ、無事でよかった。公園で合流しよう』

「了解」

「お疲れさま、大丈夫だった？」

「大丈夫、ごめんね。途中焦りすぎた」

手袋も髪留めも取って、公園にやってきたユウにリリットは柔らかく声を掛ける。

申し訳なさそうに眉を下げたユウに笑いながら、その頭をわしやわしやと撫でてマウラらしく目を細めたリリットはユウの頬を摘まんだ。

「俺が来た意味は不測の事態に備えてもあるんだからいいの」

決して力は入っていないが、これ以上の謝罪はいらないというリリットの強い意志だけ

は伝えてくる指に、ユウは小さく頷いてその手に手を重ねた。

「マウちゃん、前のお団子のお礼にレイちゃんに何か買って帰らない？」

「あははっ。いいね、それ」

絡ませた指にマウちゃんの方からも力が込められる。

笑うと左の頬が引つ張られる感覚がするけど、そんなことはもう慣れてしまった。

人の目が集まるであろう傷なんて気にせず、真っ直ぐに前を見て堂々と歩く。強く握った手に幸せを感じながら、二人は並んで公園を後にした。

／＼／＼／＼／＼／

マウちゃんとゆきちゃんと別れて、僕は今、目的地のカフェにいる。

昼食時ということもあって、スーツの人に紛れて国家事務員の制服を着てる人や治安維持部隊の制服の人も多くいる。

耳を澄ませば聞こえてくるのは、内部情報も混ざった愚痴や世間話たち。

新しく入ってきた子が全然働いてくれないのよ。

最近の上司はなんか機嫌悪くない？ 俺らに当たられても困るし。

食堂の飯ってうまいけど遅いんだよなあ。

昨日さ飲みいけなかったから、明後日にでも行かね？ 事務の可愛い子集めるし。

馬に乗れなきやいけなんぞ知らなかった、知ってたら治安維持部隊なんか入ってないよ。

それより、治安維持部隊の特殊部隊のこと知ってる？

色んな会話の中から取捨選択をしていって、聞きたかった内容を見つけた。急いでその声だけに全意識を集中する。

「特殊部隊って新しく作る予定ってやつ？」

「予定じゃなくてももう作られたよ」

その言葉に思わず心の中で舌打ちが零れる。顔に出そうになるのを、なんとか心の中だけに留めて、じっと彼らの言葉だけに耳を澄ませる。

「マジで？ 誰が入ってるの？」

「隊長さんと、隊長さんが選んだ人間だけで構築されるらしいよ」

「じゃあ、副隊長さんと最強さんも入ってるな」



「当たり前だろ、あの人があの二人を連れてかねえわけねえもん」

心の中の舌打ちがどんどん増えていく。

「活動開始は？」

「明後日には発表されるはずだぜ」

一つ咳をして、グツと感情を堪える。

予想はしていたけど一番面倒なことになったのは確かで、深くため息が零れてしまったけどそれも仕方ないと思う。これは、僕は悪くない。

「あはは、レイくん、顔こわーい」

煽るような物言いに顔を上げれば、レトくんが目の前の席に座っていた。

いつからそこにいたのか。会話に集中してたとはいえ、目の前の席に座られたというのに全く気が付かなかった。

それに、今この子『レイくん』って呼んだよね？

驚いた表情のまま固まっている僕に、イシシつと歯を見せてレトくんはなんでも無いふうにして笑って首を傾げた。

「……レイくんでもいいでしょ？」

溜めた言葉に『今は』と隠されていることが分かる。

流石、情報屋。僕らの正体なんて当の昔に突き止めていたのだろう。

それでも彼らのアジトでは『シャルル』と呼んでくれていたのは、僕が『私』シャルルとして会っていたのを尊重してくれていたんだな。

国家の関係者が多いここで『シャルル』と呼ばないのも、僕のことを気遣ってくれているからだ。彼らが最高の情報屋として強い信頼を得ているのは、きつとこういう細かなところも含めてなんだだろう。

僕が黙っている間に勝手に追加注文までしている、セグレットに仕方ないなど肩を竦める。

「レイくんでいいよ。それより持ってきてくれた？」

「もちろんあるよ。ご確認後に、ご料金もお願いします」

茶化して言うセグレットにははいと軽く返してレイはファイルを開いた。ファイルには『展覧パーティー』当日の分刻みのスケジュールから吉兆の美術館の詳細な間取り図まで、注文していたものが完璧に揃えられていた。

「さすが、全部揃ってるね。はい、コレ」

「うまつ、ん、ありがと」

勝手に注文していたパスタを美味しそうに食べながら、封筒を軽く覗いて「おっけ」とセグレットは封筒を内ポケットに仕舞った。

ちゃんと確認しているのか不安になるような速さだったが、しっかりと仕事をしないで

帰ってアラウドに叱られることを、セグレットが一番嫌がっていることは分かっているの  
で、多分大丈夫だろう。

「レイくん、ここ集合にしたのは情報収集？」

「そうだね『フォルテ』が特殊部隊になるか気になつてさ」

「あーそれね。なるよ、確定してたはず」

「え、その情報いいの？ タダでもらっちゃって」

「あはつ別にそれくらいいいよ。つか、ほぼ聞いてたじゃん」

パスタを口いっぱい詰めて込んでセグレットが顎で指したのは、さつき聞き耳を立ててい  
た職員たち。

セグレットがいつから来ていたのかは分からないが、彼にも聞こえていたのなら話が早い。

「あの人たちの話はホントってこと？」

「そうだね。隊長ご本人も認めてたし、俺が本当つて言うんだから正確な情報だよ」

「隊長本人つて、ハイネルと知り合いなの？」

普段の飄々とした姿ばかり見ていたセグレットは、眉を寄せて静かに瞳を揺らしている見  
たこともないレイの姿に一瞬目を見開き、すぐに目を閉じてパスタを飲み込むと手を振る。

「さあね。いくらお得意様の質問だからって情報元は漏らせないのが当たり前でしょ？」

パスタの詰まっついていない頬を空気でパンパンに膨らませたセグレットをみて、ハツとした表情になったレイは自分のこめかみを親指で押してクルグルと揉み解す。

「……そうだね。ごめんね、レトくん」

「あのさ、言いたくなかったらいいんだけど。レイくんって治安維持部隊の隊長さんとなにかあるの？」

「なにもないよ」

言い辛そうにおずおずと聞いてきたセグレットにレイはいつも通りの笑顔で即答した。

「ただ、治安維持部隊の隊長さんなんか敵になつたら面倒くさいなあって思ってただけ。僕は無駄に不穏分子を増やしたくないなってただだよ」

心の奥に仕舞いこんでたモヤが少しずつ溢れてきたのを感じる。口から醜い言葉が出てしまいそうで、奥歯を強く噛み締めて違うことを考えようと脳を動かす。

「そうなんだ。まあ相手が弱いに越したことはないもんね」

「ウチのメンバーとかは『強い方がやる気が出ていい』なんて言いそうな子もいるけどね」やるからには徹底的に！ どうせ戦って勝つなら強い相手と競り合って勝ちたい！ そんなかつこいいことをさも当然というように語るゆきちゃんの姿を思い浮かべる。

彼女は僕とマウちゃんよりも、よっぽど男らしくて勇ましくて格好良くて綺麗な女性だ。

真つ直ぐ強く清らかな髪は彼女の信念そのものを表しているみたいで。頭の中の彼女の後ろ姿は背筋がピンとしてずっと先を見据えている。

マウちゃんはその背が曲がることがないように支えて寄り添ってくれる。しなやかさと気品溢れる緩やかなカーブを描く髪は彼の心の奥にある優しさを思わせる。

そんな二人と違って、僕は立ち止まって後ろばかりが気になってしまう。

あの二人とは正反対だ。

けれど誰よりも凄い二人が僕の手を取ってくれるから、ここまで進めている。

あー。また、勝手に止まって振り返って、落ち込みそうになった。

ゆきちゃんとマウちゃんのことを考えるだけで、心を覆い始めてたモヤがまた奥の方に仕舞いこまれていく。以前よりもきつく縛り上げてモヤを閉じ込めてしまう。

「急に笑ってるけど、なに？ 楽しいことでも考えてたの？」

「んー？ そうだね、最高に楽しいことを思い出しちゃってた」

にまにま笑って、残りのパスタをかきこんだセグレットは「ご馳走様でした」と手を合わせると立ち上がった。

「帰るの？」

「仲間自慢とか聞きたくないしね。それじゃあ、ご馳走になりますっ」

パチンっとアイドルさながらのウインクをして、ひらひらと手を振ると帰って行った。

「まったく、勝手な子だな」

ちゃっかり、いなくなる前に僕の伝票の上に自分の分のまで置いて行ってるし。まあ、追加情報ももらったし、その分と思えばお安く済んでるのかな。

零れそうなため息を飲み込んで、二つの伝票を持ってお会計へと向かった。

「ただいまー」

「おかえり」

アジトに帰れば、二人の方が先に帰っていたみたいで部屋の奥から揃って声がする。

何してるのかとソファに腰かけて二人がいるキッチンを覗き込むが、死角で二人の姿すら見えない。

とりあえず、すぐに作戦会議ができるように机に調査ファイルを広げて準備だけしていると、珍しくエプロンをつけたマウちゃんがやってきた。

「お疲れさま、なんかいい情報無料でゲットできた？」

「聞き耳立てて分かったのは、やっぱり特殊部隊がすぐに作られるし、その部隊を引き連

れるのが治安維持部隊の現隊長さんみたいってことかな」

「ふーん。また厄介そうなのが相手になるね」

さほど気にしてもなさそうに平然といつも通りの雰囲気のマウちゃんの手が、僕の背中にとんとと置かれた。

「いいね！ 手強そうな方が私は嬉しいよ」

キッチンから何やら美味しそうな湯気立つモノを持って、ゆきちゃんが笑っている。思い描いてたのと同じ反応をする二人が面白くて肩を揺らしていれば、その肩を掴まれて後ろに引かれて、背もたれに背をぺたりと付けられる。

「はいっ、お疲れの脳には美味しいものを注入するのが一番だから」

「俺も頑張って焼いたんだよ！」

資料が並べられた机の代わりに、膝にお盆と一緒に美味しそうなモノが乗せられた。

ふかふかと厚みのあるホットケーキに、お皿から垂れ落ちそうなくらい長い長いベーコンが乗せられている。崩れそうになりながらも三枚も重なっているホットケーキの間からは、どろりと溶けたチーズが顔を覗かせる。

おかずホットケーキだ。

食欲を掻き立てる甘じょっぱい匂いがして、口の中に唾液が広がった。

急かされて上手く冷ませずに口に入れたホットケーキが熱くて、はふはふと熱気を逃がすことでやっと味わえた。

「うつまあ」

僕の言葉に満足そうに顔を見合わせたマウちゃんとゆきちゃんは、正面のソファに並んで座ると僕の持つて帰ってきた調査ファイルに目を通し始めた。

「うん、なんとなく決まったかな」

ホットケーキが残り一枚になったところで、マウちゃんがファイルから顔を上げた。

「どんな作戦でいくの？」

楽しみですと頬を染めてファイルを覗き込んだゆきちゃんに笑みを溢して、マウちゃんは僕にも見えるようにファイルを広げた。

「展覧パーティーは十八時から始まる。警備員は……」

「ごめんくださいあい！」

マウちゃんの言葉に被せて響いたのは、聞いたことのある声。

勢いよく振り返ると、窓枠に足をかけて外から中に入っでこようとしているレトくんが



いた。

それに驚きながら、急いで室内に彼を招き入れる。

本来なら彼の行動に怒るべきなのだが、レトくんの額に滲む汗と上がった息から尋常じゃない急ぎの用なのだろうと口を噤み、彼の言葉を待つ。

「はい」

「ありつがと」

ゆきちゃんから渡された水を一気に飲み干して、レトくんは未だ整いきれてない息を飲み込む。

「シャルルさんと別れて、すぐにアラウドから連絡があつたんだ。それで、急いで伝えなきゃって」

「ゆっくりでいいから、何を教えてくれるの？」

早口になりながらうまく息をできていないレトくんの背を擦る。すると膝に当てていた手で僕の両肩を掴んで、レトくんはまっすぐ僕の目を見た。

先ほどよりも幾らか整った呼吸で大きく息を吸うと彼は眉を寄せて、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「ノアって画家が会見をやるって」

言葉の意味が理解できずに、脳が動きを止める。

会見？ 会見ってあのかいけんだよ。え、僕はそんな指示なんてだしてない。っていうことは勝手に会見を決めた？ いやいや、嘘でしょ。

「これは計画にない行動じゃないかってアラウドが言ってる、急いで伝えに来ただけだ。これもレヴォルトの作戦なの？」

「そんなわけないだろ！」

何も答えない僕の代わりに声を上げたのはマウちゃん。綺麗にセットした髪をガシガシと掻き筆<sup>かきむし</sup>つて、イラついた様子を表すように音を立ててソファに腰掛けるとマウちゃんはテレビをつけた。

「セグくん、会見がいつか分かる？」

「今日の夜、詳しい時間まではまだわからなかったんだ」

「今夜八時からだよ」

ゆきちゃんの質問に答えたレトくんの回答に被さるようにマウちゃんの声が響く。

テレビのチャンネルいくつか切り替えて「うん、絶対八時だ」とマウちゃんが頷いて、テレビを指さした。

マウちゃんの指先を辿って画面を覗くと、普段通りの料理番組が流れている右端に『八時から予定を変えて、緊急会見を放送いたします』と表示されているのが見えた。

「緊急速報とかで会見しないのか」

「嘘か本当かわからない内容の放送だし、なにより高顔面偏差値を相手取るからね。今の段階ではテレビ局も大きく出られないんでしょ」

一つ大きなため息をついて、腕を組み直すと

「まあ、大きく宣伝されてないだけまだ幾分かマシかな」

自分を落ち着かせるようにそう言つてマウちゃんは笑うが「マシつてただけだけど」と怒気を孕んだ声で吐き捨てていたのが聞こえ、かなり怒っているのが分かる。

でも、マウちゃんが怒るのも仕方ない。

あとは作戦を立てて、何度もシミュレーションをして、レヴォルトとしてパーティーでオリビアの悪事を暴くだけでよかった。

ノアさんがするべきなのはオリビアを挑発し、パーティーに支障が出るかもしれないこんな行動ではなく、静かに今まで通りオリビアに従順なふりを続けること。

会見なんて、もつともとってはならない行動だ。

「なんで……」

『簡単なことだよ。何もするなつて言われたからじゃないの？』

「え」

額を押さえて呟けば、返ってきたのはここにいるはずのない人の声。振り返れば手の平の

上に小型スピーカーを乗せたレトくんがいた。

「アラウドだよ」

スピーカーを指して言ったレトくんの言葉に納得して、彼の方に近づく。

「ラウ、なんでそう思うのか教えてくれる？」

『勝ちを確信して自分でも何か行動しなくなっただらうね。当事者なんだから「何もするな」って言われて待ってるだけの状態に不安と歯がゆさを感じても何も可笑しくない』

「そんなことで？」

『人間の突発的な行動なんて「そんなこと」で出るもんだよ。感情って厄介なものがあるんだからさ』

マウちゃんにそう答えるアラウドの見解は理解できた、納得はできなかったが。確かに自分も何かしなきゃという考えになるのは、当然のことかもしれない。

でも、それならこちらに相談して欲しかった。

『何か対処しないと依頼者が批難を浴びて終わるんじゃないかな』

「今、ノアさんにヘイトを集中させたくない。はあ、よしっ緊急会議するよ」

「うん」

真っ白な紙を手に取りながらユウと一緒にリリットのいるソファに座る。三人で浅く座って、机の上に紙を広げてスピーカーに向かつて叫ぶ。

「ラウトは悪いけどできるだけ会見のことを調べて、どんな情報でもこっちに流してください」

『了解。セグ、テレビ局に行ってきた』

「はい、細かな指示はついてからって感じね」

グッグツと軽くストレッチをして、レトくんはきた時と同じ窓に足を掛けた。一度振り返り「スピーカーは置いてくね」と笑い彼はそのまま外に飛び出した。

窓から消えた姿が飛び上がり、向かいの家の屋根を駆けていくのを見届ける。

レトくんの背が見えなくなったのを確認して紙に視線を向ける。リリットがラウトからの情報で分かった会見会場の間取り図を書いていた。

ラウトの口頭による細かな説明を正しく理解して、リリットはどんどん紙に間取りを描いていく。

テレビ局の一階にある大きめの会議室。一番奥に五センチほどの段差があり、真ん中にあるのは演説台。その前には椅子が並び、演説台の方を向いている。

決して小さくない会場だ。治安維持部隊も配備されるだろう。



マウちゃんとレイちゃんの二人が作戦を立てている声に耳を傾ける。

こういう頭を使って考える時には、私はあまり役に立っていないから歯痒い。少しでも役に立ちたくてコーヒーを煎れて持っていく。

二人の側におけば、間髪入れずに口をつける。視線は机上の紙からは外れず、カップから離れた口からは変わららず作戦会議が続く。

「これは武器がいるね」

「うん」

「ゆきちゃん。全員分の武器と、そうだな……うん、アレも用意してもらっていい？」

マウちゃんが背を指して『アレ』と言ったのに大きく頷いて返す。

「ありがとう」

笑って手を振ってきたマウちゃんに「いいよ」と返して地下に向かう。

一階に降りて階段裏にある壁を押し込む。ガコツという床板がズレる音がしたので、押し込んだ壁の隣を二度ノックする。

壁が内側に折れて姿を表したレバーを引くと、ギィギィと鈍い音を立てながら床板が横

にずれて穴ができた。

梯子が付いているがそれを無視して中に飛び込む。床に着地すると、パツと自然に部屋の中が照らされた。

照明がついて見えるのはいくつもの棚と、その棚の上や壁に飾られている武器たち。

「よし、まずはレイちゃんのからね」

奥にある銃コーナーへ足早に向かい、ずらりと並べられた銃の中から今回使うことになりそうなものをいくつか選び、不具合がないか確認をする。

今日の二人の姿は少し懐かしさを感じたな。

思い出としては「ふふっ」肩を揺らして笑みがこぼれた。

レヴォルトとしての活動も長くなってきた、最近は二人とも余裕ができていた。

だから、あんな風に取り乱しながら肩を寄せ合って背を丸めて、頭をフル回転させて必死になって作戦を立てている姿を見ることも減っていた。

二人とも変わらないなあ。

余裕がある方が絶対いいというのは分かっているけど、ああいう二人の姿が好きだから仕方ない。

必死になって考えてくれた。あの時のこと、私たちが三人で初めてやった作戦を思い出すから。

~~~~~

ゆきちゃんを地下の武器庫に見送ったマウちゃんがグッと体を伸ばす。

「レイ、どうかした？」

首を傾げて不思議そうにこちらを見るマウちゃんに「ううん」と返して、視線をコーヒーに移す。

「こんなに切羽詰まるのなんて久しぶりだなんて」

「あはは、確かに。もしかして初めて作戦を立てた日以来じゃない？」

「あー、そうかも。その時はすっごく緊張したんだよね」

休憩を兼ねて少し思い起こしてみる。

懐かしくも、僕達三人の運命を変えた大事なあの日のことを。



あの日、僕たちが出会った日。

「しっかりと話したいな、場所を変えない？」

僕の本当の顔面偏差値を知ったマウラさんが真剣な目で言った言葉に頷いて、僕は二人を家に招待した。そこで、三人で多くのことを話した。

昔から顔面偏差値を上げようと努力してきたこと、その努力でもBマイナス以上にはなれなかったこと。

雰囲気や服装に髪形、言動などに注意していくうちに顔面偏差値が高く見られるようになったこと。

美意識がより高い女性が好感を持ちやすいようにと意識しているからか、男性よりも女性に高ランクに見られやすくなったこと。

顔面偏差値は顔だけでの判定だ。でも人はその人の全てを見て優越を決めている。機械と人では感覚に違いが生まれるのではないかと気づいたことを話した。

「なるほど、たしかにそうなると本来の顔面偏差値と俺達が判断した顔面偏差値に差が生まれてもおかしくない。それは低偏差値の人は誰でもできるの？」

頬杖について興味深そうに僕の昔の写真を見て、マウラさんが聞いてくる。

「ムリです。元々もつ空気感や声が整って見えるようなものでなければなりません」

「レイさんが高偏差値に見えるのは、そこら辺が、なんか、こう、上手くいつてるからってことですか？」

「はい、そういうことですな」

なんていえばいいのかわからないみたいで、ワタワタと手を動かしながら小首を傾げて質問してくる冬稀さん。

抽象的な質問だったが彼女の言いたいことは理解できたので、その問いに答えて頷く。

「僕は、顔面偏差値が大事と言いながらも、結局その顔面偏差値を人が正しく理解できてない世の中に疑問をずっと抱いてました」

この世界で生きているから『顔が良いものが得をする』ということには納得しているけど、それでもその顔が良いの定義が変わるなら話は別だ。

もし機械でなく、人が顔面偏差値を決めていたのなら、僕はAプラスになれていたかもしれない。一度そう思ってしまうと不満は溜まるばかりだった。

「お二人の話を聞いて、余計にこの制度は『顔』重視するとしても、もう少し変化を付けた方がいいと感じたんです」

交合わせて握った両の手に力が入って、爪が甲に傷をつける。

自傷行為であるが、冷静に話すために溢れそうな感情を押し留めておくには、少しの痛みが欲しかった。

「でも僕にはこの『普通』を変える力なんてない。けど、マウラさんのご両親の考え方に変化を与えるくらいのお手伝いならできるかもしれない」

僕の目を真つ直ぐ見ている、お二人に視線を返す。逸らすことも、瞬きさえせずに、二人と合わせた目は離さない。

「協力したいっていうのも善意だけじゃなくて僕の自己満足が入ってるのは自覚しています。だから嫌だったら断ってください」

なんでこんなお願いをしているのか、自分でもよく分からなかった。こんな自分らしくない気もするし、でも本当は何か行動したいと思っていたのが、これ幸いと溢れ出てしまっているのかもしれない。

自分でも、今の自分が理解できなかった。

だから、もう考えるのはやめて、欲望のままに本心でやりたいということを伝えられた。

「それでも良いなら、僕にお手伝いさせて頂けませんか？」

二人に向けて差し出した両手。

お願いするのと同時に頭を下げてしまったせいで前が見えなくて、二人の表情が分からないのが怖い。

時間がゆつくりと感じて、数秒経っただけなのか、何分も経っているのか分からなくて。どうしようも頭がぐるぐる回ってきたときに、両手が強く握りこまれた。

「お手伝いするって自分から言っただから、こき使われても文句は無しだよ？ レイ」

「私もレイさんになら、手伝ってほしいです」

顔を上げればにこりと柔らかく笑っている二人がいた。その顔に僕に対する嫌悪感とかは見えなくて、二人が僕のことを受け入れてくれたのが分かった。

「あつそうそう『自己満だ』って勝手に罪悪感とかやめてね？ 俺たちからしたらそれが凄く救いになってるんだから。ね、ゆきちゃん？」

マウラさんは明るい声色で片目を閉じて、茶目っ気たっぷりに笑った。

「うん、本当にレイさんの『お手伝いしたい』って言葉は私達にとつて特別なものなんですよ。友人にこの話をした時も、うちの両親に傷の報告をしたときも、それならマウラさんのことは諦めないだね、辛いねって言われたの」

悲しそうに一瞬だけ目を伏せて、冬稀さんはまた僕を見ると、ふわりと微笑んで握っていた手に力を込めた。

「おかしいんだって別れなくていいんだって言ってくれたのは、マウちゃん以外はレイさんだけだった。だから、すごく嬉しかったんだ」

肩を小さく震わせて笑った二人は一度お互いの顔を見合わせると、僕の手を離して背筋を伸ばした。

「ありがとう」

綺麗に頭を下げた二人に驚いた。まさかお礼を言われるなんて思ってたなくて、一拍遅れて急いで頭を上げてもらった。

「お礼なんてっ、言うべきなのは僕なんですから！」

「いいんだよ、言いたくなっちゃったんだから！　ってか、レイさ。これから長い付き合いになるんだから、そのよそよそしいの止めようよ」

「あははっ、そうだね、私もやめるからレイちゃんも止めよう！　初めて声かけて来たときは敬語とか丁寧な感じとか無かったじゃない、それでいいよ」

「えっ、えっ」

さつきまでのカッコイイ感じが無くなってテンション高く、楽しそうに話す二人の口調は友人に対するそれで、困惑してる僕の前に、今度は二人が手を差し出した。

「敬語はなし！ マウちゃんがいいよ。よろしくねレイ」

「お互いもつとラフにいこ、ゆきでも冬稀でも好きに呼んで。レイちゃんよろしく」

「くっ、くはははっ。よろしくね、マウちゃん、ゆきちゃん」

なぜか僕を挑発するみたいな顔でニヤリと笑う二人が面白くなってきて、吹き出しながらもその手を取った。

固く繋がれた手が二人の意志の強さを教えてくれて、僕からも強く握り返した。

そこから僕たちは三人で協力して、マウちゃんのご両親を説得する作戦を立てた。考えるのは俺の担当だと言ったマウちゃんと肩を合わせながら、必死になって考える。ゆきちゃんにも手伝ってもらいながら、僕たち三人でできる最良の作戦を探した。

マウちゃんは家で別れないという頑固とした態度を崩さず、逆にゆきちゃんはマウちゃんのためなら別れることも受け入れているといった態度を取り続けることにした。

マウちゃんのご両親の中でも、お父様の方はゆきちゃんのことをそこまで拒否していないらしい。

つまり、お母様の考えさえ変えればいいのだ。

僕は、ひったくりにあったお母様を助けたことで自然とお母様と仲良くなることに成功した。

元々なにかしらのアクションを起こして知り合うつもりだったから、助けて仲良くなるなんて好都合で、そこからお母様と僕はお茶会友達へとなっていた。

なぜそんなことをしたのか。

お茶会友達としてお母様と親しくなっていくことで、彼女の本心を知るためだ。

予想通り、半年の間、お茶会を重ねていくうちにお母様は僕に相談してくれようになつた。

「貴方と近い歳の息子がいるの、その子のことで最近少し悩んでいて……」

話をしている、この人が悪人でないことは分かっていた。だからなぜそこまで頑なになつているのかが知りたかった。

お母様は全ての出来事を話してくれた。脚色もなく、ゆきちゃんから聞いていた話と同じそれを聞いて、よりこの人がゆきちゃんを強く拒否しているのか気になった。

「冬稀さんはね、本当にいい子よ。彼女は私達の想いを理解してこちらの要望を飲んでくれたわ。けど息子が頑なのよ」

「そうなんですか、でも僕はどちらの気持ちもわかるなあ」

「どちらの？」

「ええ、貴女の気持ちはもちろんですけど、息子さんがつい頑固になってしまう理由も、僕には分かります」

お母様は僕のことをマウちゃんと重ねることがある。

年齢も近いということ以外にも、彼女と会うときはいつもマウちゃんが着ている服に寄せたり、マウちゃんの癖と同じことをしてそれを助長したのもあるだろう。

わざと少し悲しそうに眼を細めて、視線を下に持っていく。

頬杖をついている手で髪を耳にかけて、そのままピアスを指でいじった。マウちゃんがよくやる仕草だ。

「もし自分のことを顔に傷を負いながらも守ってくれた女性がいたとしたら、その人と傷を理由に別れるなんて納得できませんよ。次は自分が彼女を護りたいと思うのが男です」



「それは分かっているんだけどね」

「彼女さんを認められないのは、やはり家紋のことを考えると、ですか？」

目を合わせればお母様は小さく頷いた。

「ええ……。我が家は代々顔面偏差値が高い者だけで構成されてきたわ。私はこの家に生まれて旦那を選ぶ時も高貴な家であるために顔面偏差値で選ばされた」

「でも旦那さんとは仲が良いのでしょうか？」

「顔面偏差値の高い者だけが集まったパーティーで彼とは出会った。同じ高貴な家柄で次男、婿とするには良い条件が揃いすぎている程の人でね。そんな彼と私は恋愛結婚できたんだもの、奇跡だと思っただわ」

「たしかにそれは幸運なことですね」

目を閉じて幸せそうに思い出を語っていたお母様は、ゆっくりと目開けると自身の指先を見つめて俯くように僕と視線を合わせない。

「でしょ？　そしてマウラも、息子も恋をして顔面偏差値の高い女性を連れてきた。私は、奇跡は続くのだと嬉しかった。けれど幸運なことは何度も続かないのね。冬稀さんはマウラを庇って顔に傷を負ってしまった」

「息子さんはとても素晴らしい彼女さんをもちましたね」

「ええ、冬稀さんとマウラの交際に反対するつもりなんてなかったわ。けど、顔に傷ができてしまったのなら、我が家の家紋を護る為にも交際を認めることなんてできない」

やっぱり、そこか。

マウちゃんに話を聞いていた時からお母様の一番危惧している点はどこなのか予想をつけていた。

家紋への傷、高貴な家を代々守ってきたからこそその責任感があるのだろう。

メトカーフ家はお母様の家系だ。お父様は他の高貴な家からきた婿であり、この家の主人はお母様である。

ずっと守ってきたものを、自分の代で傷つけることに恐怖を感じるのは仕方ないこと。「冬稀さんには感謝しかないわ。でも、うちの家紋に傷がつくことだけは認められないのよ」

苦しそうにしているお母様に声をかけることは出来ず、そのままその日は帰った。

家紋への傷。お母様が一番恐れていることがはっきりした。

なら、ここからやることは簡単だ。

分かったからといって何ができるのだと首を傾げている二人に、作戦を説明する。

僕はそこそ顔が広い。

それは皆が顔面偏差値が高いと思つて寄つて来るからというのもあるのだが、僕にとつても彼らは短く深く関われるから助かっている。

友人の友人の友人にマウちゃんとゆきちゃんに近い経験をした人たちがいたはず。

今回はその二人の実体験を使つて、家紋を護るためには寧ろ別れない方がいいと判断させればいい。

計画を練つて数か月たったある日。作戦決行日になった。

「このケーキが美味しいんですよ」

「本当に！ レイクくんが教えてくれるところは全部おいしいから、お友達とくると皆すごく喜んでくれるのよ」

「通りに面したテラス席がまたいいんですよ。晴れの日にここで飲むオリジナルコーヒーに勝てるものはないですよ」

オリジナルブレンドのコーヒーを見せびらかすように掲げて無邪気に笑えば、小さく笑つたお母様はテラス席から見える大通りに目を向ける。

お母様の視線が自分から離れた、この隙に大通りの向こう側を見る。

男性がこちらに大通りを渡っている。

そこは人以外も通る、横断するには危険な場所を無理に進む彼に人の目は彼に向いた。僕とお母様が座っている席の隣。若い女性二人が道を横断してくる男性を指さしながらヒソヒソと声を潜めた。

「ねえ、知ってるあの人？」

「え、なにに？ 知らないひとだけだ」

隣の席の僕らには丸聞こえだが、コソコソと話されれば気になる。

お母様の目が一瞬、女性たちに向かったのを見て、ニヤけそうになった頬を引き締める。

「あの人ね、彼女いたらしいんだけど、彼女が事故で怪我したからって別れたんだって」  
「え、まじ？」

ぴくりとお母様の眉が動いた。そんなこちらのことなんて知らない女性たちは楽しそうに会話を続けた。

「マジだよ。大きな目立つ傷ができて、別れたらしいの。うちの近所じゃ有名なカップルだったから、理由知って皆ドン引きでさあ」

「うわあ、周りからなんか言われそー」

「言われてる言われてる。彼女が事故つたのもアイツが轢かれそうになったのを庇ったからなんだって。だからそんなことをしてくれた人を振るのかって皆から怒りの集中砲火よ」

「それは、そーなるよね。家から出るのも大変なんじゃないの？」

「元々高貴な御家柄のボンボンだから、家から出なくても生きていけるみたいだけど。批判や非難はまだまだ続くんじゃないかなあ」

キャツキャと楽しそうに話している彼女たちに比べて、お母様の顔色はどんどん悪くなつていく。見ていてかわいそうだが、まだ耐えていてもらわないと困る。

作戦はまだまだここからなのだから。

話の中心の男性とすれ違うように姿を現したのは、マウちゃんとゆきちゃん。

自然と男性を見ていた女性たちも、マウちゃんとゆきちゃんに視線をずらした。

手を繋いで楽しそうに会話している様子は、よく見る仲の良いカップルそのものだ。

遠くから見ても高顔面偏差値だと分かるが、近づくにつれてゆきちゃんの頬にある傷の存在感が強くなっていく。

「え、あの美人なのに。もったいない」

男性について得意げに話していた女性が、痛そうに顔を歪める。

「私、あの二人知ってるよ」

そんな女性が変わって、次はもう一人の女性が尊敬と少しの羨ましさを滲ませて二人の話始めた。

「あの女の人もね、隣にいる彼氏を守ってあの大きな傷ができちゃったんだって」

「まじで？ 見た目もかっこいい系だし最強じゃん」

「もともと凄い綺麗な美形カップルで有名でさ、みんなの憧れだったんだけど。彼氏さんに片思いしてる女がいて、ソイツに切られそうになった彼氏さんを庇ったんだって」

その言葉に話を夢中になって聞いていた方の女性が大きく見開いた。

「うわあ、高顔面偏差値だったんでしょ？ すごいね、私なら無理だわ」

「さらに凄いのがさ、彼氏さんが高貴な家の人なのに絶対彼女と別れないんだよね！」

「まじで？ 彼氏さん優しいじゃん。さっきのクズ男はすぐに彼女と別れたのに」

高揚しているのか大きくなった声で語っている彼女たちの声は、もう耳を澄まさずとも何と言っているのかハッキリと聞こえた。

「マジマジ。だからさ、影ながらだけど私もめっちゃ応援してるんだよ。私の周りの人もそうだし、応援してない人の方が少ないくらい」

「え、私もそれは応援しちゃうわ。別れてないのが好感度高いね、彼氏さんも最高すぎるし、私もあんなイケメンで一途な彼氏ほしい」

それから、どんな男がタイプかという話に花を咲かせ始めた彼女たちを横目に、お母様を盗み見る。真剣な表情で、ゆきちゃんとマウちゃんの後ろ姿を眺めている彼女は思考を

深くしているようでコーヒーの入ったカップを持ったまま動きを止めた。

数分後、お母様はゆっくり何度か口を開けては閉じた後、僕の方に顔を向けた。

「今から聞くことに、本音で答えてほしいの」

「はい」

いつになく真面目な表情と僕の顔を真っ直ぐと見る瞳に、お母様が僕が嘘をつかないか、本気で僕の言葉の真意を見ようとしているのが分かった。

その瞳に微笑んで頷いけば、お母様は冷たさと優しさの両方を感じさせる声色で問いかけてきた。

「冬稀さんとマウラを別れさせた場合、我が家は非難されると思う？」

お母様の顔を見て、少し目を伏せる。悲しそうに言い辛そうに耳にかかる髪を撫でてピアスに触れる。

「ええ、非難や中傷は避けられないと思いますよ」

苦笑を浮かべてお母様の方を見れば、彼女は「そうよね」と零してコーヒーに口を付けた。流れる沈黙の中で、何か話そうかと思案していれば目の前に綺麗なケーキが置かれる。

「お待たせ致しました」

「ありがとうございます」

お礼を言って受け取る、丸くカットされたフルーツが可愛らしいケーキは緊迫していた  
空気感をほんの少し和らげてくれた。

「マウラさんと冬稀さんが有名なカップルで、冬稀さんの怪我の原因もあんなに詳しく語  
られる程、知れ渡っているなら。別れたときにマウラさんが非難されることはあるでしょ  
う」

「……」

お母様は静かに僕の言葉の続きを待つ。

「いいや、マウラさんが冬稀さんを愛しているのに無理矢理別れさせられたとなれば、非  
難の矛先はメトカーフ家にいくでしょうね」

「顔が重視されるのは当たり前なの？」

「ええ。Aランク以下だったら仕方ないと思う人も多くなるでしょうが、冬稀さんはAマ  
イナスです。そして、元々がAプラスであり傷でのランク降下だというのなら、後継者の  
ランクにも影響はないのに酷いと思う人が多いでしょうね」

フォークで刺した丸いメロンをくるくると回す。黄緑色のそれが太陽の光を反射してい  
るのを見て楽しんでから口に含んだ。

「それはAランクにいく者が少ないからということ？」



「はい、BからCプラスの人が一番多いですから。Aランク代なんのに不遇な扱いを受けている人がいれば理解できずに、Aマイナスもあるのだからいいだろうと声をあげるでしょうね」

「声を上げない者より、声を上げる者が多いと?」

「はい。ですが、これは全て僕の予想なので必ず起こることではないです。けれど起こる可能性は大にあることだということは頭に置いとくべきかと」

口の中に広がるメロンの柔らかな甘みに、頬が綻びそうになるのを引き締めてお母様と視線を交合わせれば、彼女は目を閉じ諦めたように肩を落とした。

「帰ったらマウラと話すわ」

「そうですね。それが良いと思いますよ」

鋭く研ぎ澄まされていた空気に花が舞う。ふわりとこちらを包み込んでくるような暖かな声色はマウちゃんとは本当に似ていて、お母様が彼の母親なのだと強く感じた。

「もう、本当に。あの子も私に似て頑固なんだから」

その日の夜、二人からお母様が付き合い続けることを許してもらえたという連絡が来た。

僕のしたことは決して多くは無いのだと言ってもお礼を何度も言い続ける二人を宥めるのが少し大変だった。

あの日、僕がやったことはお母様とあの場所でお茶会を開くことだけだった。それ以外の準備は全て二人にも手伝ってもらいながら、前日に済ませていたし。

準備と言ってもあの場に必要の人をあの日、あの時間にあそこに集結させるだけ。

大通りを横断した男性は、友人の友人にお願いして、あの日あの時間にあの道を通る場所まで待ち合わせしてもらった。

大通りを彼が無理に横断することは彼の性格から予想できたので、彼に自然と視線を誘導することができるのは分かっていた。

だから、道が良く見えるテラス席を選んだ。彼が良く見えるように。

あとは、ゆきちゃんとマウちゃんの周囲で噂話をしやすい人を探して、該当したあの女性二人を店に誘導した。

もちろん女性たちは噂話をするという理由だけで選んだわけじゃない。

一人はゆきちゃんとマウちゃんの事情を知っていて尚且つ二人に好意的、一人は二人のことを知らない。逆にあの男性の事情に詳しい人と、詳しくない人を一人。

その条件に合っていたのが彼女たちだった。

彼女たちを店に来るように誘導するのも簡単だった。店の店員のふりをして、彼女たちが二人でいるときに割引券を渡した。クーポンの期日は次の休日、お茶会の当日まで。

一枚しかない割引券はペア割り、テラス席をお勧めする内容のものを渡せば、自然と彼女たちは一緒に行こうと話した。

店員のふりをしている自分の前でそう話す彼女たちに、テラス席が空きやすい時間帯を教えてやれば、彼女たちはお茶会の時間に店に来るように誘導できた。

たったこれだけ。

これだけのことで、お母様の考えを変えたのだからよかった。

家柄を気にする彼女なら、きつと別れることで非難の声が出て家紋に傷がつく可能性と、ゆきちゃんを受け入れた時の称賛を天秤にかけると思っていた。

慎重に動いたことで、ゆきちゃんとマウちゃんのお付き合いを認めてもらうのに一年も掛かってしまった。

だが、それに対して長かったという想いよりも、僕が二人の力になれたという事実が、

三人で協力して『顔面偏差値が全て』の世界に少しでも抗えたことが嬉しかった。

それから七日も経たずに二人から呼び出された。

僕の前でにこにこ笑っている二人は、ノートを見せてきた。それは、僕が隠していた夢を描いたノート。

この世界に少しでも意欲返ししたい。顔面偏差値が全てではないと分からせたい。

不合理で不平等な世の中への、愚痴を含んだ願望でしかないそれを、二人は掲げるように持っている。

他人に見られては恥ずかしい物。赤くなる頬を無視して取り返そうと伸ばした両手を二人に捕まえられた。

「これさ、本気なら手伝うよ？」

「お母さまを説得したときみたいに、三人でならできるんじゃない？」

マウちゃんとうきちゃんの言葉に頬から赤みが抜け落ちる。驚きと困惑の文字で埋まる脳を何とか動かすが、脳が正常に動けば動くほど二人の目が真剣なのが分かった。

「この世にさ、意欲返してやつ俺もやってみたいし」

「三人で一緒に秘密の組織とか絶対楽しいよ」

肩を合わせて僕を見る二人はどこまでも真剣でどこまでも楽しそうだ。

震える唇に力を込めて、歪みそうになる視界をなんとか保つ。

「僕はテロをしたいわけじゃない。顔面偏差値が高い人が憎いわけでも、高偏差値が優遇されるのが可笑的とも思っていない。ただ、不平等が過ぎることは正すべきだっと思うんだ」

僕の言葉の続きを待つように、二人が微笑む。

顔面偏差値で不当に苦しめる人に、手を伸ばし手助けしたい。顔面偏差値だけでなく個人の才能があるなら、それにも目を向けてもらえるような世界にしたい。

こんな考えを持っているなんて誰にも言えなかった。

言ってしまったら僕が可笑しいって言われるのも分かってたし、なにより、この世界の『考え方』や『当たり前』を否定する言動はこの世界と戦うことと同義だから。

でも、二人はその考えを肯定してくれた。

協力すると僕の手を取ってくれた。

二人が握ってくれている両手に少しだけ力を込めて、二人の目を見る。

「僕と一緒に、この世界に反抗してくれる？」

「もちろん」

バカみたいだと言われるようなこと言つて涙を滲ませてた僕に、二人は悪戯つ子のような笑顔で大きく頷いて、勢いよく僕を抱きしめた。

「懐かしいなあ」

「うん、本当に」

「あの時もさ、初めての作戦だけどうまくいったんだ。今回も絶対成功させよう」  
「当たり前だね！」

中身の無くなったコーヒーカップを置いて、一度大きく伸びてから二人でジッと視線を机上の地図に落とす。

もうすぐ、アラウドから追加の情報がかかるはずだ。

ペンを回しながらスピーカーに視線を移せば、ザザッと小さなノイズの後に『セグレトから情報が入ったよ』そう声が聞こえた。

頷いて答えたがそれでは伝わらないことを思い出して急いで「教えて」と言えば、アラ

ウドは小さく笑みを零して話し出した。

アラウドの情報をまとめつつ、マウちゃんと作戦を練る。

ゆきちゃんとも通信で連携を取りながら、会見に向けて準備を進めていった。

〜  
〜  
〜  
〜  
〜

顔にかかる前髪を直すが、またすぐに顔の前に来てしまう。風が少し強くて、電灯もないビルの屋上。

立ち上がってジッと向かいの建物の屋上を睨めば、一瞬黄色い光が見えた。

『みえたー？』

「大丈夫見えたよ、マウちゃん」

ピアスから聞こえたマウちゃんの問いかけに隣にいるゆきちゃんを見て、彼女が頷いたのを確認してから答える。

「こつちのは見えた？」

『おっ、見えた見えた』

こちらからも一瞬だけマウちゃんのいる屋上に向かってライトをつければ『大丈夫だね』と反応が返ってきた。

ズレた帽子を直す。バサツ、音を立てて靡いたマントに目を向けて、くるくるつとその場で二度ほど回って自身の姿を確認する。

うん、大丈夫。ちゃんと『私』は綺麗だね。

「よし、じゃあ作戦といきますか」

「では二人ともレヴォルトとの名に懸けて。この作戦、必ず成功させようね」

「『もちろん』」

ピアスと隣から聞こえた声の一つ笑って、外していた仮面をつけた。

さあ、ここからはシャルらしくいこう。

『室内温度、照明、出入り口、オーケー。その他もろもろハッキング完了！ こっちはいつでも良いよ！』

「ナイス、リリット。君から見て左から風が吹いてる、気を付けて」

『了解。ユウ、準備はいい？』

「いつでも大丈夫だよ、リリイ」



両手に革のグローブをはめたユウはそう答えると、持っていた手持ちライトを口で啜えた。

「おっへー」

「ふはっ。リリット、良いって」

ライトのせいで上手く話せていないユウに笑みながら通訳すれば、私と同じように笑っていたのか震えた声で詰まりながらリリットが答える。

『はっはいよー』

軽い返答の後、スッと薄く広く空気を吸い込む音がする。リリットが集中してるんだなというのが分かって、彼の邪魔にならないように黙る。

静かになれば、ピアスから漏れる呼吸音が止まって、リリットのカウントダウンだけが聞こえる。

『ゼロ』

その声とともに強く響いた発砲音。

対面のビルの上からすごい速さで何か飛んできて、それをユウが捕まえた。

「ふっ、リリイ捕まえたよ」

『よかった。ユウ、ケガは？』

「ないよ、平気」

難なく飛んできた矢を捕まえたユウが、私に怪我がないことを確認させるように矢を取った右手を見せてきた。

その手を取ってジツと見るが本当に怪我はない。手にはめられていたグローブには軽く傷が出来てしまっていたが、それを外せば綺麗な手が顔を出した。

「本当に無傷だね」

『さすが規格外!』

ケタケタと楽しそうに笑うリリットにムフンつと鼻高々に胸を張って、ユウは「いいい」なんて言ってるからもう苦笑いを零すしかない。

「この作戦さすがに厳しいと思ってたけど、ホントに上手くいっちゃうんだもんねえ」

『クロスボウで放った矢を捕まえるなんて、ふつう無理だし危ないよねえ』

そんな風に言っているが、この案を出したのはリリットだ。

大丈夫かしつこく聞いたのに対してユウとリリットは「クロスボウくらいなら」と平然と言ったのけた。

リリットがクロスボウでユウに飛ばした矢には、ワイヤーが括り付けられている。

ワイヤーはリリットがいる屋上からこちらまで伸びていて、ユウがグローブをした手にそれを巻き付けた。

何度か力を入れてワイヤーの強度を調べている姿を横目に、自分さつさと準備しなきやなど、放置していた荷物に手を伸ばす。

「うん、おっけー」

「こっちの準備できたよ、リリイは？」

『いつでもいいよ』

深く被っていたハットを少し上げて、その場に座る。そして、ライフルを持ち上げた。

片膝を立てて、反対の足は膝とつま先を床につけるようにしてしゃがむ。立てた左膝に左肘を乗せてスコープを覗き込んだ。

目標は、会見が行われている会議室。

カーテンすらされていないおかげで中の様子すら窺える。通信ピアスと反対につけたインカムから聞こえてくるのは緊急会見を説明するキャスターの声。

生放送でテレビにも流れているというその声に集中する。

『今話題の新人画家オリビアさんに関すること、ということ。いつもの放送とは違い、会見を生中継させていただきます』

半信半疑と興味と気怠さ。いろんな感情が混ざった声のタレントがそう告げれば、音楽は鳴り止み、シャッター音がうるさく耳につく。

さん。

『画面が変わった、会見会場が写ってる。配置に不備なし、ノアさんは司会台の前にいるよ』  
リリットの声に返事もせず、ジッとその時を待つ。

にいつ。

シャッターの音が少しずつ減って、ノアさんの荒い鼻息が聞こえてくる。

『あっ、あの、今回は皆様におつ、お伝えしたいことがありますてっ！』

いーち。

『じつつ実は！』

ゼロ。

パシイッ。

撃った銃弾は狙い通りに窓ガラスを突き抜け、ノアさんと記者たちの間に着弾した。

静寂。すぐに騒がしくなって逃げ惑い始めるだろう。その前に、と急いでもう新しい弾を装填し、構える。

インカムから人々が息を大きく吸い込んだのがわかる。叫び声が響くより早く、もう一発全く同じ場所に撃ち込んだ。

一発目に撃った弾丸が空けた窓ガラスの穴を、少し小さい弾が通り抜けて地面に着弾。パンッと破裂音をさせながら地面で弾けた弾から勢いよく真っ白な煙幕が噴出した。

『成功!』

『きゃあああああ!』

リリットの言葉のすぐ後に、やっと聞こえた悲鳴に頷いてライフルから手を放す。

背中から腹部に回ってきたユウの手に全身を預けて、大人しくユウに右手で抱えられる。

片手で私を抱えて、左手にはクルクルと巻き付けたワイヤーを握りしめたユウが屋上の中央に移動した。

「シャル、ちゃんと掴んでね」

「うん！」

齒を見せて楽しそうに笑うユウに大きく頷いて、ハットのツバを両手で掴む。

「帽子落としても取りいけないからな！」

そう言つて走り出したユウは勢いよくビルから飛び降りた。

そのまま空中で両手が塞がっている中、器用に力任せに体の向きを調整してユウは右足を伸ばす。

振り子の要領でビルに向かっていくその右足は、私が穴を空けた窓に直撃した。

強度の下がっていた窓は、大きな音を立てながら簡単に砕け散った。

窓を蹴破つて体が真っ白な煙が充満している混沌とした会見会場に入ったところでワイヤーを放し、ユウは綺麗に着地すると、私をゆっくり床に降ろしてくれた。

小さくお礼を言つて、その場にまるで最初からそこにいたように立つ。

熱すぎるほどの部屋の窓が割れて、温められていた空気が外へ逃げていく。

空気とともに外に出て行った煙のおかげで、真っ白で数センチ先さえ見えなかった部屋の中が段々と明瞭になっていく。

「やあ、皆さん。こんばんは」

晴れた視界に、人々の視線が自分へ向いているのがよくわかる。

だからこそ、何でもないように、これが日常であるように。優雅に雅に神秘的にそしてどこか怪しげに、にこりと笑みを浮かべて前だけを見つめる。

「レ、レヴォルトのっ」

驚いた様子の子のノアさんのほうに振り返り、それ以上彼の言葉が漏れないようにグッと距離を詰める。

「はじめまして。レヴォルトを知っていたただけでるなんて、光栄です」

胸元に手を置いて微笑む。薄く開いた瞳はノアさんから離さず、ただジッと見つめればその顔が少し青くなったように見えた。

くるりとわざとらしくマントをはためかせて振り返り、ノアさんに背を向ける。

ゆったりと時間を使って記者とカメラに視線を移してから、マントの端を詰まんでドレスを着て挨拶するみたいに腰を折った。

「レヴォルトのシャルと申します。このような急な訪問、申し訳ありません」

仮面で覆われていない口元がにやりと三日月を作り上げる。一度下げた視線をユウへと移して、ユウのほうへ記者たちの視線を誘導する。

「そちらは同じくレヴォオルトのユウと言います。私たちは決して皆さんに危害を加えないわけではありませんので、誤解のないようお願いします」

腰に刺さっている刀に左腕を置くようにして、記者たちを一瞥したユウは、右手を胸元に置き無言で一つ頭を下げる。

口を開きかけていた記者たちが黙り込む、ユウの腰にある刀が丁度よい牽制の役目を果たしてくれているのだろう。

静かなほうがいい。無駄に騒がられてはこちらのペースを乱れさせられるだけだ。

「私がここに来た理由は簡単なことでして、一つ皆様に大きな発表をしておきたかったんです。そこでこの場が一番発表に相応しかったため、飛び込み参加させて頂きました」

申し訳なさそうに、しかしそれが嘘くさく見えるように。あくまで役者に見えるように、どこまでが演技でどこからが本心なのか。

自分を見ているであろうすべての人々を騙すために、声、表情、動き、口調。全てに気を付ける。

私を見ている全ての人に、私の言葉だけを深くしっかりと届かせるためには、疑問や不快感を与えてはいけない。



劇を鑑賞している際に引き込まれてしまうように、この場の空気を掌握しなければ。小さく吸った空気をゆっくり吐きだして、自身の髪を撫でつけて両手を大きく広げた。

「今日、この記者会見で天才画家オリビアさん初の個展が吉兆の美術館で行われる、そう発表されると聞きましたね」

私の後ろで「えっ」とノアさんが小さく零したのが分かった。だが無視して会場を練り歩く。

まだノアさんの口から会見の内容までは話しされていない。

穏便にこの場をまとめ、会見内容を本来のものから変えて、ノアさんへの注目を別の場所に移す。

そこで思いついたのがこの方法だった。

「おっとオリビアさん本人より先に発表してしまつて申し訳ありません。つてああ、多忙な彼は代理を立てていましたね、有名な画家様とお会いできなかったのは残念です」

肩を竦めて悲しそうに、右へ左へと歩きながら次の言葉を紡ぐ。  
「すみません、話がずれてしまいましたね」

全てのカメラに映るように記者たちの目の前、ど真ん中に立つ。

その場でカカツと足を鳴らして両足を揃えて大きく両手を広げた。マントがなびく音が止んで、そして。

「吉兆の美術館で行われるその大々的な個展パーティー、私たちレヴオルトもお邪魔させていただきます」

はつきりと満面の笑みで、一番伝えたかったことを言っただけで済んだ。

記者たちの目が見開いたのに肩を竦めて見せて、服の中に隠しておいた予告状を両手に出す。

「これは私たちからの参加証明書です」

そう笑って予告状をばら撒く。

舞い上がって、はらはらと落ちていく紙を見上げている記者たちに心の中で「頼みましたよ」と伝えて、彼らの視線が自身に戻ってくる前に煙幕を床に投げつけた。

「それでは皆様、また素敵な夜にお会いしましょう」

真つ黒な煙幕が部屋を満たしていき同時に照明が落ちた。混乱している記者たちに一言だけ残して、扉に向かって走る。

「シャルル！」

「行こう」

扉を開けて待っていたユウの元へ駆けつければ、ユウの肩に担がれていたのはノアさん。気を失っているため、だらりと力の抜けた体でされるがままになっている彼にため息をついて、扉を閉める。

ガチャッ、鍵が勝手にしまつてすぐに中が騒がしくなった。ガチャガチャとうるさいドアノブにリリットが鍵をかけてくれたことに肩を下した。

床を見れば、そこには治安維持部隊の制服に身を包んだ四人の男が寝そべっていた。

作戦通りセグレットが、邪魔が入らないように処理をしてくれたんだろう。気絶しただけの様子の男たちを横目にピアスをノックする。

「外の様子は？」

『ビルの包囲が半分終わった感じかな？ もう少ししたら上がってくると思うよ』

「りょうかつ」

『んう?! ごめん、嘘！ 包囲も終わってないのに登ってき始めた！ ちょい急いで離脱して！』

リリットの言葉に安堵して「了解」と返そうとすれば、それに被せて焦った声で伝えられたのは、予想してた中でも厄介な内容。

「分かった！」

廊下を走って階段に向かう。

『チイツ、予想より治安維持部隊の動きが速い、精鋭隊かフォルテか何かかな。これは予想より早く来るよ、離脱前にぶつかるかもしれない』

じゃあ、気を張ってなきや。

「あ」

廊下の突き当りで右に曲がり、階段が目の前に出たのと同時に下から登ってきていた治安維持部隊と目が合った。

「いたぞおおお！」

「シャーッ！」

治安維持部隊の野太い叫び声に続いて銃声が響いた。ユウがすぐに私の体を引っ張ってくれたおかげでケガすることはなかったが、いやな汗が背中を伝う。

「え、実弾？」

思わず漏れた声にユウが「わからない」と首を振った。

治安維持部隊が実弾を使うことはほとんどない、それこそ凶悪犯罪者以外には使用が認められていないからだ。

実弾だとすれば、レヴォルトの存在が凶悪犯と認定されたことになる。それは、これらの活動を考えると面倒でなるべく避けたい。

ユウがナイフを投げて応戦しているため、階段から治安維持部隊が出てくることはないが、同時に自分たちも階段を使えない。

下の階から登ってきているのだから、私たちが使いたい上へ向かう階段には誰もいないが、実弾か否かの判断がつかずに突っ込むわけにはいかない。

私とユウだけならともかく、今はノアさんもいる。  
どうするべきか。

「シャルルさん」

「え、レトくん！」

「お困りのようだと聞いて、セグレトがお手伝いにやってきました」

ふざけながら「びしいっ」と効果音まで自分でつけて敬礼をしたレトくん。彼の姿にやつと状況の突破口が見えてきたと、ほっと息をつく。

「あれ実弾じゃないよ。ただ当たると普通に激痛だし、服くらいなら貫通できる威力はあるってアラウドが言っていましたよおっと」

レトくんは腰に差していた銃を私に渡すと、ユウに近づきノアさんを受け取った。

「アラウドは？」

「シャルルさんのライフルを回収して今は外で待機中。俺は会見室前の警備を倒した後に一応残つとけって言われて潜伏してたんだ」

「助かったよ、ありがとう」

ノアさんを抱えたセグレトはニツと明るく笑い、首を勢いよく左右に振った。

「まあ報酬はちゃんともらってますから！ あ、その銃に入ってるの煙幕弾だからね」

「わかった、何から何までありがとうね」

拳銃を握りなおしてレトくんにもう一度礼を伝えれば、彼は照れ臭そうに頬を搔いて視線を階段に移した。

「そんなことより、早く逃げなきゃ敵がどんどん増えちゃうよ。お二人がそっちから逃げる間に俺は反対側から路地に逃げますんで、できるだけ目立ってくださいね」

「もちろん、そっちに追手が行くことはないように立ち回るよ」

頷いたレトくんはノアさんを抱えたまま、廊下を走っていく。その背を見送って拳銃を構える。

「ユウいい？」  
「いつでも」

不安そうな顔もせず、頷いたユウに頷き返す。そして上半身を乗り出し、階段の下のほう、治安維持部隊がいる場所に向けて発砲した。

治安維持部隊の足先すれすれの床に着弾した瞬間、瞬く間に広がるのは真っ白な煙。

「なっなんだ！」

慌てている声が聞こえて笑みが零れたが、ここは階段、閉鎖空間ではない。煙は室内よりも早く消えてしまう。

煙幕がなくならないうちにと急いで階段を登りだしたとき、銃声が響いた。

「当たれええええ！」

「くそがつ」

治安維持部隊の一人が乱射し始めた銃弾がこちらに向かって飛んでくる。悪態をついて先導してくれていたユウが私の手を掴んだ。

そのまま私を横抱きするとユウは階段を登っていく。

登っていく途中でビルの警備員がいたが、ユウは警備員なんて関係ないと高く飛んで手すりを足場に警備員を飛び越えた。

その後も、いつの間にか上の階に行っていた治安維持部隊の隊員が階段の途中で立ちふさがってきた。だが、ユウは私を抱えたまま隊員を蹴り飛ばしたり飛び越えたりして、止まることなく階段を駆け上がっていく。

成人男性を一人抱えているのに軽々と駆けては蹴って跳ねてを繰り返していく。そして、目指していた屋上に到着した。

「二人とも大丈夫!？」

「うん、大丈夫だから早く行こう」

リリットが用意してくれていたドアストッパーを手にしたユウに続いて、ウエストポーチに付いているボタンを押す。

ピピッ。音だけはするが何も変化が起こらない。

「え」

錆び付いた機械のようにゆっくりとウエストポーチを見れば、ポーチにめり込んでいる銃弾が目止まる。



「どうしたの？」

心配そうに駆け寄ってきたリリットに「こっこれ」震えた声で壊れたポーチを見せれば、彼は眼を大きく開けて動きを止めた。

「馬鹿なの!？」

「ごめんってえ！」

リリットっていうより素のマウちゃんが出てきちゃうほど、焦った様子で声を荒げた彼に両手を合わせて深く頭を下げる。

「馬鹿！ほんつと馬鹿！なんでこんな時にミスんの！」

ウエストポーチを私から外したりリリットが、ボタンを押したりくるくるとポーチを回しては動作確認をしている。

その間ずっと続く罵倒にひたすら謝っているが、ピピッとともピーとも言うのにポーチは音を鳴らすだけで変化は何もない。

「うん、無理だ。これは、無理」

さっきまでかなり慌てていたのに、急にスンッと無表情になったリリットはポーチをいじるのをやめて、私の腰に付け直した。

「え、あつあのお。リリットさん？」

「ここじゃ無理。直せないし、なんなら直すより作り直したほうが早い」  
淡々と自身の脱出準備を始めたリリットに思わず敬語になってしまいながら声をかければ、リリットはきつぱりと私が脱出不可になったことを突きつけてきた。

「あの、私はどーしたら？」

継るように情けない声色でリリットを見上げると「はああっ」わざとらしく大きなため息を吐いて、リリットは私のほうを指差した。

「ノアさんをセグレットが回収してくれたってことは？」

「あっ、そっか」

眉間にシワを寄せて問いかけてきたリリットの言いたいことが理解できて、ぼんつと右手の拳を左手の掌で受け止める。

「ホントは俺がって言いたいけど、シャルルの方が小さいから今回は譲つてあげる」

丸く膨らんだ頬でそう言ったリリットに笑いながら「ありがとう」と伝えれば「俺じゃなくてユウに言いな」と返されてしまった。

その通りだな、と振り返って、腰に差していた刀を持って遠くを見つめているユウに近寄っていく。

「リレイのお説教が終わったの？」

「うん、ユウあのさ」

「聞こえてたから説明はいいよ。あの銃弾の雨の中じゃこんなこともあるでしょ」

軽くケタケタと笑うユウに少し安心して、背を伸ばして勢いよく頭を下げる。

「ごめん、よろしくお願いします」

「ふふふっ、はい。よろしくされてあげましょう！」

ユウは持っていた刀をくるっと一回転半させて鞘の中腹を二、三度ノックした後、もう一度半回転させて鞘から刀を抜く。すると、刀は勝手に分解されて変形していった。

三角の布で出来た大きな翼に、三角を横つた翼と一体化しているバーがあるだけの航空機、ハンググライダーに変形していく。

ハンググライダーをその場において、ユウは私に背を向けた。

「シャルル、乗って」

ユウに背負われて、簡単に二人の体がベルトで固定される。

ハンググライダーとユウを繋げるものは何もなく、ユウが手を離れたら私達は二人で落下していくことになるだろう。

「ユウ！ いけそう？」

「いける！音が近い、急ごう！」

屋上の出入り口が内側から殴られているようで鈍い音を響かせる。

ドアの方に目を向けて舌打ちをして、リリットに先に行けとハンドサインを送ったユウは屋上に落ちていた石を拾い、それをドアに投げつけた。

鉄製の扉が大きな音を立てた。外側からの攻撃音に驚いたのか、一瞬ドアの内側が静かになる。

リリットが自身のウエストポーチに触れるとそこからプロペラが飛び出て、両手にはごつごつしたグローブがつけられ、顔にはいつもは無いメガネがかけられていた。

「先行くよ」

メガネのレンズはうっすらと格子状に線を描いており、音を立ててプロペラが回りだす。プロペラに一瞬目をやって確かめたリリットはかなり高ビルの屋上なのに、恐怖を全く感じさせない足取りで助走をつけて飛び降りた。

落下しながら手に付けていたグローブを両方とも掌で叩き、ガチンツと音がした後、拳を作ってほかのビルに向ける。

手首の甲から放たれたフックが他の建物に引っ掛かり、太いワイヤーを掴みプロペラと振り子の要領で反対の手で同じように次の建物にフックをかけて移動していく。

フックグロブ。こうして実戦で使うのは初めてだったから、楽しみだったのに。リリットが建物から建物へフックをかけて進んでいくのをうらやまし気に確認していれば、ユウが小さくジャンプして私を背負いなおした。

「追いかけるよ」

私の返事を聞く前に駆け出したユウが、屋上から飛び出す。

後ろの方で大きな音がする。たぶん屋上への出入り口が破壊された音だろう。

治安維持部隊の怒号が後ろから聞こえてきた。

少し煽ってやろうか。

空という安全な場所にいることで気が緩み振り返ると、さっきほどまでうるさかった治安維持部隊の隊員たちが静かに、一か所を空け半円状になって整列していた。

空けられた空間に飛び込んだのは、夜の中でも鈍い月明かりに照らされキラキラと輝く金髪をもつ男。闇夜に浮かぶ青空みたいな双眼が獲物を捉えたように細められた。

あ、これはダメだ。

目が合った。そう思った時にはこのままじゃ終わる、なぜかそう感じた。

背中に入った嫌な予感に身を任せ、身を乗り出してユウの握っているコントロールドバーを上から握りしめた。

「シャルっ?!」

急に動き出した自分に驚いているユウには悪いが、説明をしている暇なんてない。

バーをグッと曲げる。

右にズレたその時に、何か光ったものが勢いよく通り横を過ぎて行ったのが見えた。

「剣!？」

私よりも何倍も動体視力のいいユウにはそれが剣だったとはっきりと見えたようで、剣が投げられたのが先ほどまで自分達がいた場所だと気づいて背中に走る悪寒が酷くなる。

「ユウ、逃げるよ!」

いきなり方向を変えたせいでグラグラとかなり揺れるがそれが寧ろ的を絞りにくくしているのか、続投の様子は無い。

振り返って見れば、金髪の男、ローレン・D・ハイネルが他の隊員たちに指示を出しているようだ。

あいつはもうこちらに背を向けていてその顔を見ることは出来ないが、奴がいるのなら空に長く留まるのも危険だろう。

「治安維持部隊の隊長さんも動いてる。全員、気を付けてね」

「了解」

ピアスと前から聞こえる返事に一度瞬きをして前を見る。アラウドとセグレットが邪魔をしてくれているはずだから治安維持部隊は私たちを見失うだろう。

しかし、隊長である彼が出てきたということは隊員の数と質が倍增されていることが予測できる。

予定通り集合を決めていた大きな屋敷の屋根に着地して、ハンダグライダーとフックグローブのボタンを押して簡単に畳む。

コンパクトに形を変えた二つを回収して、マントを靡かせて一周くると回ることのできる私服へと変えた。

「じゃあ、明日アジトで」

路地裏から腕を組んで大通りに消えていった二人に続いて、僕は二人とは反対方向に向かつて歩き出す。

夜の街であった人々の興味をそそるニュースに誰もが目を奪われている。

商店に並んでいる大きなテレビに足を止めて、目を向けている人達の後ろを通りすぎる。

「明日、どう報道されるか。だね」

次の日の朝。

起きてすぐにつけたテレビでは『治安維持部隊によって逃げていくレヴォルト!』と治安維持部隊を称賛し、オリビアの個展について話しているものが溢れかえっていた。

しかも、予想外だったのはオリビアが思ったよりも頭が回るようだということ。

オリビアは朝早くから個展開催が事実であることを認め、会見はそのために行ったと言いつつ切った。

『会見当日は体調が悪く、代理を立てていたのですが。まさかあんなことに巻き込まれるとは、彼にはよく休むように伝えました』

昨日の会見の倍はあるであろうカメラに緊張した様子もなく、綺麗な顔で上手に優しい笑顔を作ったオリビアが聖人君主のように手を差し出した。

『レヴォルトさんたちは怪盗だと聞きました。怪盗さんが狙いたいと思ってくださったのでしょうか? とても光栄です』

微笑むオリビアのコメントに『会見をぶち壊されてもSランクスマイルで神対応』と心を奪われた多くの人々がいたらしく、オリビアの評価はうなぎ登り。

これも予想外だったが、期待やら好感が高い人が実は……っていうほうが盛り上がるしいいか、と前向きに捉えることにした。



それに、いいこともあった。

治安維持部隊も個展の警備を『レヴォルト専門特殊部隊、月華』で行うと発表したことでレヴォルトの予告状は予定よりも大きく取り上げられた。

『吉兆の美術館で行われる『展覧パーティー』に私たちも参席いたします』

『美しく最高の絵画を楽しみにさせていただいております』

『今最も有名な若き画家様へ、敬意をこめて。レヴォルトより』

たった三行だけ書かれたカードは、メディアによって一気に広まった。

／＼／＼／＼／＼／

オリビアは顔だけでなく性格もSだった！

治安維持部隊、レヴォルトを華麗に撃退。

逃げ惑うレヴォルト、治安維持部隊『月華』の素晴らしい対応。

内面まで美しいオリビアの個展、警護は見目麗しい治安維持部隊特殊班『月華』。

「逃げてないし！ あれは撤退！ もともとあそこで脱出するって決めてたんだよ！」  
声を荒げて手足をバタバタと動かして抗議しているマウちゃんに、レトくんが目を見開いている。

新聞やらニュースから聞こえる言葉たちは予想通りレヴォルトを卑下し、オリーブと月華を称賛するものばかり。

その報道を見ては、頬を膨らませたマウちゃんが負けたわけじゃないと怒っている。

昨夜のことは大きく報道されている。この調子ならオリーブの個展の注目度も上がっているだろう。

朝から昼まで報道は続いているし、注目を集められたのはよかった。よかったが、昼頃アジトにやってきたマウちゃんはずっと不機嫌だ。

昨夜のことと、これからのことを話し合うためにセグレットも呼んでアジトに集合しているのだが、偏向報道にイライラを隠すこともないマウちゃんはやって来てからずっと報道に目を通しては怒り叫んでいる。

そんなマウちゃんにゆきちゃんがミルクを出してくれている。

蜂蜜が入っていて甘い香りのミルクを飲み、マウちゃんが少し落ち着いたのを見計らっ

てマウちゃんの隣に腰掛ける。

「まあまあ、マウちゃん。レヴォルトの知名度は上がってるんだしさ」

「知名度は上げたかったけど、好感度は下げたくなかった」

正論すぎる言葉に苦笑いしか零せなくて、彼の気を少しでも紛らわせたくてムスツと膨らんでいる頬を一度突いた。

膨らむ頬から空気が抜けたのを見て、マウちゃんが散らかした新聞や記事を片付ける。

『好感度は下がったかもだけど、好奇心は確実に上がってるよ。レヴォルトがなんなのか知りたがってる人が増えてきてるな』

笑みを含んだアラウドの声がスピーカーから聞こえる。セグレットは手に持っていたスピーカーを綺麗になつた机に置くと、僕らと向かい合う位置の椅子に座った。

「好奇心？」

『そう、レヴォルトのことを調べたり検索したり、雑談の時の話題にしたり？ 名前くらいなら覚えてもらえたんじゃない？』

「うーん、じゃあ悪いことばかりではないってことか。あ、そうそうノアさんだけど昨日あの後どうしたの？」

『セグレットが自宅まで運んだよ』

「気絶からなかなか起きないからベッドに投げ捨ててきたよ」

親指をグッと立てて満面の笑みのところ悪いが、どうやって自宅に侵入したんだろう。急なことだったしピッキングの準備とかしてなかったよね、多分。

セグレトの言葉の後に急に背筋を伸ばしたマウちゃんが真つ直ぐ上に手を挙げた。

「それでその後、俺が連絡した」

「んう？」

思っても見なかった言葉に聞き返すように首を傾ければ、マウちゃんが顔を限界まで背けてボソボソと呟く。

「だって、あの人暴走したじゃん。だから、これからどういう行動をして欲しいとかなんでこっちが詳しい作戦内容を教えないのかとか、色々伝えとかなきゃなあって」

「伝えるというには圧がすごくて、ほぼほぼお説教こみの命令みたいになってたけどね」  
ゆきちゃんが意地悪く言えば、マウちゃんは吹っ切れたように腕と足を組み、鼻を鳴らした。

「フンっ、いいんだよ。もう勝手な行動しない、何か思いついたりしたいことができても俺たちに指示をちゃんと仰ぐって約束してくれたしね」

「マウちゃんが行ってくれたなら、ノアさんはもう大丈夫だね。そうになると、確認したいのはオリーブアのほうかな」

オリビアの記事を広げて、写真を凝視してみる。その顔はどこまでも涼し気で怒りや不満なんか全く感じさせない。

写真やニュースの映像だけじゃ、やっぱり分からないな。

昨夜の会見はオリビアも予定してなかったことだ。ノアさんが勝手に会見をしたことで警戒心や疑心を生んでないか、会見内容が本当に個展の発表だと思っているのか。

オリビアの本心を知るには、情報が足りなさすぎる。

『情報をお求めかな？』

こちらの考えを先回りして客を見つけたとでも言いたそうな、ウキウキな様子で聞いてくるアラウドに笑い声が零れる。

「ふははっ。うん、ほしいかな」

『おっけーって。こっちとしては全然いいんだけどさ、費用は大丈夫？ 会見とか今からの追加調査とかさ、予定してなかっただろ？』

少しだけ心配の色を含んだ言葉に、背もたれに背を預けて上を見る。たしかに依頼料から考えてもアラウドの手を頻繁に借りるのはキツイ。

「うーん、確かに赤字にはなりたくないな」

けれど、ここでオリビアを放置とかはしたくない。不測の事態が個展で起きるのだけは止めなければならぬ。

「追加料金とっちゃえばよくない？」

「会見は確かに向こうが勝手にしたことだけど、それを止めたのはこっちが勝手にしたことだから。請求するのはちよつと難しいんじゃないかな？」

ゆきちゃんという通り、お互いが勝手なことをした。だから今回のことで発生した金額を理由に、強く請求するのは厳しい。

マウちゃんもブーブー文句を言っているが、そこはわかっているので強く主張してくることはなく、どうするべきか考えているようだ。

「あ、じゃあさ俺の代わりに誰かが働けば？」

「はっ。」

静かな部屋にセグレットの声がよく響く。意味が分からないと首を傾げた僕たちにセグレットが元気よく微笑んだ。

『あーね。うん、ありだね』

「俺賢い？」

アラウドはなんか納得していて、セグレットはニタニタと頬を緩ませながらスピーカーに

近寄った。傾げたままの僕らを置いて二人の会話はどんどん進んでいく。

『賢い賢い、頭使ったじゃん』

『おかしい！ 褒められてる気がしない！』

『褒めてるよ、すごい褒めてる。ワー、スゴイナー』

『分かった、アラウドが俺を褒める気ないのが分かった！』

スピーカーを持って声を荒げたセグレット一つため息を吐いてこちらを見て、一周しそうなほど首を傾けている僕らに気づいた。

一瞬目を見開いて、急いでスピーカーを置くとセグレットは僕らのほうに体を向ける。

「とつとにかく、レヴォルトの皆さんに提案があります」

『情報集めを手伝ってくれませんか？ 依頼主はレヴォルト様、内容はオリビアの近況とノアの会見後の動向について』

「俺らの情報収集方法を見せちゃうことにもなるんで、見たり聞いたりやつたりしたこと全部トップシークレット、他には秘密でお願いします」

『全部守ってくれるというのなら、情報のほうもお安くしますよ？』

丁寧な言葉なのにふざけてるのが分かって、楽しそうで演技臭さが滲んでいる。多分、レヴォルトの時の僕らの真似を二人はしてるんだろう。

偉そうに腰に手を当てて胸を張るセグレットは薄目でどうすんだと問いかけてくる。

「じゃあ、よろしくお願いします」

セグレットに手を差し出せば、彼がそれを取った。交渉成立。

かなりこちらに利があるものになってしまったから、いい情報が手に入ったらアラウドに今度渡そうと心に決めて、今は彼らの優しさに甘えとこう。

『じゃあ、セグレットの代わりに動いてもらうから。そうだなあ、冬稀さんとマウラさんに手伝ってもらいたい』

「え、僕は？」

『レイさんはいいよ、体力ないの知ってるから。多分、ついていけないだろ？』

「ぐうつ、ぐうの音しかでない」

「ぐうは出るんだ」

ケタケタと楽しそうに笑うセグレットは、ゆきちゃんとマウちゃんにピアスをそれぞれ一つずつ手渡した。

「アラウドとの通信はそれでやってね」

「わかった。持ってたほうがいいものとかある？」

『えつとねえ……』



ゆきちゃんの問いにアラウドは指示を出していく。それに従って二人は無言で準備を済ませると、いつもと違う雰囲気の服に着替えていた。

荷物をまとめた二人は振り返ると同時に敬礼をする。

「いってきまーす」

やったことの無い仕事になるかもしれないのに緊張した様子もなく、むしろ明るく元気に出て行った二人に手を振ってその姿を見送る。

『じゃあ、この通信切るけど。セグレットはそこで待機してて』

「了解、なんかあつたら呼んで」

スピーカーの電気が消え、部屋の中が静かになった。騒がしさが一気になくなり外で飛んでいる鳥の鳴き声すらも聞こえてくる。

少しの気まずさにどうしようかと視線を動かして、何か話題のタネは無いかと探していれば、キッチンに姿を消していたセグレットが戻ってきて隣に座った。

「キッチンちよつと借りたよ」

お茶を煎れてきてくれたようで、目の前に置かれたマグカップをお礼を言って手に取る。お茶の隣にクッキーが置かれた。

クッキーが僕のほうに寄せられて、勧められているのだと分かったので一つ口に含んだ。ホロホロと口の中で簡単に崩れたクッキーの軽い甘みに頬が緩む。

「アラウドと仲良いんだね」

「え？」

「三人とアラウドのやり取り見ててさ、付き合い長いのかなって思ったんだけど。違いましたか？」

首を傾げるセグレットの質問に「うーん」と悩ましげに唸り声を零す。

仲がいい、と言うには僕たちはアラウドのことを何も知らない。アラウドの本名もアラウドがなぜ情報屋をしているのかも、アラウドの過去も聞いたこともない。

「付き合いはまだ数年くらいだし、仲がいいって言い切れるほどアラウドのことを知らないしなあ。あつ、でも初めて会った時よりは接しやすくなったかな？」

出会った頃のアラウドは今よりも警戒心がすぐくてでも今と同じように情報屋としてかなり優秀で、なんとか力を借りたかった僕たちは、どうにかしてレヴォルトのことを信頼してもらえるようになりに努力した覚えがある。

「え、聞きたい！ レヴォルトとアラウドってどうやって知り合ったんですか！」

興味津々です。そう目をキラキラさせて身を乗り出してくるセグレットに一瞬、勝手に話しているのか、と考えたがセグレットとアラウドは相棒関係なのだから大丈夫だろう。

勝手に自分の中で答えを出して、こちらを凝視するセグレットの頭を撫でる。

「アラウドに会いに行ったのは、僕たちレヴォルトからだっただんだ」

そこまで昔のことでも無いはずなのに、すごく懐かしく感じる。

一度ゆっくりと瞬きをしてあの頃のことを思い出す。そして僕はアラウドとの出会いと、レヴォルト最初の大きな活動について語り出した。

／＼／＼／＼／＼／

「ああ、どうしよっか」

「やっぱり俺たちだけじゃ厳しいな」

マウちゃんと一緒にあって机に突っ伏してみるが、解決案もなにも浮かばない。

目の前にあるキラキラ光りを反射させるいちごのタルトだけが明るくて、僕らの気分と頭の中はモヤモヤしていて真っ暗だ。

「噂の情報屋さんは見つからないんだっけ？」

優しい香りが鼻を掠めて顔を上げれば、ミルクティがタルトと僕の間に見える。僕らを見て小さく笑ったゆきちゃんは顎に人差し指をあてて首を傾げた。

座り直してミルクティを一口飲むと、心の重しがすこし良くなった気がするから不思議だ。

「入口がねえ、候補が多すぎて絞れてないんだよね」

顎を机に刺したまま口を尖らせて「もうやだあ」と足をバタつかせたマウちゃんに共鳴して一緒に手をパタパタ動かす。

思考の波に吞まれて揉まれて、もう働きたくないと悲鳴をあげる脳と一緒に声に出して嘆く。

いい歳した大人のそんな醜態にもため息一つ零さず、仕方ないなあと眉を下げたゆきちゃんは椅子に腰掛けて、僕たちが広げていた地図を覗き込んだ。

大通りから路地に入って何度か曲がった先の廢墟に一つ丸があり、その正面の建物にも丸がついていて、他にもパツと見ただけで三十個ほどの候補が記されていた。

候補だけでもなかなかの数があるのに、この街だけではなく丸は他の街にも侵食している範囲もそこそこデカイ。

これを一つずつ、しらみ潰しに調べていくのは骨が折れるだろう。

調査するまえからそれを考えて嫌になっている頼りにならない男二人にゆきちゃんは小さく息を吐いて、それぞれの頬を摘んで引っ張った。

むにゆもにゆと柔っこいほつぺたを好き勝手揉むゆきちゃんに反論しようとするが、表情だけは妙に真剣で、声をかけてもいい感じがしなくて諦める。

全体に目を通してゆきちゃんは、僕らの頬を引つ張つたまま小さく頷いた。

「よし、手分けしようか」

「てあけ？」

うまく喋れないまま聞き返せば「うん」と言つて、やつと頬から手を離してくれたゆきちゃんは、空いた両手で地図を指す。

それは隣町とこの町の中央部。

「中央はレイちゃん、隣町の丸が密集してるところはマウちゃんね」

「ゆきちゃんは？」

「私はこちら」

ゆきちゃんが指したのは一番ここから遠いが、丸の数も少ないところ。

他にも印が付けられているのにそこには目もくれず、ゆきちゃんはその三か所だけを重点的に見るように話しを始めた。

明確な理由もなく、三か所に絞つたことが不思議で首を傾げるとゆきちゃんが話をやめて僕のほうを見た。

「どうしたの？」

「いや、なんでこの三か所に絞ったのかなって。共通点とかあった？」

「あー、それ？ 勘だね、勘。多分ここかなって」

申し訳なさそうに恥ずかしそうに、頬を掻いたゆきちゃんに目を何度も瞬く。

特に理由はないの？ と驚いていれば抓られた頬を伸ばしたり押ししたりしていたマウちゃんがかくふくふと肩を揺らす。

「あはは、ゆきちゃんの勘は鋭いからね。このままじゃ話も進まないし、俺はゆきちゃんのにさんせい」

顔ごと机に上半身を埋めたまま、だらーんと右手を挙げて振ったマウちゃんに、腰に手を当ててしゃがみ込んだゆきちゃんはその顔を覗き込んだ。

「マウちゃんは適当すぎるよ。まったく」

両手で両頬を抓んで、もにゅむにゅと頬の感触を楽しむように引つ張ったり押ししたりし始めたゆきちゃんに、マウちゃんは文句も言わず頬を差し出している。

「あばばばばば」

「勘がほとんどなのは確かにあるんだけど、あとは私だったらこの辺につくるかなーって」

「だぶぶぶだぶぶ」

「ゆきちゃんだったらなんでここにするの？」

疑問が解けず問いかければ、ゆきちゃんは「えっとね」と言つて少し悩んだあと感覚的だったことを言葉にできたのかハッと目を開いて僕のほうに向き直つた。

「うがががあばばううう」

「治安的にかな？ この三か所は裏路地の中でも治安がいいんだ」

「だばばああむあぶぶぶぶ」

「治安か、なるほど。つて、ちよつとマウちゃん静かにして？」

「こえおもしろい」

変な声が出るのが楽しくなつてきたのか、マウちゃんはニコニコしたまま喋るのをやめる気配もなければ、頬から手を離させることもない。

「面白いのは良かったけど、話聞いている？」

「おん」

「じゃあいいけど、とはならないからね？」

ゆきちゃんの手をマウちゃんの手から外す。

「うわーん。いじめだあ」

「会議の邪魔してるほうがいじめですよ。ほら、準備してー」

シクシクと泣き真似を始めたマウちゃんを無視してタルトにフォークを刺す。

キラキラと光って見えるイチゴを口に放り込む僕に、恨みがましく眉間に皺を寄せて『今、怒ってますっ』というふうにもうちゃんに口を尖らせた。

「もうっ、せつかちさんは嫌われちゃうんだぞ！」

「はいはい、マウちゃんも食べちゃってね」

文句ばかりで尖っている口にイチゴを押し付けられれば、ムスツとしたままそれに齧り付いた。

パアツと膨らませていった頬を赤く染めて、ゆきちゃんが目の前に運んでくるタルトに夢中になったマウちゃんは静かにもぐもぐしては口を開けるだけになる。

文句なんて忘れてタルトだけに視線を向けているマウちゃんに、ゆきちゃんと顔を合わせて苦笑して肩を竦めた。

カラン、カラカラ。

振り返ればそこには誰もいなくて、少しひしゃげた空き缶だけが転がりながら不規則に音を立てている。

「うーん、今のところそれらしいところはないな。そっちは？」



『こちらリリット。気になる建物はあつたけど、入ったほうがいい？』

『ユウ、こっちはまだないかな。リリイは待機してて』

ユウとリリットから返ってくる声がいつも通りなことに安心する。暗く不気味さがある路地裏だが、ユウがアジトで言っていたように、不思議なことに治安の悪さは感じない。

辺りを見渡しながら目星を付けた場所を確認していく。

地図につけた目印にどんどんバツをつける。なかなか見つからないことに少しの焦りと、ここじゃない他の場所なんじゃないかと疑問に思えてきた。

ラスト三つ。

古くて埃臭い建物にゆっくりと入っていく。口元に当てているハンカチ越しに入る空気さえも汚れている気がして、自然と眉間にしわが寄る。

「二人ともどー？」

『俺はずっと待機中』

『同じく、さっき少し気になるところ見つけて待機してるよ』

「まじか」

自分だけまだっていうことに焦りを感じて、壁に寄りかかって項垂れる。

腕で目を抑えて「よしっ」と気合いを入れ直して立ち上がろうと、壁に手をついた。

ガゴツ、小さな鈍い音がして手をついたところの壁が凹んだ。

「うえっ?!」

驚きながらすぐに手を退かそうとしたが、体重をかけていたせいで傾いた体が戻せず、そのまま壁にぶつかつた。

「いつでえっ」

『大丈夫?』

『なにかあつた?』

強くぶつけた肩を押さえて蹲っていると、心配そうなユウと呆れ半分心配半分のリリツトの声がして、肩をさすりながら痛みに耐えてなんとか立ち上がる。

「だいじょーぶ。それより、なんかレバー見つけたんだけど」

『レバー?』

先ほど凹んだ壁に目を向けると、綺麗に四角の穴ができていてその中にレバーらしきものが見える。壁が凹んで出てきたことを伝えると二人は驚きながらも動き出したようだ。

『え、こつちでも探してみるよ』

『ちよつと待つてな、シャル』

待つてろと言われても、どうしても気になってしまふものは気になってしまふもので。

うん、これは仕方ないよね。僕が悪いんじゃない。人間には好奇心があるんだから、僕は人間なんだから仕方ない。

「せいっ」

レバーを掴んで押し込む。何かを外れるような音がして、床が沈んでいった。

映画や小説なんかでよく見る仕掛けに自然と心が躍る。床がなくなり現れた階段はずっと下まで続いていて、その先を覗き込んでも終わりが見えない。

『ちよつと何の音!?』

「ごめん、レバー引いてみた」

『待っててって言ったのに！ シャルのバカ!』

咎めるリリットの声に軽く謝りながら階段に足を踏み入れる。

壁に手つきながら降りていくと階段は終わりまっすぐな道が続いている。暗闇のなかで道がどこまで続いているのかはハッキリとわからない。

目を細めて真っ黒な奥をジッと見ていると急に、辺りが明るくなった。

「うわっ」

驚いて漏れた声に思わず、口を右手で覆う。

床に置かれたランタンがオレンジ色の光を放って、緑色の鳥居が並んでいる。

異様な光景に足を止める。まるで自分が来た時を見計らったかのような点灯に周囲を確認するが、人の姿もなければ自分の呼吸音以外の音すらしない。

『次は何したの？』

どこか楽しそうなユウに現状を報告すればユウはどんどん声色を明るくさせていった。

『こっちもレバーあったからやってみる！』

そう言ったユウの声に慌てた感じでリリットが『俺もやる！』と返して、二人とも階段を見つげそうならいいか、と一つ目の鳥居を潜った。

道を進んでいくごとに、通信機からは砂嵐の音しかしなくなってしまった。

二人の声が聞こえないことに少しだけ不安になるが、通信機が効かないということは情報屋の居場所がここで合っているのだろう。

永遠に続くと感じるほど歩き続けても変わらない景色と、何度も左右に曲がっていく道に疲れが溜まる。

汗が額に滲んできた頃、やっと扉が見えてきた。

「ついたあ」

立ち止まって、上がっていた息を整える。

額の汗を拭って一周その場で回れば、衣装のマントが円を描いた。仮面を付けなおしてドアノブを掴む。

屈強な男がいたらどうしよう、武器とか持つてる強い奴だったら。

リリットやユウと違って戦いになれば自分に勝ち目は無い、断言できる。自分の実力は正しく理解しているつもりだ。

相手が高顔面偏差値に弱い人だったり、私と同じ非戦闘員の非力なら話は別だけど。

私がやるべきなのは戦いにならないように口で時間を稼ぐこと。

そうすれば、ユウかりリットと合流できるはずだ。

「ふう」

大きく息を吸って止めた、ノックは三回。

「失礼します」

ドアノブを回せば、ドアは思っていたよりも軽く簡単に開いた。

~~~~~

明るいい室内は全面を本棚に覆われていて、足の踏み場もないほどに紙が乱雑に落ちてい

る。奥に行けば行くほど多くなっている紙の束は小さな山を作っていて、子供ならその山に隠れてしまいそうだ。

「どなたかいらっしゃいませんか？」

思っていたよりも小さくなってしまった声で問いかけるが返答はない。

しかし、室内の空調は音を立てていて、ついさっきまでここに誰かいたのだということがありありと伝えてくる。

ドアを開けたまま立ち尽くしていても何も変わらない。

床に落ちている紙を踏まないように気を付けて、なんとか木目が見えているそこに一歩踏み込んだところで、顔の前を何かが横切った。

あまりの速さにそれが何か見えなくて、ゆっくりと横を見ればそこには本と本の隙間を縫うように一本のナイフが小さく揺れ刺さっている。

驚きすぎて変に飲み込んだ息に苦しさを感じて、眉間にしわが寄った時、近くから声がした。

「初めまして、ですよね？」

「うあっ！」

いつの間にか目の前にいたその人は驚いて倒れそうになった私にコテンと首を傾げる。

服装は最近あまり見なくなった和装で固められており、その顔は垂らされた布で口元しか見えない。たしか面布だか雑面と呼ばれているもののはず。

こちらを見上げて弧を描く口元に可愛らしさを感じるが、少年の手にあるナイフが緊張感を走らせる。

「初めまして、ここには少年だけですか？」

「オレだけか聞くてことは誰か探してらんですか？」

質問に答えず、質問を被せてきた少年にイラつきを感じそうになるが穏やかで妙に耳に残る声がなぜか心を落ち着かせる。その声から発せられた言葉にムツとしたのに。

「ええ」

嘘をつくのはよくないだろうと頷いて見ればナイフをクルクルと回して遊んでいた手が止まり、上から下へ探るように見られた。

「ふーん、ここへは何しに来たんですか？」

「情報が欲しくて、情報屋さんに会いに来たんです」

「そうなんですか」

「情報屋さんはいらっしやいますか？」

「どうだと思えます？」

「どこまでもふざけた回答を返してくるのに、その声は一切の茶化しを含んでおらず真つすぐ耳に入ってくる。」

この少年が子供だからと気を抜いてはいけない。

情報屋に会う前に出会ったということは、この子は情報屋の番犬のようなモノなのかもしれないのだから。

「こちらにいらつしやると思っています」

「ふーん、そうですか」

「お会いしたいのですが、呼んでいただけませんか？」

あくまでも下手に話す。少年に対して高圧的な態度にならないよう彼の目線より低くなるよう腰をかがめて、見上げながら雑面で口元しか見えない少年の顔色を伺う。

横一文字だった少年の口がニヤリと形を変えて、歯を見せて笑みを作った。

「もう会ってるじゃないですか。レヴォルトのシャールさん？」

「え」

あつげらんかと簡単にそういった少年は書類の山に飛び乗ると、そこに腰かけた。

組まれた足がどこまでも生意気で、膝に肘をつけて顎を手の甲に乗せた少年は偉ぶった子供にしか見えない。



子供がおままごとで偉い人を演じているかのような見た目なのに、一気に変わった雰囲気と優艶さまで感じさせる深みのある声が、少年が情報屋だと伝えてくる。

「オレを見て馬鹿にしなかったことと、礼儀正しいけど慎重な姿勢をとっていたのは百点あげますけど、オレが情報屋と気付かなかったのは二百点減点ですね」

弾むようにそう言った少年は組んでいた足をほどいて、両手を後ろにつくと体を横に揺らす。上がったままの口角と無邪気にも見えるその行動は少年を幼く見せる。

「でも、ここまでたどり着いたことは凄いですし、凄腕の情報屋がいるという噂を聞きつけることも凄いです」

パチパチと声で拍手を表現しながら、なぜかこちらを褒める少年は、ピタリと揺れていた体の動きを止めた。

「だから、失格です」

ニコニコと楽しそうにしながらも少年から聞こえてきたのは冷気を孕んだ声。

急な言葉に驚いて勢いよく吸った息が、喉をヒュツと鳴らした。

「っ、失格って……?」

何とか言葉を紡げば少年は両手を後ろ手についたまま足をパタパタと動かして、斜め上を見ると首を傾げた。

「オレはあなたには情報は売りませんよってことですけど？」

え、伝わらなかつた？ とでも言いたげな少年に頭を抱えなくなる。少年は首を傾げたまま真つすぐこちらを見ている。

断られるかもしれないと思っていなかったわけではない、だがまだ何も話していないのだ。彼がこちらの話も聞かずに、情報を売らないと判断するとは思っていなかった。

「理由をお聞きしても？」

「そうですね、構いませんけど。一人ひとりに話すのは面倒なので三人一遍にお話ししますね」

私の問いかけに小さく頷いて、少年は書類の山の中から一つの時計を出した。

ただの小さな置時計にしか見えないソレの秒針をクルクル回すと時計は鈴の音を一つ鳴らして、辺りにゴゴゴつと地鳴りに似た音が響いた。

あたりを見回すと左右の壁だったところに突然二つの扉が現れ、そして勢いよく開いた扉からリリットとユウが中に駆け込んできた。

「しっつ死ぬかとおもつたあ」

両手を膝について額に汗をにじませる二人は、胸に手を当てて目を見開いている。

「リリット、ユウ！」

「いらっしやいませ、リリットさんユウさん。殺しはしませんよ、一応お客様ですから」  
和服の袖で口元を隠しながら、情報屋は息を荒げている二人を見て楽しそうに笑っているみたいだ。

「きみは？」

「レヴォルトの皆さんが探していた情報屋です」

リリットより先に息を整えたユウが問いかけると、情報屋の少年は胸に手を当てて座ったまま一つ礼をした。

「はじめまして、レヴォルトのユウです。あれはリリット、急に押しかけて申し訳ない」  
「いえいえ、いいですよ。皆さんにはこのまま帰っていただこうと思っていますから」

先ほど私に行った時と変わらず、ふるふると首を振って柔らかく答える情報屋にリリットが頬に人差し指をつけて首を傾げた。

「それはどうーゆうことかな、情報屋くん」

「そのままの意味ですよ」

「うーん、納得ができないな。俺たちは来てすぐだから粗相してないはずですし、シャー  
ルが何かしたなら謝りますよ？」

リリットは一步前に踏み込むと情報屋を見上げた。仮面に隠れていない目が細められて

いて、胡散臭さの残る笑みを浮かべているのがわかる。

たぶん、リリットは情報屋の考えを探ろうとしているのだろう。彼は人の感情を読むのがうまいから。

「レヴォルト、シャルをリーダーに機械担当のリリットと力仕事担当のユウの三人で結成されるチーム」

「え？」

「リーダーシャルは体力や力がレヴォルト一弱く、ヘマすることも多々ある。しかし頭の回転は早く、他の二人からの信頼も厚い。人を誑し込むのがうまくて、自身の見せ方にはかなり気を使っているのか衣装から言動までかなり精錬されている」

少年は人差し指を左右に振りながら、歌うように私たちの情報を話していく。

スラスラと流れていく情報はすべてが正しく、誰にも知られていないと予想していたものだった。

「次にリリット、身のこなしから高貴な家の出と思われる。機械に強くて自作した通信機はサイズこそ少し大きいがかなりの距離で使える。身体能力も低くないが、体を動かすのは好きじゃない模様」

スラスラと流れていく情報はすべてが正しく、誰にも知られていないと予想していたも

のままであった。

「ユウ、女性でありながら一番の身体能力を誇り」

「あの！」

止まらない言葉を遮るために大声を出せば、口を閉じた少年が両手で頬を包んで膝に肘をつく。

こちらの言葉の続きを待っているであろう少年を見上げて、しっかりと彼を見る。

「私たちのことを調べたんですか？」

「この程度は調べてもない内容ですよ。ほかの情報も仕入れているときに入手したもので、あなた方を狙って特別調べたわけではありません」

「今の情報の中に、私たちに情報を売らないと決めた決め手があるんですか？」

「うーん、そうとも言えますし違うとも言えますね」

少年は私たちをくるりと見回すと、一つため息を零した。

「調べてなくても集められる情報が多すぎます、これではレヴォルトの特定なんて容易いでしょう。まあ、そこはオレが情報屋だから気付いたというのもあると思うので、これから注意していけば大丈夫だと思えますよ。多分ね」

彼のいうことは正しい。本当に彼が調べていなかったのにそこまで分かってしまったのなら、これは早く対処が必要なものだろう。

「そこを改善したらいいんですか」

ユウの言葉に少年は勢いよく首を振った。

「そ、れ、よ、りっ。レヴォルト自体に面白さを感じません。実績と呼べるだけの大きなコトを成しえているわけでもありませんし、なにより魅力が足りないっ。オレは自分が興味を持った相手としか取引はしないって決めてるんです」

くふくふと笑いながら「本来の情報料の数百倍お支払い頂けるなら考えますけどね」と付け加えた少年は冗談を言っている風ではなく、それ以外に取引をする気は本気で無いのだろう。

実績不足。

確かにレヴォルトは活動してからまだまだ日が浅く、情報統制によって知名度も薄い。信用できないと言われても仕方がないし、面白くないっていうのはよくわかんないけど、魅力的に思えないと言われてしまえば納得は出来なくても頷くしかないのが現状だ。

「レヴォルトの活動らしいナニカをしてほしいんですよ、オレとしては。まだ君たちは自分たちの方向性を示すような大きなことをされていません」

暗に私達の活動根源まで知っていると匂わせる彼に、冷や汗が喉を伝う。

「オレが組みたいと思えないのに、情報を売ったりできません。お帰り下さい」

「じゃあ、実績を上げてきますよ」

言い淀んでいた私とは違いリリットはあっけらかんとそう言つてのけて、なんだそんなことかとも言いたげに少年に向かつて目を細めた。

そんな彼に続いてワクワクしているのか歪めた口元を隠すこともせず、楽し気に声を弾ませたユウが身を乗り出して少年の方に語り掛けた。

「貴方を納得させるだけの大事な事をすればいいんでしょう？」

樂觀的ともとれるユウとリリットを見て、一瞬呆けた顔をした少年は「ふーん」と声を出すと、指を鳴らして飛び降りる。

音も無く着地した少年は唯一見える口をニヤリと歪めて、私の方へ距離を詰めた。

「では、オレが認めて魅力を感じてしまう程の大きなナニカをしてくれるんですね？」

少年の付けた雑面が視界いっぱいに広がって、彼が首を傾げたのに合わせて揺れた。

ひらり軽く揺らぐ布はどう見てもただの薄い布なのに、近くにおいても顔は見えなくて彼が情報屋として成功している理由の一つに高い技術力を持っていることを思い出した。

布一つ取っても分かる技術力に、どうしようかと思案していた脳内が、この技術とこの人の持つ情報が欲しいという欲だけに塗り替わる。

本当に彼が納得できるだけのナニカとは何なのか、現段階では全く予想もつかないがそんなことを考えるよりも早く、私は大きく頷いてしまった。

くふくふと笑みを溢した少年は、小さく肩を竦めて背を向けた。

「オレを認めさせたいならそれ相応に有名なところを狙ってくださいね」

首だけ振り返って口元に人差し指を添えた少年は、ゆっくりと言葉を続けた。

「期待はしませんけど、楽しみにしておきますね」

~~~~~

「さてはて、大口叩いたのはいいけれど、ドーしましょうか」

「「ドーしましょうか」」

ソファに体をうずめ、背もたれに身を任せて三人で天井を見上げる。

あの後追いだされるように情報屋の部屋から出てきた僕たちはアジトに戻って、彼を納得させられるほどのナニカがないか探していた。

まあそれが簡単に見つけられるのであれば、最初から情報屋を探そうという話にもなるわけがなく、なかなか調査は難航していた。



「有名なところと言っても、そーいうところはポロが出にくいんだよねえ」

「そうなんだよねえ。高貴な家は徹底してるところがほとんどなもの」

「高貴じゃないとこにしてみる？」

「うーん。気にならないところがないわけじゃないけど、それだと『大きなナニカ』とは程遠いかな」

「やっぱそうなるよね」

ゆきちゃんは一つため息を吐くとグツと両手を天井に伸ばし、勢いよく振り降ろしてそのまま立ち上がった。

口元を片手で覆ったまま天井を凝視して何も言わないマウちゃんに目を移すと、くるりと肩を回して上着を羽織った。

「悩んでも仕方ないし、また外出て聞き耳調査でもしてこよっか？」

「うん、そうだね。僕は端末で調べてみるよ」

手元の端末を振って見せればゆきちゃんは頷いて、歩き出した。

「了解。じゃあ行つてきま」

「思い出したあ！ いでえっ！」

叫んで飛び上がったマウちゃんが目の前にあった机に脛をぶつけながらも、ゆきちゃんの腕を掴んだ。

「マウちゃん!」

「いい音鳴ったけど大丈夫?!」

片手で脛を抑えながら空いてる手でゆきちゃんの腕を捕まえているマウちゃんは、目尻に涙を滲ませつつもダイジョーブと、か細い声で繰り返し返す。

どうみても大丈夫じゃなさそうだけど、心配して背をさする僕らを見無視してその手が端末を操作し始めたので、その画面を覗き込んだ。

目まぐるしく変わる画面はある一つの店を映して止まった。

「みっけ!」

嬉しそうに声を出して、マウちゃんは画面の店を指さす。

「このお店がどうかしたの?」

「情報屋くんのとき、書類まみれだったでしょ? そんな時みた一つに『違法確認済み』ってスタンプが押されてたやつがあったんだよね」

「あの書類の山の中で、そんなもの見つけてたの!?!」

ゆきちゃんの問いかけに何でもないように答えるマウちゃんに驚けば、彼は申し訳なさそうに頬を掻いて苦笑した。

「見えたのは建物の絵と殴り書きだけだったんだけどね」

「いや、充分すごいよ」

「そうでもないよ、殴り書きのほうは読めなかったしね。建物はなんか見たことあったから記憶から引つ張り出してみたんだけど、ビンゴだよ。絶対ここに間違いない」

マウちゃんが指したのはお店の看板。

でかでかと主張の激しいそれは目を細める必要もなく、はつきりと読めた。

「シルバールイス……って、あのシルバールイス?!」

「そうなの! 代々高顔面偏差値の家系で有名なシルバールイス家がやってるお店ね」

高顔面偏差値の家系であり、高貴な家とされるシルバールイス家。彼らは自身たちの名前からシルバー、銀製品を扱っており特にシルバールイスのアクセサリーは人気がある。

「あ、こっつてシルバールイスが出してるカフェだね」

「ゆきちゃん知ってるの?」

小さく頷いたゆきちゃんは耳に着けていたピアスを外して、それを僕とマウちゃんに見せてくれた。

「これはそのお店で買ったやつだよ、シルバールイスのカフェだから出てくる食器とか全部シルバーでね。メニューにはアクセサリーも書かれてて、ここ限定のモノもあるんだ」

ゆきちゃんの説明を聞いていくと、売られてるデザートをイメージしたアクセや食器イ

メーজのものまであり、変わった形が多いため若い子に人気らしい。

「ほええー」

「ホントだ、評判もめっちゃいいね」

感心してゆきちゃんに貸してもらったアクセをくるくると見てると、マウちゃんがお店の評価や評判をまとめて端末に出していた。

アクセサリーの評価が高いのはもちろん、カフェが人気なのは店員の顔の良さも関係しているらしい。

「推定顔面偏差値『A』以上のみだって」

「うわあ、これはたしかに煌びやかだね」

私服に見えるおしゃれな制服は店員それぞれに合わせて作っているようで、同じものが一つもない。

店員の顔を引き立てているアクセはシルバールイスのものらしい。

「これは人気でるわ」

目を閉じて大きく顔を上下させる二人に苦笑を零して、端末を操作して他に情報がないか探していく。

「おっ！ これは使えそうじゃない？」

横から伸びてきたマウちゃんの手が画面の端を指さした。

そこには、新しいスタッフ募集の文字。しかもカフェの店員だけでなくシルバールイスの屋敷で働くスタッフも募集しているらしい。

「ふーん、これはいいの見つけたね」

勝手に上がる口角をそのままにして、三人で拳を突き合わせた。

「いくよ？ じゃんけん！」

／＼／＼／＼／＼／

『『よろしくお願ひします』』

「ふふっ」

通信機から聞こえる二つの声に思わず笑い声が零れる。

じゃんけんの結果。カフェの潜入はマウちゃん、屋敷の潜入はゆきちゃんに決まった。

マウちゃんの潜入はとてもスムーズに成功した。

カフェに客として現れたマウちゃんが大人っぽく色っぽい容姿で店内の注目を一身に受

け、会計をしている彼に社員が『バイトをしないか』とスカウトするのも全て予定通り。声を掛けられたマウちゃん、『お屋敷のバイトに立候補しようとしてただけど、俺をここで雇ってくれるなら一緒にバイトに募集しようとしてた子も雇ってほしい』とゆきちゃんを推薦し、屋敷バイトの面接をすることになり結果、見事合格。

マウラと冬稀だとバレないようにと髪色は少し明るく見えるようマウちゃん印のヘアスプレーによって変化していて、いつもと違う髪形や服装になっている。別人のような見た目と雰囲気は最初見た時は本当に驚いた。

二人はマウラと冬稀ではなく『マロウ・リーイット』と『フユノ・リーイット』名乗り、兄妹のふりをしている。

二人が働き始めた日から十日経った今日は二人とも出勤と言うことで、僕は外で待機しつつ二人の情報をもとめる係りをしている。

作業をしていれば端末が揺れて、いつの間にかお昼時になっていたのだと驚いた。

端末を操作してみれば着信はゆきちゃんからで、当たり前だが、お昼が稼ぎ時のカフェで働いているマウちゃんからの連絡は無い。

「あーい、ボッチのレイくんです」

『こちら昼休憩に入ったフユノです、現状怪しいところは見えないんですけどもうちょい探り入れます。井戸端会議してくるんで通話こつちを中心で聞いてください』

「了解です」

マウちゃんの通信機が拾っている音声を下げれば、右耳のイヤホンからの音だけが小さくなり、ゆきちゃんの音声を上げれば左のイヤホンからの音が大きくなった。

どちらの音も聞き分けられる程度の大きさに調整して「いいよー」と声をかければ端末の通話が切られた。

イヤホンから聞こえる声に集中すると、水音と硝子同士がぶつかるような音に交じってゆきちゃんの声がある。

硝子の音を意識的に除外してゆきちゃんの声に集中して耳を傾ける。

「お疲れ様です、お手伝いさせていただきます」

『フユノちゃんじゃない、まだ休憩中でしょうか？』

「もうご飯も食べちゃったんで、暇なんですよ。皆さんとも仲良くなりたかったです」

『あら、じゃあお言葉に甘えちゃおうかしら』

『フユノちゃんこつちおいで』

年配らしい女性の声が複数人聞こえるのでどうやらうまく会話に交じれたようだ。

当たり前障りのない世間話が続いていたが、ふとゆきちゃんにご婦人の一人が質問を投げかけた。

『フユノちゃんみたいなの若い子が、こういうお仕事をするのって珍しいわよね』

「もともとはカフェのほうを考えてたんですけど。私、顔に傷があるから……」

ゆきちゃんの言葉に一瞬息が詰まった。頬の傷があるゆきちゃんはカフェで働けないから屋敷担当に決まったのだ。

彼女自身は全く気にしていないし、僕もマウちゃんも傷があるからってゆきちゃんの美しさが損なわれるなんて思っていないが、彼女の心の傷は癒えきっていないはず。

しかも、そこにいるのはAランク代のご婦人たちで、彼女たちの考えは僕らとは違う。

『お顔はとっても綺麗なのにね、傷が残念よね』

『傷がなければ、フユノちゃんはきつとSランクだったと思うわ！』

『本当に傷さえなければね。貴女をうちの子のお嫁さんにしたくらいだもの。家事も得意でお話も上手、完璧って言えたのにな』

ご婦人たちに悪気がないのはわかっている。むしろ彼女たちはゆきちゃんのことをかなり評価してくれているらしい。

しかし、やはり顔にある傷のせいで評価が下がるのが当たり前だという顔面至上主義で



ある彼女たちの言葉はゆきちゃんを傷つけるものでしかない。

この通信機ではこちらの音を向こうに届けることはできない。

ただ会話を聞くだけしかできない状況にやきもきするが、ゆきちゃんは一切声色も変えずに「本当に災難でした」と笑っている。

『あ、でもこつちを選んだのは正解だと思っわ』

『ええ。ランクが低いのにカフエで働こうとしたらかなりきついよ？ 屋敷を選んだのは幸運だったと思っわ』

「え、そうなんですか」

きたっ。

急にやってきたソレらしい話に眉間に寄っていた皺を親指で伸ばして、頬を叩く。

集中して耳を澄ませばご婦人たちは声のトーンをいくつか落として、こそこそと秘密話をする声の大きさを話し出した。

『カフエの地下にはカフエで出す凝ったケーキとかシルバーアクセサリーを作る工房があるのよ。そこで働いているのは表に顔を出せないBマイナス以下の低ランクの人達でね』

『カフエのキッチンもお客様の目が届くからって理由で、簡単なお菓子やドリンクはBからAの人が作ってるのよ。Aプラス以上は接客のためにホールを担当するの』

「ランクごとに仕事場が分けられているんですね。でもそれはこの屋敷と変わりなくありませんか？」

「そうだ。屋敷も裏の雑用はA以下が行い、お客様やお屋敷の方たちに近い使用人はAプラス以上と決まっているはず。」

「カフェとりざっくりしているが、そこまでの違いがあるとは思えない。」

『それが全然違うのよ。屋敷の方はね、Aランク代以下は雇ってないの。だから待遇も普通のところよりもかなりいいし、私たち裏専門の使用人でもお給料は安定してるわ』

「そうだったんですか。たしかに言われてみればBランク代やCランク代の方って見たことありません」

『でも、カフェと工場は違うのよ。むしろあそこは低ランク代のひとを多く雇っているって聞いたわ』

「ご婦人の言葉に何となく、シルバーイスの秘密が予測できた。」

「グッと僕が拳を握ると同時にゆきちゃんの声はつきりと聞こえた。」

「なんのために？」

『違法なほどの低賃金で働かせてるのよ。それでコスト削減をしてるらしいわ』

「予想していたものと同じ回答に反吐が出る。」

「しかしこの話が本当なら、情報屋の『違法確認済み』というスタンプが何を指していた

のかはつきりしたことになる。

これは裏取りが必要だね。

ゆきちゃんの通信のほうに重点的に耳を傾けるようにしたが、ほかに大きな情報もなくその日は終わった。

アジトに戻り、ゆきちゃんの仕入れた情報とマウちゃんも地下の存在を確認したということから、カフェの地下も調査することになった。

当然残っている僕にその役割が回ってきて、意気揚々と僕の髪をいじり出したマウちゃんは「Cランクに見えるようになるしかない」と好き勝手、僕の髪をセットする。

結局、マウちゃんの美的センスが許さなくて僕に似合わない髪型にできず、自分でやることになった。

いやなことを思い出すからしたく無かったが、昔の自分を思い出す。自身の容姿をよくするために色々試していたときに失敗したものを再現していく。

髪は全体的に乱雑に、前髪は目にかかるようにわざと分け目をなくす。

細目にしてわざと睡眠時間を削って目の下に隈を作って陰険な雰囲気を纏い、肌が荒れるから嫌だったけど我慢してペンでそばかすを描く。

おろおろとしどろもどろな言動に合わせて、ダメな子に見えるようにずっと下を見て目

を泳がす。

変装が完了したと二人を呼ぶと、啞然とした顔で二人はこちらを見て固まった。

歩み寄って「あつあのお」と突っかかりながら声をかけるとマウちゃんに肩を勢いよく掴まれた。

「なにそれ！ なにこれえ！ 別人すぎるじゃん」

「すごい、なんかＣランクに見える。え、なんで？ すごすぎるよ」

「よ、よかつた。ちゃつ、ちゃんと僕できてる？」

「できてる、完璧！ すごつ」

ハイテンションに僕を見て喜ぶ二人になんか複雑な感情になる。

けど、失敗したこれも今こうして役に立っているならいつか。そう素直に称賛を受け取ることにして、がくがくと肩を前後に振り回すマウちゃんの手から逃れる。

「色んな路線を試したことがあつてね、これは加護欲がそそるかなつてやってみたやつなんだけど。ただただ顔面偏差値が低くなっただけだったんだ」

恥ずかしくなつて頬をかけば「ほうほう」と納得した様子で二人は頷く。

「不健康そうなのは似合うけど、確かにこれは路線が違ふね」

「いつものレイちゃんは綺麗で弱々しさはあるけど、程よくなるよう計算してるんだね」  
どこまでも褒めてくる二人にむず痒くなつて、次の声が聞こえてくる前に手を二度叩

く。二人の口が閉じたのを見てできる限り大きに笑顔を浮かべた。

「よし！　じゃあ次からは僕も潜入だ！　三人でそれぞれ情報収集頑張っていこう！」

「おー！！」

／＼／＼／＼／＼／

二週間たった。

バイトに応募した次の日、すぐに働いてくれと言われてカフェに行けば、恐らくAランクであろう社員が蔑んだ目で見てきた。

冷たい視線におどおどと反応して見せれば、高圧的に社員は地下の説明をしてくる。言い返せもしない弱つちい奴と思っっているのが見え見えだ。

地下で働いていてわかったのは、作業環境はかなり厳しいものだということ。そして、給金が本当に少ないということだった。

給料は一週間ごとに配給され、計算してみると明らかに最低賃金を下回っていた。

一週間ごと渡されるため少ないことに気づきにくいし、何より気づいたとしても働き手

が見つかりにくい人たちが集まっていたため黙認している人もいた。

気づく人数を増やそうと週に一回の配給を月にしてもらおうと思ったが、週に一回でないと暮らせなくなってしまう人もいるらしい。

特にひどいのはアクセサリーを担当している人たちだ。

制作ノルマがあり、それがかなりえぐい。昼休憩は一時間とされているが、実際五分程しかなく、昼休憩を削らなければノルマを達成できないのだ。

カフエが繁盛すればするほど地下の作業は鬼のように増えていく。残業しても出る給料はたかが知れていて残業が多いと減らせと圧力がかけられる。残業しても出る給料

完全にこれは低ランク代の足元を見ている。

ゆきちゃんとマウちゃんの給料はしっかりと払われていた。なんならバイトにしては高い給料に、こつちを下げれば低ランクの人たちも普通に払えるだろう。

証拠は揃いつつある、あとはどうやってこの事実を使うかだ。

「難しい顔してどうしたの？」

「え、すみません」

バイト中なのに考え込んでしまっていたようで手が止まっていた。覗き込んできた先輩に謝れば彼は小さく笑って「謝らないで」と首を振った。

「悩み事とか困ったことでもあったのかなって、俺ここ長いから答えられることが多いと思うよ？ なにかあったら言ってみてね」

「あっありがとうございます。あの、昼休憩のときいいですか？」

「うん、大丈夫だよ」

Cランクであろう彼は優しく目を細めて作業に戻っていった。

彼はここで一番の古株だ。ゆえに多分給金のことも気づいているはず。

なのに彼はここで働き続けている。彼の作るシルバーアクセサリーはとても綺麗で、彼が制作を担当するのは高級品として売られるものばかりだ。

誰よりも働いていて、誰よりも真面目な人。

だからこそ、理不尽なこの場所で働いているのが不思議でしよすがなかった。

愚痴も言わず淡々と働いては、不満や不安に壊れそうになっている他の職員をサポートしている姿まであった。

むしろ浮いて見える彼の姿に、もしかしてシルバーイスから雇われた監視役なのかと疑ってモいる。

「昼休憩の時は、発言に気を付けなきゃな。」

黙々とアクセサリーを作る背中を見て、唾を小さく呑み込んだ。

「すみません、忙しいのに……」

「大丈夫大丈夫、今日くらい三十分休憩したってさ！」

小さなおにぎりを二つ膝の上に乗せて笑う先輩は、制作所のほうを指して「皆も協力してくれしね」と明るく言う。

彼が休憩に入る前に何人かに声をかけると、長めに休憩をとつても大丈夫のように調整してくれて、彼に声をかけられた職員は死んだ目が嘘のように光をもって任せろと意気込んでいるように見えた。

その様子からもどれだけ彼がここで頼られ、好かれている存在なのか分かる。

「あのっ、じ、実は……」

「ゆっくりでいいよ」

「ここって、最低賃金より給料低くないですか？」

「えっ」

まどろっこしい駆け引きではなく、正面から反応を見てやる。



ジツと彼の言動を観察する。彼は驚いたように目を見開き、固まった彼は頬をかくと苦笑してゆつくりときこちなく頷いて見せた。

申し訳なさそうでもどこまでも冷静で、落ち着いていることに少し驚いた。

「え、つと……先輩は知ってたんですか？」

「うん、働き始めて少しして気づいたよ」

「上に抗議とかは？」

「したことはないね。いや、正確にはしようとして諦めたんだ」

先輩は急須からお茶を湯呑みに注ぐと、僕の分もお茶を淹れてくれる。

暗に話が長くなることを指しているのだらうと、椅子に深く座りなおしてまっすぐ彼の話を聞く姿勢をとれば、先輩は両手で湯呑みを包みながらぼつりぼつりと昔話を始めた。

俺とあとさつき俺が声をかけていた人たちはね、ここにもう何年も務めてるんだ。

働き出して半年の時、一人が気づいたんだよ。給料が最低賃金以下だつてね。

もうさ、不当な扱いやら地下に追いやられていることやらで溜まっていたイライラが爆発しちゃつてね。

お屋敷に乗り込んだ。

みんなのできる限りの武装までしちゃってさ。スコップとかクワとかただの木の棒とかだったけど、お屋敷の塀を乗り越えて庭まで入ったんだよ。

そこで出会ったんだ。主様と。

俺らを見てさ、すごい驚いた顔をしてた。けどねすぐにその目が潤んで、彼はその場に膝をついて謝ったんだ。

まだまだ少年から抜けきつてない小さな体をもっと小さくして『地下工房の方達ですよ。父が申し訳ありません』って額に土がつくほどね。

彼はシルバールイスの当主の一人息子で、顔もAプラスなのに。俺たちを見て馬鹿にするわけでも警備を呼ぶわけでもなく、一番初めに全てを悟ったように頭を下げたんだ。

俺たちのことがわかるのかと聞けば『もちろん』って涙を浮かべたまま笑ってさ。

もう一度頭を土に擦り付けたんだよ。

もうさ、それ見てさ、俺たち手に持ってた武器を落として。急いで駆け寄ったよ。

怒りとか憎しみとか全部消えちゃって、ただこの人に頭なんか下げさせたくないって気持ちだけに支配されてた。

その後、庭にあった小屋で少年と話したんだ。

彼がシルバールイスの一人息子で跡取りの坊っちゃんを知ったときは、やっぱりという

気持ちと本当にあの当主の息子なのかと疑いと驚きが強かった。

涙を滲ませながらも必死に泣かないようにしてる坊っちゃん俺たちに謝罪と、坊っちゃんが知っていることを教えてくださった。

高顔面偏差値を多く雇うためには他よりも給料がいいのが手っ取り早い、低ランク代の人間は給料を確認する暇もなく働けるかどうかで職を選んでいる。

そこに父は目をつけたらしいってね。

坊っちゃんはそその話している間ずっと硬く握り締めた拳を膝の上で振るわせて、唇を噛んで悔しそうにしてたんだよ。

子供の僕はお父様になにも言えない、みなさんを救うこともできない。無力でごめんなさい、お父様の悪事をわかって治安維持部隊に連絡もせず目を逸らしてごめんなさい。

ついに泣き出した坊っちゃんの手をとって謝らないでほしいって言うとき、坊っちゃん俺を見て俺の名前を呼んだんだよ？ ありがとうって言いながら。

なぜ名前を知っているのか反射的に聞いたらさ、職員の名前は全て把握してるって言うんだよ？ 低ランクとかバイトとか関係なく全員を。

驚いたよ。俺ら名乗ってなかったから坊っちゃんの言うことがこの人が当主になってくれたら職場はもっと良くなるんじゃないかって思った。

しかも坊っちゃん俺達三人を褒めてくれたんだよ。貴方達が作るアクセサリーは凄く綺麗で丁寧で、あんな環境なのに真剣に誠意に仕事をしてくれているのが伝わる。

俺がゴミになる部品を使って勝手に自分で考えたアクセ作ってるのも知っててさ、波模様のリングが特に素敵でした。つてよ。

俺のことだけじゃない。他の二人のことや他の職員のことも何で知ってるんだ！ つて話をして褒めて下さったんだ。

褒め終わるとさまた暗い顔で、自分が当主になら、絶対皆さんがもつと楽しいと思える職場を作れるのに。つて悔しそうにするんだよ。

だからその時、俺達は坊っちゃんに誓ったんだ。

貴方が当主となるまで、俺達は頑張ってみます。坊っちゃんが当主となってくれたら、そのときは俺達を有効に遣ってほしいですつてね。

その後、三人で相談してさ。職場に帰ってからその時働いてた人たちに全部話したんだよ。

給料が少ないこと、顔面偏差値が高い人を雇うために減給されてること。現当主と次期当主の考え方が全然違うこと、坊っちゃんは俺達を大切な社員として見てくれてることに。そして坊っちゃんが言っていた誉め言葉の数々。話したこと全てを伝えた。

給料が少ないことに怒って辞めていくやつもいたが、それよりもここを追いだされたら他に働けるかも分からないって残ることを選択した奴もいたけどね。

でも残ることを決めた奴の中には、俺達のように坊っちゃんに着いて行きたいって残った奴も結構多いんだよ。

結局、今日まで変わらず働いてるバイトは皆、全てを知っててここに残ってるんだ。

俺達は俺達の主である坊っちゃんさんの力になるために、坊っちゃんさんの元で働くためにここにいるんだ。

まるで僕に言い聞かせるように話す先輩は、僕の方を見て苦笑した。

「だからさ、大事にはしないでくれないかな」

「い、いつから？」

「最近かな。更衣室で君が一人で見ちゃってさ、爽やかな顔して誰かと話してるんだもの。あんなの買えるならここに来る必要もない人の筈って思ってたね」

なるほど。

たしかにマウちゃん印の通信機や端末やは市販の物よりも高性能で、デザインもかなり凝ってある。

一目見ればそれが高価なものだということは、想像に容易いだろう。

「どこまでわかつているんですか？」

「わかつてはないよ、予想だけはしてるよ。記者さんとかそっちの人かなって」

ゆるゆると首を振っている先輩は、嘘は言っていないだろう。レヴォルトということはバレていないらしい、よかった。

一つ安堵の息をついて、肩をすくめてみせる。

「給料が正しく払われていないのは犯罪ですよ。いくら息子さんが良い方でも、現当主は裁かれるべきでは？」

「しかし現当主と同時にシルバールイス家が批判されることになることは俺でもわかる。シルバールイスがなくなれば俺たちの職は失われ、主様の下で働く夢も壊れてしまう」

懇願するように僕の手を握り締めて、先輩は俺の目を覗き込む。不安に揺れる瞳で下げた眉が、彼が本当にこの事件の露見を恐れているのが分かった。

「そっそうなんですか……。僕は記者でもなんでもないので心配しないでください」

バカっぽくニカリと笑ってみれば先輩はまだ不安そうに眼を潤ませている。彼の手を掴み返してどこまでも気弱でダメダメな人物を演じる。

「僕はただのバイトです。ここを壊しに来た人じゃないですから」

少し安心したように肩の力を抜いた先輩に柔く笑みを返して、食べれていなかったお弁当を広げた。

先輩との会話内容を二人に伝えれば、二人は深刻そうに黙り込んだ。

とりあえず先輩が言うように、本当に息子はまともなのか調べることにしよう。と声をかければ二人はゆっくりと頷いてくれた。

それからゆきちゃん主体で息子について調べていくと、先輩が言っていたように息子は顔面偏差値に現当主ほど厳しくなく、考え方もまともであることが分かった。

息子は現在二十三歳になりシルバールイス本店で副社長として勉強をしており、顔面偏差値に関係なく柔らかな物腰から人気も高いらしい。

職場だから外だから取り作っているのではないかと家でも仕掛けてみた。

本来、家の人との接触を許されない係についているゆきちゃんが息子の前に姿を現し、わざとぶつかってみたがその対応はどこまでも紳士的でむしろ謝罪までされたという。

マウちゃんの高貴な御家ネットワークを使い調べれば、学校に通っていた時も今と変わらず皆に優しく人の才能を褒められる心の持ち主だと評価は高い。

「いい子だね」

「うん、本当にいい子を絵に描いた感じだね」

「いい子すぎて裏を疑っちゃったけど、埃ひとつ出てこないね」

ソファに沈んで唸り声を上げれば、三つの声がぐちゃぐちゃに混ざって消えていく。

「どうする？」

マウちゃんの言葉が冷たく響く。何を？　なんてわかりきったことは聞かずに、小さく息を吸う。

僕たちがやりたいことは悪の制裁じゃない。

顔面偏差値だけで評価される理不尽な世の中に反抗して、顔以外の人の良い部分にももっと目を向けてほしい。

それを、たったそれだけを叶えたいんだ。

悪の制裁ではなく、顔面偏差値が低いというだけで不当な扱いを受けてる人がいれば救いたい。

ランク関係なく、顔の評価で理不尽なことになっている人がいるなら力になりたい。

でも、手を差し伸べようとしている人があの望んでいないのに勝手に手を出すのは、それはもう僕たちがやりたいこととは別のものになってしまふ。

ただの高顔面偏差値に対する嫉妬からの暴挙と捉えられてしまえば僕たちが目指すものは遠ざかってしまふだろう。



じゃあ、この件から手を引けるかと問われれば「はい」とは答えられない。

罪を犯しているのは事実だし、給金が低いことで辞めていった人たちもいるのだから、息子が当主になるまでにまた新しい被害者を出すわけにはいかない。

現当主はまだまだ若く、引退するにもかなり先のことになるだろうし。

それにここで諦めるということは情報屋に認められなくなってしまうということだ。マウちゃんもゆきちゃんも頑張ってくれたんだ。

こんなに大きな事件をレヴォルトが露見させればメディアも取り上げざるを得ない、それはつまりレヴォルトを知らしめるいい機会でもある。

やらないよりやったほうがプラスなことは多い。でも、してしまえばレヴォルトとは言えなくなってしまうかもしれない。

全てを引つくるための「どうする？」だということとは分かっている。

二人は僕の気持ちを汲んで悩んでくれているのが伝わってくるが、実は僕は悩んでいるふりをしているだけ。

本当はずっと前から、先輩から話を聞いた時に決めていた。

「僕は——、ふたりとも協力してくれる？」

二人は一瞬目を見開いて「もちろん！」と僕の背を叩いた。

~~~~~

『ニュース速報です。シルバールイスの当主、ロイ・シルバーさんが治安維持部隊によって連行されました』

治安維持部隊のなかでも優秀な人しかいないと言われていた『フォルテ』が、当主の手を縛って連れて行く姿が映し出された。

『長年、B、Cランク代に最低賃金に満たない給料しか払っていなかったことが、ロイさんの息子さんであるリンク・シルバーさんによって露見しました』

画面は切り替わり息子がメディアの質問に堂々と答えている姿が映る。

あの日、僕は二人に一つの提案をした。

レヴォルトが事件を暴くのではなく、息子に罪を告白させよう。

罪を暴いていないレヴォルトの名前も出せないから、知名度向上とか情報屋を納得させるとかはできなくなってしまう、けど理不尽な罪はちゃんと世の中に知れ渡る。

二人は楽しそうに笑って僕の提案に乗ってくれた。そうじゃなくっちゃって僕の選択を支持してくれた。

二人が許してくれたあと僕たちはすぐに行動した。

深夜にレヴォルトの格好をしてお屋敷に侵入。屋敷への侵入はゆきちゃんが裏口を開けてくれたから簡単だった。マウちゃんと一緒に息子の私室の一つ上の階の部屋に入り、ベランダに出る。

マウちゃんが柵と柱に機械を取り付けてくれたのでそれを確認してロープを腰に回す。

「いってらっしゃい」

笑顔のマウちゃんに送り出されて、ロープを両手で掴み柵から身を投げる。

ぶら下がる形になりながらマウちゃんに「いいよ」と声をかければ、機械がゆっくりとロープを長くしてくれるため少しずつ下に降りて行く。

満月が照らしてくれるおかげでライトもいらず、息子の部屋のベランダに安全に着地することができた。

ロープを腰から外してクンクンっと二度引けば、ロープは勝手に上に戻って行く。

一度目を閉じて仮面の位置を直す。シャルルが人と二人きりで話すのは初めてのことで少しの不安と緊張に息が詰まる。

「ふう、よし」

ベランダの窓に手をかけて勢いよく開けた。

急に入り込んできた冷たい夜風に体を震わせた息子がこちらに目を向けて固まった。

胸元に右手を置いて、マントの端をつまんで頭を下げる。

後ろから後押しするように輝く月の光によって伸びた影が彼の足元に絡む。

口を半開きにしてベッドから体を起こせない彼に向かって一歩だけ踏み込んで、部屋の中に入った。

「初めまして、レヴォルトのシャールと申します。このような夜更けに急な訪問、申し訳ありません」

「レ、レヴォルト？」

「はい、レヴォルトのシャールです。ロイ様とお話ししたいことがありますので、どうか警備などを呼ぶのはやめていただきたいです」

彼がベルにつながる縄に手をかけたところでそう言えば、びくつと一つ身を震わせてから、縄から手を離れた。

「話ですか、殺しに来たとかではなく？」

「はい、あくまで対話を望んでいます。お父様と最低賃金のこと、と言えば分かっていただけですか？」

目を見開いて口をはくはくど動かしした後、彼は顔を青くした。

「えっ、そっそれをどこで」

「お話ししていただけますか？」

「ふうー。わかりました、どうぞ」

青くしていた顔を振って一度大きく息を吐くと、ベッドの端に腰掛けて立ち上がった彼の目はこちらをまっすぐ捉えた。

彼が指したソファに腰掛けて、僕は彼にレヴォルトが調べたことを話した。

事実ですよ？ と問いかければ彼は素直に頷いて、頭を下げ謝罪の言葉を口にした。

謝ってほしいわけじゃなかったが、申し訳ないと思っているのなら協力してほしいと言えば息子は顔を上げて、「なににですか」と眉を下げた。

息子、ロイに当主になる気はあるか問えば彼は間髪入れずに頷いた。そしてすぐにハツとした表情をして、お父様がいますからと苦笑する。

これで彼にやる気がなかったらどうしようと思っていたが、どうやらその心配は杞憂に終わった。

「ロイ様にご提案があります、私たちレヴォルトは顔面偏差値による不当な扱いを受ける人を少なくできる様、動いています。最低賃金以下の給料が続くのなら、告発をします」

「あつあの、お父様を説得しますからそれだけは！ シルバールイスがなくなれば路頭に迷う人もいるんです！ チャンスをください！」

「落ち着いてください。提案があると言ったでしょう？」

「で、提案ですか？」

床に膝をついて懇願するようにこちらを見るロイさんの肩に手を置き、落ち着かせるようにトントントントとゆったりと摩る。

「はい、私たちは実際に働いている不当な扱いを受けている職員さんとお話ししました。職員さんたちはこの状況のままでもいい、坊っちゃんを信じてるからと言っていました」

「皆さんが……？」

「ええ、あの人たちは貴方を信じ、貴方が当主となったシルバールイスで働きたいと言っていました。レヴォルトとしてはその言葉を無視して告発するわけにはいきません」

肩を疎めて額に指先を添える。やれやれというように首を振ってからしゃがみこんだままのロイさんと視線を合わせるように自身も膝をついた。

「では、告発はされないといいことですか？」

「いいえ、先ほども言ったように罪は罪です。無視はできません」

「じゃあどうするんですか？」

声を揺らし目に涙を溜めて私のマントを掴んだ手は震えている。

そんなロイさんの目を仮面の下からしっかりと見つめて、一言ずつ強く発した。

「ロイさん、私たちは貴方に提案させていただきます。現当主を告発し、貴方が当主になりませんか？ 貴方にその気があるのならレヴォルトから告発は致しません」

「え」

驚くロイさんに微笑みかけてマントから離れ落ちた手を拾う。立ち上がってその手を引けば力の入っていないロイさんは簡単に引つ張られて立ち上がった。

「貴方がやるなら私たちレヴォルトは協力させていただきますよ」

胸元に手を当てて腰を折り右手をロイさんに差し出す。困ったように目を何度か泳がせた後、グツと唇を噛み締めたロイさんは勢いよく私の手を掴んだ。

それからは急ピッチで告発のための準備を進めていった。

低ランク代のみが最低賃金を下回っていることが分かるようにCランク代、Bランク代、Aランク代、Sランク代それぞれの給与明細を集める。

しかし、自分たちのだけでは証拠とするには数が足りなかったため、ロイさんやバイトの先輩にも協力してもらい職員全員分を集めた。

低ランク代の職場環境が如何に悪いのかを映像に収め、現当主がそれを知っているのに

黙認している証拠の音声も録画して、確実に現当主を引きずり下ろすために動く。

ロイさんは父親を苦しめることになるかと分かっているのに、決心したからかその瞳はまっすぐと前を見据えていて迷いや曇りは見えなかった。

思っていたよりも簡単に呆気なく、確実な証拠は揃え終わった。

ロイさんは証拠が集まった次の日には謝罪会見を盛大に開き、すべての罪を認めた。

父親には新作発表会見とでも言っていたのか、何も知らずに笑顔で隣に座っていた当主の顔が青ざめていく様は中々に見物だった。

怒り狂った父親に掴みかかられたが、ロイさんは強い力でその手を振り払い警備員に向かって父親を投げると取り押さえさせる。

『父の行動を分かっている止められなかった自分も同罪です。本当に申し訳ありませんでした』

深く頭を下げたロイさんにカメラを向けていた記者の「同罪なんかじゃない」思わず漏れただろう声がテレビに載った。

美しい顔を崩して、涙ぐみながら謝罪する姿は酷く同情を誘う。

静まった会場に大きく響いたのは椅子の倒れる音。

カメラが音のほうを捉えると、そこには会場の隅で証人として座っていた先輩が勢いよ



く立ち上がっていて、先輩は下を向いたままその場に立ち尽くしている。

『坊っちゃん、違います。貴方は私たち従業員を常に気にかけてくださいました。私たちは貴方のために仕事を辞めずあそこに残っていたんです』

先輩の口から語られるのは全てロイさんへの称賛であり、彼に対する感謝と信頼の言葉ばかり。

それを聞いて記者たちが「息子さんは良い方だったようですね」と口にしましたのを聞いて僕たちはガッツポーズをした。

会はずつとマウちゃんの考えたシナリオ通り続いていた。

息子はいい子だが、父親のせいで苦労してるかわいそうな子。

そう見えるように考え、かなりありきたりなシナリオになったので演技だとバレるのではと心配だったが、それは杞憂に終わったみたいで安心する。

演技っていうかロイさんも先輩も感極まって好き勝手話してるし、シナリオと言っても真実しかないから説得力はあるわけで。

記者会見はいつの間にか、シルバールイスの息子さんと従業員の絆会見みたいになっている。

まあ、予定通りロイさんは同情を買って世論は彼の味方をしたからいいだろう。

テレビの電源を落として、ふうつと肩の力を抜く。

よかつたと思う反面、ああどうしようかと心が重く感じる。

レヴォルトは今回のことには関わっていないように見える。そう決めたのは僕たち三人だったが、レヴォルトが関係ないことにするイコール情報屋にも言えないということだ。

「シルバールイスはかなりの名家、これ以上ない大きなナニカだったんだけどなあ」

マウちゃんが両肘を机について「ガックシ」と言いながら頭を下げているのにゆきちゃんと一緒に苦笑する。

「仕方がないよ。新しく情報屋を認めさせられるナニカを見つけましょうか！」

気分を一新するために手を叩いて立ち上がると、目の前に影が急に現れた。

見覚えにあるような無いような影を辿っていくと、夕暮れの光を背景に窓の淵に情報屋の少年が座っていた。

「えっ」

「おこんばんはー、お邪魔しますう」

ひらひらと手を振って、相も変わらさず雑面で口元以外を隠した少年はこちらの返事も待たずに勝手に部屋へ入ってくると僕の目の前で足を止めた。

「そろそろ大きなナニカは終わりましたか？」

「あつとお、いや、まだ、それは」

期限なんてあったっけ？ 急な訪問と押し寄せてきた不安に歯切れ悪く返せば、少年は頬をリスのように膨らませた。

やばい怒ってる。

急いで頭を下げようとしたところで「ぶはっ」と少年が吹き出した。

「くふふふっ、あはははは！」

腹を抱えて笑い出した少年に僕たちはポカンとして、何も言えずに少年が落ち着くのをただ黙って待った。

「はーっ、ははっ。ごめんなさい、だって貴方たちが何も言わないから」

雑面の下に手を差し込んで、おそらく目元を拭った少年は姿勢を正すとニッと口角を上げて僕を見上げる。

「シルバーリスのこと、全て知っています」

少年の言葉に驚いて目を見開けば、彼は「情報屋ですから」とさも当たり前だというように答えた。

「すごいですね」

「まあ、最強なんです」

関心の言葉を溢せば嬉しそうに頷いた彼は、胸を張って両手を広げた。

「レヴォルトの皆さん、おめでとうございます」  
くるりとマウちゃんとうきちゃんにも視線を向けて、軽く頭を下げた情報屋は楽しそうに言った。

「初めまして、レヴォルトの皆様。情報屋のアラウドと申します。これから末永く楽しませてくださいね」

その日から情報屋アラウドと私たちレヴォルトは情報の売買に始まり、それぞれがほしい機械の共同開発までするようになった。

／＼／＼／＼／＼／

「レトくんがつけてるピアス型通信機とか、このフックグローブとかはマウちゃんとアラウドが作ってるんだよ」

「へえー」

興味深そうに大きく頷いたセグレトは僕のピアスを手に取るとクルクルとそれを回して

眺めている。

「マウちゃんよりアラウドの方が開発力があるけど、発想はマウちゃんが面白い。だから共同開発してレヴォルトとアラウドだけが使用するっていう協定を組んでるんだ」

「なるほど」

ピアスを机に戻してフックグローブを触りだしたセグレットの頭を撫でる。

首を傾げて不思議そうにこちらを見上げた彼に、笑いかけてテレビに視線を向けた。

「あれからも活動は続けてきたし、告発やら暴露やらは沢山してるけど、シルバールイスほどの名家もなくしてレヴォルトの名前が大きく扱われることは中々なかった」

レヴォルトの名を隠したい政府を黙らせるために、現場では大声で名乗り、予告状まで使つて怪盗のような出で立ちで人々の視線を奪うことから始めた。

無名だったレヴォルトも最近はずいぶん認知されてきている。だからこそ、ここで。

「メディアも大きく取り上げようとしませんが」

「そう。この前のレストラン、シュペルブは有名なこともあったし衆人環視の中でやったから取り上げざるを得なかったんだろね」

まだまだレヴォルトの一般的知名度は低い。

治安維持部隊とは何度も戦つてきているので国は僕たちを意識しているだろうが、僕たちがやりたいことのためには一般人にこそレヴォルトを知ってもらふ必要がある。

「レヴォルトを知らしめて、もう完全に無視できない存在にする。そのためにも今回の依頼は大事なんだ」

「じゃあ、頑張らないとだね」

吉兆の美術館の間取り図を広げ、ニヤリといたずらつ子のように歯を見せたセグレットに釣られて笑った僕はその頭をわざとグシャグシャにするようにかき混ぜてやった。

何時間たって何度日が昇っては降りたのかわからない。

疲れているはずなのに頭はハッキリしていて、脳も手も止まらず動き続けている。

付箋に赤や黒のペンで色々書きこまれた紙はシワを寄せて、ゴミにしか見えないような酷い有り様だ。

「展覧パーティーは変わらず十八時から始まる。警備員は十六時には集合して、最終確認と配置に着くことになってる」

「潜入するなら警備員か客に成りすますのが一番手っ取り早いってこと？」

「そうなるね、今回の場合は怪盗じゃなくて暴露が目的だから逆を狙って動きます」

疑問を口に出せば、それに正解というふうに戻したマウちゃんが青と赤のペンで入り口に丸を付ける。

「レイとゆきちゃんはお客様として侵入してほしい。それで中に入ったら二人にはクライマックスに備えて、ある仕掛けを頼みたいんだよね」

「マウちゃんは？」

「俺は警備員に成り済ますよ。内側から混乱させて警備をぐちゃぐちゃにしなきゃ警備隊増員のせいで脱出経路が無くなっちゃうからね」

不敵に右の口角だけ上げたマウちゃんの姿はよく見る悪魔とかにそっくりだけど、僕らの仲間であってくれているのだから、怖いよりも安心が勝った。

マウちゃんがこんだけ楽しそうなら不安要素は少ないかな。

確かに今回の場合は依頼だ。

そして依頼の内容は『奪う』じゃなくて『暴く』で。僕らは今回、一人の依頼者の今後とこれからの世界に変化の雫を一滴でも垂らせるか、なんて重くて大きなことを背負って戦うんだ。

「よし、じゃあ細かいところ決めてこうっ！」

ノアさんはあの会見のあと何度か様子を確認したが、今は手紙に書いてあったお願い通りに『展覧パーティー』でオリビアが発表するための、新作の絵を描いてくれている。

彼も頑張ってくれているのだから自分たちもしっかりやらなくてはと握った拳を天に掲げた。

「やる気じゃん！　じゃあれいとゆきちゃんの潜入方法から決めるか！」

「招待状がなきゃ駄目なんだよね？」

「うん、けどそれは俺とノアさんで用意します！」

マウちゃんはそう言つて、やることリストに『招待状二枚獲得』と書きこんだ。

高貴な家から順に配られるというそれを入手するには、まず高貴な家で招待状がいらぬ人を探さなきゃいけないということ。

美しいものが好きな人で溢れるこの国では該当者を見つけるのも中々苦勞しそうだな。

「じゃあ偽物を使うこともないんだ」

「偽物でもよかつたんだけど今回は無理かな。一枚一枚デザインが違うんだって」

面倒くさそうに口を尖らせて不満げな顔をしたマウちゃんは、懐から一枚の横長で紫色のチケットを出した。

そこには『展覧パーティー招待状』の文字がある。

高貴な家にだけしか配られていない招待状が、もう、彼の手元にある。

固まって招待状を見る僕とゆきちゃんに、キラキラと優しい笑みを浮かべて親指を立てたマウちゃんの親指を絶対曲がらない方向に曲げたくなつたけど、グツと堪えた。



すごく難しいです、無理かもです。なんて空気出したくせにつ。

「どのデザインを誰に贈ったかは残してないから、メトカーフに届いたのも使えるよ」

遊ばれたことに文句を言いたくなかったが、よかったねと清々しいくらい笑顔のマウちゃんを見ていればそんな気持なんか消えてしまった。

「はあ、じゃあ残りは一枚だね。警備員の服は？」

「ゆきちゃんが捕ってきてくれました！」

「一昨日くらいにゲットしてきました！」

目の前で元気に起立する親指が二本になった。

キラキラとした真つ赤なめんと、オレンジ色のめんめを大きくして「ほめて」と言いたげな二人に、つい噴き出して笑ってしまう。

招待状を掲げるマウちゃんと警備員服を掲げたゆきちゃんの頭を、小型犬の頭を撫でるときみたいにわしゃわしゃつと無遠慮にかき混ぜてやる。

そこからも会議は踊りつつも、決めるべきことは着実にちゃんと決まっていった。作戦は撤退バージョンを抜いて三バージョンも考えられた。

あとは念入りなプラン作成と作戦の準備を滞りなく終わらせるだけだ。

何日も皆で相談して、いくつも作戦を考えた。

プランを立てていく中で、シミュレーションをすればレヴォルトの活動がやっと大きな一歩を踏めることを確信して上がる口角を抑えられなかった。ふう、と一息ついて、両頬を思いつきり叩く。

「本気出して頑張ろ！」

今までで一番大きな舞台での『ショー』になる。

半分ほど残っていたホットケーキを折りたたんで、無理矢理口に押し込んだ。上手く噛めないけどそんなの無視して強く噛み切ってやる。

「了解！」

両頬を赤く腫らした僕をみて、目を細めた二人が強く頷いてくれた。

／＼／＼／＼／＼／

煌びやかなライトに照らされて歩く人たちに、シャッター音があつちこつちで響いている。

「ゆいさん、そろそろだよ」

馬車の中から外を覗きつつ、ゆきちゃんではなく『ゆい』の方に視線を向ける。

黒い髪は高くで一つに纏められており、編み込まれたお団子にはリボンまで編み込まれていて黒髪にオレンジ色のリボンがよく映える。

小さな帽子から垂れるベールが、化粧で近づかなきゃわからないほどに隠れた彼女の傷をさらに覆い隠す。

黒とオレンジだけで纏められたドレスも、ゆきちゃんの気品と強さを感じさせている。あのスカートの中に武器が隠されているなんて知らなければどこぞの立派なご令嬢にしか見えないだろう。

「ええ。大丈夫よ、ルイさん」

呼ばれ慣れない名前にそわそわするが今の僕は『ルイ』だ。

目立たないのが今の僕らの仕事。

シンプルすぎると悪目立ちしてしまうので、目を引かない程度に適度にオシャレには気を遣って選んだスーツはゆきちゃんとマウちゃんに好評だった。

今の俺は『Sマイナス』に見えるらしい。それなら丁度いいくらいだろう。止まった馬車の中から外を覗けば、待ちに待った騎馬が続々とやってきた。

「月華だ！」

記者の一人がそう叫んだのを合図に、ゆいの手を取って馬車から降りる。

「いこう」

多くの記者や人の目が治安維持部隊の特殊部隊『月華』に向かっている。

これを守っていた。

この期に乗じて、写真に撮られることなく、さっさと中に入るのが最初の作戦。

月華に必死になってカメラを向けてファインダーを覗き込んでいる彼らはこちらに背を向けているし、その記者や一目見ようと集まった民間人に阻まれて、月華もそっちの対応に気を裂いている。

「招待状を拝見いたします」

「はい」

二枚の招待状を手渡せば、券を何度か傾けて透かしを確認した受け付けが頭を下げた。

「どうぞ、ごゆっくりお楽しみください」

受付けに軽く会釈して、さっさと中に入る。

煌びやかな正装に身を包んでいる人達がグラス片手に歩き回っている。

広く綺麗な会場の壁にはノアさんが描いたはずの絵が、オリビア作の文字とともに四方に並べられていた。

「虫唾が走る」

「ゆいさん、今は我慢して」

一瞬、頬を引きつらせたゆいさんは落ち着くためか一度ピアスに触れて、真っ直ぐ前を見据えた。

「分かっているわ。私は左から回っていきますから、ルイさんは右から見えてきてちょうだい。気になる絵があつたら教えて、購入を検討したいから」

「わかりました、お姫様」

キザつたらしく言つて見せれば、ゆいさんは興味なさそうに一瞥してさっさと奥に歩を進めてしまった。

それに続いて、肩を竦めてから僕も歩き出した。

右から回って全ての絵を確認したが、全て事前にノアさんから見せてもらったことのある絵しかない。

オリビアのオリジナルは一つもなかったことを確認して、ピアスを三度ノックする。

『はいはい、ちゃんと全部ノアさんの作品だった？』

ノイズ交じりに聞こえてきたリリットの声にトントンとノックで返事をする。

『了解、ゆいも全部確認したっていうから。じゃあ手筈どおりにいこうか』

トントンとノックを返していると、そちらに意識が削がれていたからか、前から歩いてきた女性と肩がぶつかってしまった。

「ごめんなさい」

女性はピンク色の鮮やかな瞳をしていて、小柄であるのに上品に大人っぽいドレスがよく似合っていた。高過ぎず耳に馴染む声はとても優しく、彼女の雰囲気彩っている。

「いえ、こちらこそすみません。お怪我はありませんか」

「全然大丈夫ですから、お気になさらず」

小さく頭を下げて足早に去っていく女性の背を見ていれば、その女性とすれ違いにゆいさんがやってきた。

「どうしたの？」

「ううん。なんでもないよ」

ゆいさんとの合流も果たしたし、目的のステージへと向かうとしよう。

大きなステージには、床に着くほどの長いテーブルクロスに覆われたテーブルが一つあるだけ。

ここでオリビアは新作の発表をするつもりなんだろう。そしてそのまま新作発表パーティーが、既存作も含めたオークション会場になるであろうことは予想に容易い。

ステージ上のテーブルの位置を確認して、ゆいさんと離れる。  
手を突っ込んだポケットの中にある物に触れて時間を潰していれば、照明が少しずつ暗くなっていた。

きた。

「ピアスにトン……トン……と間隔を空けてノックをすれば『了解』と短い返事が聞こえ、通信が切れた。」

五月蠅いくらいのドラムロールが響いて、ステージの上だけが強い光で照らされる。

いかにも何か始まりますという演出に、人がステージ前に集まってくる。波にのまれなように後ろに移動すれば、目の前は大量の人で埋まった。

マイクを片手に、無駄に決めた格好の仮面を付けた男がステージに立つ。

「さあ皆様お待たせ致しました！ 本日の主役、若き天才画家オリビアの登場です！」  
大きく息を吸って「拍手でお迎えてください」なんていう司会者に従って、パチパチと会場中を拍手が埋め尽くす。

そんな拍手の雨の中、意気揚々と姿を現したオリビアは観客に手を振ってステージに上がった。

「本日は私の展覧パーティーにご参加いただきありがとうございます」

さすがはSランクの顔。

爽やかで華やかな顔からは、彼が裏で一人の画家を脅迫しているようには全く見えない。

「どうやら僕の絵を狙っている盗賊集団がいたようですか、この警備の多さに尻尾撒いて逃げたみたいですね」

いきなりレヴォルトを馬鹿にしてお茶らけた話を始めるオリビアに怒りが溜まるが今は、その話に共感しているみたいに見えるようオリビアに笑顔を向けて聞き流す。

高顔面偏差値らしい好印象を強く与える笑顔にほだされている人間はここに何人いるのだろうか。いや、むしろここに招待される程の高い顔面偏差値の人たちでは、見慣れた光



景過ぎて影響は受けにくいのかも知れない。

しかし物腰柔らかく清潔な印象を強く感じさせられるからか、彼の評価は高貴な家柄の中でも高い。

「本日は、私の新作をここで発表させて頂きたいと思っております」

オリビアが目配せをすると、それに合わせて司会者が隠された状態の絵を持ってきた。それが机の上にセットされると、オリビアは胸を張って絵を指さした。

「それでは、ご覧ください。オリビアの新作『雪解けの夕暮れ』です」

布が捲られて大きな絵が、堂々と姿を現した。

まだ雪が残る雪原で夕暮れに向かって手を伸ばす少年。

少年には夕暮れの日が当たっていて、またそれが少年の希望や未来を感じさせるが、なぜか決別や後悔まで滲んでいるように思われるのだからすごい。

しーん。と一度静まり返った会場は時が止まっているように何の音もしなかった。

その美しくも儂い絵を見て、やっと観客から「おお……」と本当に小さく歓声が漏れた。その声は次第に大きくなり拍手はその場の声をかき消しそうなほど響き渡る。

人に描いてもらった作品を堂々と発表するオリビアの姿に、顔が嫌悪に染まりそうに

なつたが歯を食いしばって、合図を待つ。

まだか、と手に力が入ってきたとき『いくよ』とピアスから声が出て、それと同時に全ての照明が落ちた。

真つ暗になったタイミングに合わせて、着ていたスーツを脱ぎ捨て『レヴォルト』の衣装に切り替える。

「キヤー！」

「落ちていてください！ 危ないので、その場で止まっていてください」

拍手が止み、叫び声と怒鳴り声で騒がしくなった会場で急に一つの光が射す。

ステージを照らさず、ステージの後ろの壁を照らした鈍い光は『二十、十九……』と文字を映し出し、カウントダウンを始めた。

それが映写機だと皆が気付いたときには、もう遅い。

その時には会場の全ては私の舞台になっているのだから。

カウントが十七を差したところで、襟に仕込んでいたマイクに向かって声を吹き込む。

「皆様！ お待たせいたしました。私はレヴォルトのシャーロットと申します」

困惑に染まった観客たちがざわめき周囲を見回すが、私を見つけることは出来ない。設置されている全てのスピーカーから私の声だけが聞こえるようにしているのだから、この暗闇の中で私の場所を特定することは無理だ。

「本日は、予告状にも書かせていただきましたが、最高の画家様の素晴らしい新作に対して、少しばかりのお礼を受け取って頂きたいと思えます」

残りのカウントは五秒。

「では、観客の皆さまも、その目と耳でお確かめください」

三、二、一。

「さあ、真実を皆様にお届けしましょう」

壁に大きく0と出て、画面が切り替わる。

映し出されたのは地下アトリエの映像。一人の男性が絵を描いており、一人は遠くに座って本を読んでいる。

『早く描けよ！ もう時間はないんだぞ？』

『すみません、オリビアさん』

怒りを滲ませた声の主がアップで映る。

絵を描いている男性に綺麗な顔を歪ませて怒鳴っているのはオリビアで、オリビアに怒鳴られた男性は頭を腕で覆い隠して恐怖に身を竦めている。

『顔面偏差値が低レベルなお前から絵の才能取ったら何が残んの？　ねえ、ノア？』  
『ひいっ』

ノアと呼ばれた男性は座っていた椅子を蹴られて、悲鳴を上げた。

『あーっもう、早くしろよ！　展覧パーティーにまでにちゃんと仕上げろよ！　いいな！』  
オリビアは最後にノアの頭を突き飛ばすようにして、梯子を登って行った。

「うそでしょ」

「あれってオリビアさんよね？」

「じゃああの絵は」

「いやまだあの男が描いているモノが『雪解けの夕暮れ』とは限らん」

観客たちがコソコソと話し出した。

迷いを滲ませる観客たちを置いて、映像はどんどん早送りになっていき、その間中ずつとノアさんが絵を描いている姿だけが写される。

最後にノアさんが梯子を登ってアトリエからいなくなると絵がアップで映された。

そこにあつたのは、オリビアがさつき発表したものと全く同じ『雪解けの夕暮れ』だった。

映像が止まると同時にオリビアが叫ぶ。

「偽造だ！ わつわたしはこんなことしていない！」

マイクも通さずによく響く声に、私はつい大きく笑い声を上げてしまう。

声が響くということは、オリビアを擁護しようとする声すら上がっていないということ。

高顔面偏差値の彼を守るような声を上げにくいのは以前レヴオルトが食品偽造を指摘した料理長たちが、本当に黒だったからだろう。

疑いたくはなくても疑ってしまう。声を上げるに上げられない。

観客たちの思いがよくわかる。

違う、あれは私じゃない。そう言い続けるオリビアに、一切の反論ができないようにしてやろう。

「では、オリビアさんにお尋ねしたい」

「なんだ！」

「この新作は面白い仕掛けを施したと聞きました、それが何か教えていただけませんか？」

「しっ、しかけ？」

明らかに狼狽えているオリビアは目を泳がせて「あの、えっと」と歯切れが悪い。

「さあ！ お答えください！」

考える間も与えないように促せば、唸りにうなつてオリビアはマイクに叫んだ。

「透かしだ！ 後ろの背景透かして変えられるようにしてるんだよ！」

「ほう、透かしですか？」

「ああ！ 招待状にも施されていただろう！」

ダメだ、まだ笑う場面じゃあない。

「では答え合わせの時間と行きましょう！」

仮面を付けて、映写機の光が消えたのに合わせ態と大きな音を立てて近くの机に登り、ステージに懐中電灯を向ける。

反対側からユウが照らしているもう一つの光が同じようにステージに向かった。

二つの光が重なって照らす先には『雪解けの夕暮れ』がある。

暗闇の中で唯一照らされた絵は青い光を反射させ、その光がキャンバスに大きく『ノア』の文字を浮かび上がらせた。

ただ描かれただけの文字ではない、夕暮れの中で少年の伸ばしていた手に巻き付きながらも夕暮れへと導くように描かれたサインが姿を現した。

「ノアとは、この作品の本当の作家の名前です！ これで証明されたでしょう、オリビアさんが今まで発表してきた全ての作品はノアの作品だったのです！」

シャルルが大きく手を広げると、会場全体の電気がついた。

会場の四方に飾られていた絵の隣には『作者、ノア』の文字や『模写されたノアのオリジナルの絵』が飾られていたり、全てに訂正が入っていた。

「ちがう！ 間違えたんだ！ これは確かにノアが描いたけど他のは」

「ええ、貴方が描いたものは最初の数点です。しかし、それもノアの模写。オリビアのオリジナルではなかったんです！」

マントを翻して観客の視線をその身に浴びたシャルルはその視線が離れないように、頭の中から指先まで神経を注いで美しい所作を意識する。

「そして、なによりも犯してはならない罪を、オリビアは犯しています」

『シャルル、月華が異常に気付いて中に入ってたよ』

急に入ったリリットの声にユウの方を見れば、彼女は軽く頷いてステージのほうに歩いて行った。

「彼は大罪を犯しているのです」

わざともらったいぶつて全員の視線を自分に集める。

ばたばたと騒がしい足音がどんどん近づいて、大きな音を立ててドアが開くと月華の隊員たちが会場に乗り込んできた。

隊員たちが声を上げる前に、マイクを使ってハッキリと告発する。

「オリビアは、顔面偽装という大罪を犯しています」

顔面偽装。事故ではなく、故意によつて顔を変えること。

元々の美しい顔で平等に評価することを第一としているこの世界では、死刑にもなりえる大罪である。

それをオリビアはしているのだ。

アラウドから初めて調査ファイルを受け取ったときの違和感は、昔の写真からの顔立ちの変わり方。

追加調査してもらうと、十歳になる前から両親が少しずつ手術をさせていたことと、成人してからも維持させるために度々やっていることが分かった。

あまりの内容に動きを止めてレヴォルトを捕まえるべきか、オリビアを捕らえるべきか



迷っているらしい月華を横目に今の内だと、急ぐ。

「もろもろの証拠はこちらを拝見ください」

調査ファイルに入っていた診断書のコピーをばらまきながら、ステージへと上がる。

先にステージ上にいたユウがテーブルクロスを捲り、机の下から真っ白なキャンバスを取り出して司会者に押し付ける。

「オリーブは僕たちの話を否定し、全て自身の絵だと言いたいのなら。そこに用意したキャンバスと筆を使って、実力で証明したらいい」

ユウの言葉に目に涙を浮かべたオリーブがその場に蹲つたのを見て、真上に手を伸ばす。視界の端で今更月華が動いていたが、そんなんじゃ間に合うわけがない。

「それでは皆さん。また、お会いしましょう」

仮面に隠されていない口元が弧を描き、シャーリングが指を鳴らす。

それと同時に再び、会場の電気がすべて落ちた。

「リリット！ 会場から出たよ！」

『お疲れ！ そのまま上に向かつて、下は月華が嚴重に固めちゃってるから』  
「リリイはどこにいるの？」

『もう脱出してよ、三つ隣の御屋敷の屋根で待機中！』

走って階段を登っているせいでゼーゼーと荒い呼吸が治らない。ユウと違って体力にも自信はないし、疲れることは好きじゃない。

それでもシャルルは鉄の味がする唾を飲みこんで、ひたすらユウの後ろを走った。

吉兆の美術館は最上階にテラスがある。

脱出経路のそこにリリットの指示に従って向かえば、月華と鉢合わせることもなかった。テラスから隣のビルに縄が繋がっていて、そこをターザンの要領で移動する。

「僕が先に行くから、シャルルは後に続いて。向こうでちゃんと受け止めるから勢いよく来てね」

ユウは金具を縄にかけると、それだけ言って簡単に向こうのビルへ行ってしまった。

「うそでしょ」

ビュービューと鳴る風の音に背筋が嫌に冷えた。金具を縄につけ、テラスの手すりに腰かけたところで急に腕を掴まれた。

「なっ」

「捕まえた、レヴォルト」

振り返るとそこにいたのは治安維持部隊兼月華の隊長。ハイネル。

走ってきたのか髪は乱れているのに息は上がっておらず、その綺麗すぎる顔にスツとした容姿が絵画の中の人物のようにすら見える。

目の前にいて言葉を発し、私の腕を掴んでいるのにこの男の存在は現実味を感じさせない。

驚いて開きそうになった口を閉じて、ゆったりとシャルらしく語り掛ける。

「月華の隊長さんじゃないですか、痛いから離してくださいませんか？」

「離すわけないだろ」

「私のような小物よりも、顔面偽装犯を放っておいていいんですか？」

腕を掴む力は弱くなることなく、寧ろひどい痛みを感じるほどに強くなっていく。

「お前、なんで顔隠してんの」

睨み合いが続いていた中で、急にハイネルは質問をしてきた。

それも、犯人の顔を見たいというよりは純粹な疑問と好奇心を浮かべた顔をしている。

「はあ？」

「見せてみいや」

ハイネルの手がシャルルの仮面に伸びる。

シャルルが顔を逸らすがその手はまだ追ってきて、仮面に触れる直前で急にハイネルが後ろに飛び退いた。

「うっわあああああああ！」

ハイネルの手が離れたことで、強制的にターザンロープが始まってしまい、情けない声が漏れる。

「とっ、チッ」

ビルに着いたところでユウに抱き留められた。ユウの片手に銃があつたのを見て撃たれてハイネルが後退したのかと納得する。

舌打ちをしたユウの視線を追えば、腰のベルトを縄にかけてハイネルが同じようにこちらのビルに来ようとしている。

「金具とつて、すぐいくよ」

ユウに言われた通り金具を取っていれば、ユウはハイネルが縄にぶら下がった瞬間に縄の中間地点を打ち抜いた。

縄が半分の地点で切れて、ハイネルが下に落ちる。しかし美術館の外壁に上手く着地したハイネルはそのまま壁を蹴ってこちらを目指している。

「シャルルいくよ！」

「うん！」

それからは一時間くらい鬼ごっこになった。

何度も撒こうとしてもハイネルは僕の方ばかり狙ってきたので、ユウとリリットにも協力してもらってやっと撒くことができた。

へとへとになってアジトに帰り、テレビを付ければどのチャンネルに切り替えても今日のレヴォルトが明かした真実について報道されている。

今までオリビアに渡されていた賞もノアのものにすべきでは？ という意見すらあり、嬉しくなつて頬が緩んだ。

静かだなと横を見れば、マウちゃんとゆきちゃんは着替えることも忘れて仮面も付けたままソファで眠ってしまっている。

一瞬だけ、とソファに全身を沈み込ませる。ちよつとだけと目を閉じたら意識はどんどん暗く染まっていた。

~~~~~

三か月後。

レヴォルトの三人はアジトに集まってテレビを見ていた。

今日は待ちに待った日。『ノア』が『路地の軌跡』と『雪解けの夕暮れ』の作者として、『新芽の賞』を授与される日だ。

オリビアに贈られていた賞が、本来の作者であるノアさんに贈られるのは当たり前のことだ。

テレビをジッと見ていると司会者の『ノアさんです、どうぞ!』の言葉にステージにノアさんが登ってきた。

両手と両足を一緒に出して歩いてる姿に、小さく笑みを溢してその姿を見守る。

「ノアさんすごい緊張してるね」

「こっちにまで移っちゃいそう」

ガッチガチに緊張しているノアさんに、ご年配の女性が賞状を読み上げる。

『ノア、貴方の作品は全て心に来るものがありますが。特に路地の軌跡、雪解けの夕暮れは涙を流しそうになるほど、感動を与えてくれました。よって貴方を今年の』

『までよおおおお!』

賞状が渡される寸前で、叫び声が響いた。

カメラがその声の方に向くと、そこにはボロボロの恰好のオリビアが立っていて、ふらふらとおぼつかない足取りでノアさんに向かって歩いて行く。

『おかしいだろ？ 俺の賞だったじゃねーか！ なんて、なんでランクスの俺がこんな惨めな思いしなきゃなんねえんだよ！』

オリビアはナイフを出すとノアさんに向かって走り出した。

「あぶないっ」

『キヤー！』

スピーカーから悲鳴が木霊し、人々が逃げ惑う。届くはずのない手を伸ばしたが、オリビアのナイフがノアさんに届く寸前でその身体が投げ飛ばされた。

『ぶっあえ』

呻き声を上げるオリビアの手を容赦なく捻り上げ、ナイフを取り上げたのはハイネルだった。

自分を抑え込んでいるのがハイネルだと分かったオリビアは、必死になってハイネルに向かって喚きだす。

『おっお前もSランクならわかるだろ！ なあ！ こんなことあっちゃいけないんだ！』  
そんなオリビアの身体を無表情で拘束すると、ハイネルは倒れ込んでいたノアに駆け寄った。

『おめでとう』

ノアに手を貸して、祝福の声だけかけてハイネルはオリビアを引きずってその場から捌けていった。

「へえ、いい人なのかな？」

ハイネルを見てそう呟いたゆきちゃんに「絶対ない」と返せば、テレビの向こうの司会者でさえ『かつこいい……』なんて職務も忘れて零している。

ご年配の女性が二度手を叩くと、気を取り直して授与式が再開された。

『……では、ノアに新芽の賞を授与します』

Aランク以下の人が『新芽の賞』を授与される人は初めてだ。

しかも顔面偏差値に関係なく生放送までされていて、メディアもめでたいことだと祝福の言葉をかけている。

賞状とトロフィーを受け取ったノアさんはとても嬉しそうにしている。だが、会場の拍



手はまばらで称賛の声も少ない。

レヴォルトの三人はそれを見ていた。

顔面偏差値の壁を越えて賞状を受け取れた人が出たことは嬉しい。

だが、まだまだ顔面偏差値で評価するという日常が大きく変わった訳では無い。

少しだけ進歩したことは確かでも、それは本当に小さな一歩だ。

そのことに、喜びと再度強い決意を固め、レヴォルトは独自の道を進んでいく。

よ なかけつきよく かお しだい  
世の中結局『顔』次第

---

著者 杏唯 淳  
キャラクターデザイン・イラスト 二千翔  
カバーデザイン はなぶさ まこと

2022年2月発行

発行 名古屋デザイン & テクノロジー専門学校  
印刷 オンデマンド  
連絡先 TEL(052)242-0035  
名古屋市中央区栄 3-20-4

---

無断転載・転記禁止